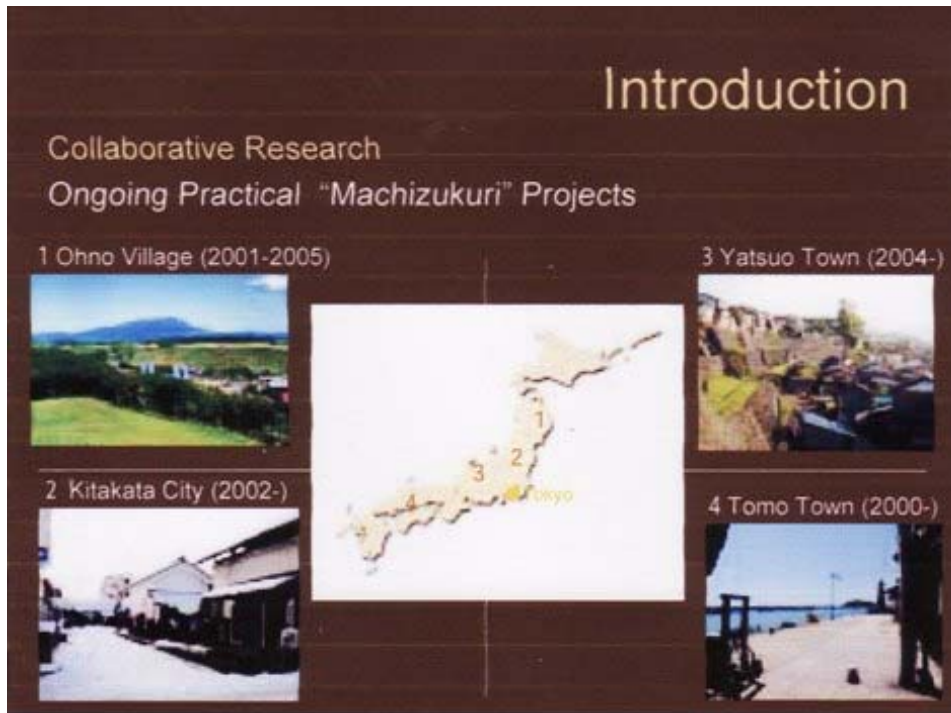
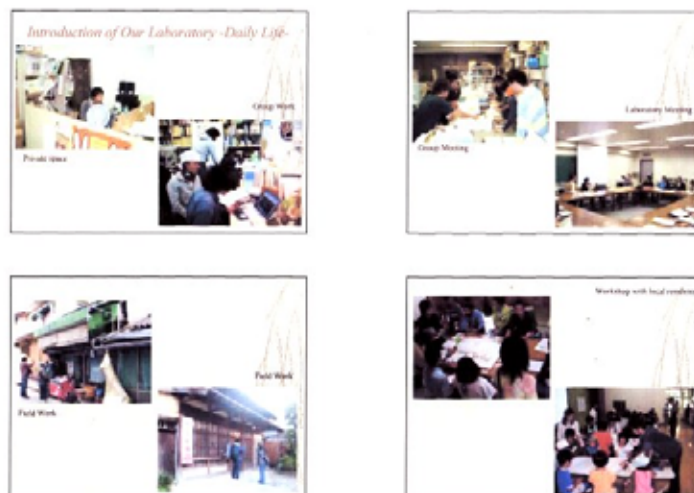


## 第5章 『観光まちづくり』に読み取る東大プロジェクト

### 研究室ホームページ「プロジェクト」は配電盤



研究室紹介 大野村、喜多方、八尾、鞆の浦まちづくりプロジェクト  
2006年11月バンコク研究室旅行先のチュラロンコン大学でのプレゼンテーションから



2004年11月ハノイ研究室旅行先のハノイ工科大学でのプレゼンテーションから

我々が経験出来ることは都市の全体からいえば、本当にごく一部。でも、なぜそれでプランニングができるかという、それは我々自身が人の立場を考えることが出来るから。プロジェクトで、様々な都市の人の話を聞いて、そういう人生に寄り添える imagination をもてるのが大事。だから、それを磨くこと。それが日々のプロジェクトであり、今のプロジェクトはそのためにある。

(西村幸夫 2009年忘年会演説) 『都市デザイン研マガジン』114号。

## 委託調査から発展

都市デザイン研究室ホームページの「プロジェクト」ファイルは、まちづくりプロジェクトの配電盤である。

そのまちづくりプロジェクトは、いつから始まったのだろうか。都市計画が専門である都市デザイン研究室が、行政から都市調査とまちづくり提案を委託され、教官と院生が現地調査して報告書を提出することから始まり、それが発展してきたシステムである。

その時期は研究室ホームページの「プロジェクト」ファイルを開いて遡及すると、1997年度に行き着くが、委託事業を脱してシステムとしての持続可能性を発揮したのが、2000年度に生まれた大野、神楽坂、鞆の浦の3つであることから、2000年をまちづくりプロジェクト元年とし、それ以前はプレまちづくりプロジェクトと考えた。次は、ホームページに掲載されているプレを含むプロジェクト一覧である。

このファイルは、更新が追いつかず一部機能していないが、2010年7月現在、「2009年度」として、次の表示がある。

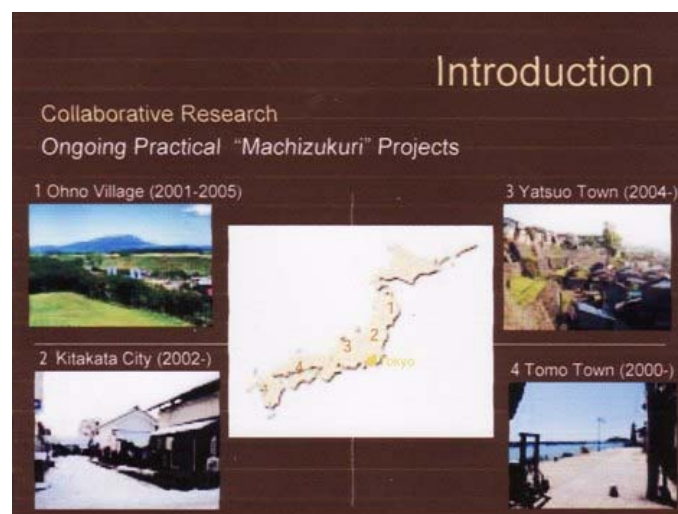
足助プロジェクト 高山プロジェクト 鞆プロジェクト 佐原プロジェクト 浅草プロジェクト 新宿 神楽坂プロジェクト 構想力プロジェクト 水辺デザインプロジェクト(仮) ワークショップ&コンペティション その他 大田プロジェクト アーバンデザインセンター 展開・郡山(UDCKo) 柏の葉(UDCK) 田村(UDCT)

都市デザイン研究室まちづくりプロジェクトの変遷		
何年度とあっても内容は前年度報告からの場合があり、発足年度とずれることがある。 は初出。		
1997～1999年度	小木町(新潟県)伝統的建造物群保存地区の調査 福井県上中町(熊川宿) 伝統的建造物群保存地区の調査 (「研究室プロジェクト」と初出) 二戸市(岩手県北地域再発見事業) 久慈市(岩手県北地域再発見事業)	内容は出ない
1999年度	釜石市(岩手県北地域再発見事業)	
2000年度	大野村(岩手県) 神楽坂(東京都) 鞆の浦(広島県福山市)	
20001年度	大野村(岩手県) 喜多方(福島県) 神楽坂(東京都) 小田原市板橋(神奈川県)内容は出ない 古川(岐阜県) 鞆の浦(広島県福山市)	
20002年度	大野村(岩手県) 喜多方(福島県) 神楽坂(東京都) 小田原市板橋(神奈川県) 鞆の浦(広島県福山市)	

2003 年度	大野村(岩手県) 喜多方(福島県) 平瀬(岐阜県白川村) 鞆の浦(広島県福山市)	神楽坂いったん消える
2004 年度	大野村(岩手県) 喜多方(福島県) 平瀬(岐阜県白川村) 鞆の浦(広島県福山市) 八尾(富山県八尾町)	
2005 年度	喜多方(福島県)喜多方分室 京浜(横浜市) 八尾(富山県八尾町) 鞆の浦(広島県福山市)	21 世紀 COE プログラム「都市空間の持続再生学の創出」
2006 年度	喜多方(福島県) 京浜(横浜市) 八尾(富山県八尾町) 鞆の浦(広島県福山市) 新宿(東京都)	
2007 年度	喜多方(福島県) 八尾(富山県八尾町) 新宿(東京都) 高山(岐阜県)	
2008 年度	足助(愛知県) プロジェクト 高山(岐阜県) プロジェクト 鞆の浦(広島県福山市) プロジェクト 佐原(茨城県香取市) プロジェクト 浅草(東京都) プロジェクト 新宿 神楽坂(東京都) 都市空間構想力プロジェクト	この年度から「プロジェクト」と表記  神楽坂が復活
2009 年度	足助(愛知県) プロジェクト 高山(岐阜県) プロジェクト 鞆の浦(広島県福山市) プロジェクト 佐原(茨城県香取市) プロジェクト 浅草(東京都) プロジェクト 新宿 神楽坂(東京都) 都市空間構想力プロジェクト 水辺デザインプロジェクト(仮)	一過性
2010 年度	神楽坂プロジェクト再独立	

『観光まちづくり』東大関係執筆陣（掲載順）			
執筆教官	項目	所属	掲載頁
西村幸夫	1.まえがき 2.、総論「観光かちづくりとは何か」 （神楽坂は、200 年度以来関わりが深い）	工学系研究科都市工学 教授から 2008 年 4 月先 端科学技術研究センタ ー教授	3~28
野原卓	1.観光とまちづくりの境界線を越えた取り組み 2.喜多方「生活と観光が隣り合わせの『蔵ずまい』 のまち」 （大野町、喜多方、京浜臨海に主として関わる）	先端科学技術研究セン ター助教(2010 年 4 月か ら横浜国立大学准教授)	43~53 154~166
中島直人	越中八尾「おわら風の盆」を支える観光まちづく りの「ふところ」 （鞆の浦には一貫して最も関わり、次いで浅草、 八尾に主として関わる）	東大工学系研究科都市 工学助教(2010 年 4 月か ら慶応大 SFC 専任講師)	67~190
窪田亜矢	観光の視点から考えるまちづくりの課題 （佐原、佐助に主として関わる）	工学院大准教授から東 大工学系研究科准教授	268~282
岡村祐	「まちづくり」から「観光」への接近～我が国に おけるその潮流	東大工学系研究科都市 工学で博士号取得後首 都大東京大学院観光科 学専修助教	30~42
故北沢猛	『観光まちづくり』の執筆はないが、記事に登場 （アーバンデザインセンターUDC の開設者、大野 村、喜多方、京浜臨海プロジェクトの生みの親）	横浜市都市デザイン室 長、東大工学系研究科都 市工学助教から新領 域創成科学研究科教授	2009年12 月22日死 去

## 東大プロジェクト各論



研究室紹介 活動するまちづくりプロジェクト

2006 年 11 月バンコク研究室旅行先のチュラロンコン大学でのプレゼンテーションから

観光まちづくりを実践する現場の多くが、生活か観光かという命題の中でどのようなバランスを構築すべきかで揺れており、これは、ある意味、永遠の課題である。しかし、ここで「生活 観光」という二項構図を一度忘れてみることで見えてくることはないだろうか。裏を返せば、このまちづくりとも観光とも言えない部分に新たな展開が眠っているとも言える。また、まちづくりも観光も難しかった、言わば、打ち捨てられた場所に、「観光まちづくり」を導入することで、地域の価値を高める逆転の発想である。(野原卓)『観光まちづくり』p.45。

この野原執筆文章が、2010年度大学入試において、和歌山大観光学部の小論文に採り上げられた。ただし、論考中どの部分なのかは不詳である。

## 1. 大野村 逆転の発想

### 研究室提案・設計アドバイスの味菜館

筆者も地域づくりに携わった岩手県旧大野村(現洋野町)それぞれの事業や活動を楽しみながら、観光にも用いるという前向きと軽やかさ、そして何より、人びとのあっけらかんとした笑顔が持続につながる秘訣である。ここに観光まちづくりのヒントが隠されている。(野原卓)『観光まちづくり』p.53

大野村プロジェクトは、2000年度に誕生した。鞆の浦、神楽坂などとともにスタートにつき、まちづくりプロジェクト元年を実現した。都市デザイン研究室ホームページ「大野村」は、2000年度の項に、「大野村のまちづくり」を次のように載せている。

1. 大野村の概要 岩手県の北端に位置し、人口約7000人の大野村の特徴は、村の地理的中心に大野デザインセンター(年間27万人の集客力)を設けたことにあります。

私たちの目的意識 しかしながら、大野地区をはじめとする昔からの市街地や集落と、新たな拠点として据えられたデザインセンターがお互いに生かし切れていないようにも思われます。そこで大野地区の良さを見つめ直すことから、大野村全体のまちづくりを考えます。

3. これまで行ってきたこと、これからやろうとしていること 文献による事前調査 広域構造、同規模都市との比較分析、大野村の歴史、空間資源、土地利用現況、アイデア出し。

2000年9月15日 大野村に到着、概要を伺う、現地を見る。9月16日 大野村を歩く。デザインセンターを体験する。ヒアリング。夜からミーティング。9月17日 作業継続。地元の方とともにワークショップ開催。100のまちづくり案のアイデア出し。各班のテーマは以下。

1班 大野村全体 2班 大野地区中心部のネットワーク 3班 西大野商店の敷地の具体的設計。

これからの予定 地元の方とのワークショップでの議論をもとに、まちづくり案を作成する。

それ以後の活動の充実ぶりに惹かれた私は、2004年10月に現地参加した。北沢猛、野原卓ら教官と院生が一体となって取り組んでいる実情を著書『西村幸夫「都保全計画」』に書き込んだ。大野村は平成の大合併で、2006年1月1日に合併して洋野町になったため、プロジェクトを終えた。

## 人間心理の洞察



大野基地の院生たちの活動状況、立って励ましているのは野原卓、右端が筆者（2004.10.30）

野原卓の筆法は、ソフトでありながら、鋭い舌鋒である。スマイルを絶やさないが、剛直に発想を問いつつ、軽快なフットワークで知られる。『観光まちづくり』の論考も、要するに「発想の転換」を自らに問い、他にも問うているのである。行間ににじむのは、現実の一步先をいきながら現実であるところを立ち上げる知性と情熱である。

日常化し常套化し馴れ染めてみなが通り過ぎる道に、あえて未来のために引き起こす新鮮な目線を提示していく。何も無い、あるいは何もなくなっただと思われている地点と地平に、このような見据え方でそれが開けるのではないかというヒントを、人間心理を洞察しながら発信しつづける。同書の野原論考を表にしてみると、ソフトをまとったシャープな物の見方、考え方が如実に浮き上がってくる。

観光まちづくりの人間心理から発想の転換まで		
冷静	すでに実践されている観光まちづくり	・観光とまちづくりは必ずしも横並びにできる言葉ではない。(p.43)
人間心理	生活と観光の揺れる思い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活か観光かという命題の中でどのようなバランスを構築すべきかで「揺れ」ており、これは、ある意味、「永遠」の課題である。(p.45)</li> <li>・マナーを守らない観光客に「辟易」とし、居住者自ら行う「素朴」なボランティアガイドは対応が悪いと非難される。自らが観光対象であるという認識も薄いため、うまく観光から利益を採り入れる事ができず、建物の改修も積極的に進まない。その結果、観光客にも「魅力」が伝わりにくい...、という負のスパイラルを描き、地域は、その資源を観光にうまく活かすことができずに「苦悩」するのである。(p.44)</li> </ul>
永遠	日常 × 観光 = 日常観光 生活そのものが観光になる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅に友達が遊びに来るとき、自宅の最寄りのまちでちょっとした食事がしたいと思い、まちの名店を考えてみても、意外と自分のまちのことを知らずに思い浮かばなかったという経験はないだろうか。そこで、改めて自分のまちを「巡って」みると、「気軽に」何度も訪れたいくなる「隠れた」名店など、日常の中に「魅力」があふれていることに気づく。(p.44)</li> <li>・まちづくりの担い手自らが観光客として訪ねたり、自分の地域を観光するなど、新たな構図を見ることができる。</li> </ul>

		(p.46) ・日常観光が成立するためには、「永遠」のリピーターである地域の人びとを納得させる質を必要とする。(p.46)
作品と背景	ものづくり・アートの産業観光	産業的側面としてだけでなく、文化芸術的側面からものづくりを見直すと、一つひとつのものに異なる価値が発生する。作品としての「もの」と、ものが作られる「背景」を知ることが観光化され、これが、都市と地方を結ぶカギとなる。(pp.50~51)
軽やかな	小集落×観光 軽やかな小単位の観光まちづくり 各地域に工房	・自らのまちをおこす手段として巧みに観光を用いることが多くなっており、ここに、十数戸とか、一集落といった、ミクロな単位での観光まちづくりを見ることができる。(p.52) ・筆者も地域づくりに携わった岩手県旧大野村では、地域の基幹である農業生産だけでなく、地域のコミュニティ、そして地域資源を生かした観光の拠点といった複合的な視点を合わせ持つ地域づくりのために、各地域に工房(農産物加工施設)が整備され、これを地域住民自らが運営している。(p.53)
免疫力	小単位での自立 外部資本乱入防止	・(小単位での自立は、外部資本の乱入を防ぐ「免疫力」もあわせ持つ)。こうした小単位の動きの中に、交流をエネルギーとしながら、自らが立ち上がり、地域の価値を高める観光まちづくりという、一つの方向性を見ることができる。(p.53)

## 永遠のリピーター

ソフトな語り口でシャープな論説の野原が、「素朴なボランティアガイドは対応が悪いと非難される」「自らが観光対象であるという認識が薄い」と指摘している。ボランティア活動のことは、未熟、粗野でも批判しにくいものであるが、直言できるのは力量である。

実際、旅先の地域ガイドの説明は、魅力に乏しいことが少なくない。こちらがシニアのせいもあるが、明晰でなく聞き取りにくい。懸命さに頭は下がるのだが、詰め込み主義のテキストに偏しないで、プロの観光ガイドなどの語り口のいいところを吸収してもいいのではないか。仲間うちの切磋琢磨だけでは、オタクガイドに陥りやすい。観光まちづくりは、こうした面でもツアコンやガイドとの接触を通じて、交流の新しい可能性を開く必要がある。

野原は「揺れる」「思い」「苦悩」という語で心理をゆさぶり、資源を観光にうまく活用できずに「苦悩」する地域の人に、「観光を上手に使って」「観光化し過ぎない観光まちづくり」(p.45)をと語っている。例示については、野原の場合、住んでいるまち再発見の足がかりの示し方が、平らで鋭い。外部からの観光客を待つだけでなく、住民をして足元のまち「巡り」を思いつかせる語り口が、円滑である。

また野原によれば、日常観光が成立するためには、永遠のリピーターである地域の人びとを納得させる質を必要とする。この質は、無理な観光振興を必要としないで、軽やかな観光スタイルを生む。近年の「湘南スタイル」や「世田谷ライフ」などがそうだという。

そのことに惹きつけるために「永遠のリピーター」というロゴを駆使して、人間心理に訴える手法は、知的で情緒的で、観光客はもとより住民をしてハッとさせる訴求力がある。

野原論考に触発されて振り返ってみると、大岡昇平の『武蔵野夫人』の舞台になった野川の自然環境を再認識したまちづくりをめざす私の提唱で、「武蔵野夫人フォーラム」を1993年から4年間、小金井市で毎夏開催したことがある。自分が所属している「A R」(アメニティ・ミーティング・グループ)というアメニティ総合研究・実践市民団体と小金井市などの共催である。

作者が主舞台にしたハケと呼ぶ湧水斜面のつづく野川は、延長20キロ、源流の国分寺市から小金井、調布、三鷹、狛江市を経て、世田谷区の多摩川合流地点までの1区5市を流れる。その流域住民に、『武蔵野夫人』に描かれた環境を想起してもらい、自然保全型まちづくりの契機づくりを訴える趣旨だった。第1回は中学校で開いたが、参加者が会場の教室から廊下にあふれた。

講師には、野川流域在住の成城短大長や作家の長野まゆみらを起用した。市長も参加するこのイベントを4年間もつづけながら、期待された観光まちづくり的な運動の台頭につながらなかったものの、日常観光の魅力は相応に認識されたと思われる。

それによって、居住者にとっては、なんの変哲もないと思っていた、地域の日常生活に張りを与えるよききっかけとなるというのは、野原の持論であるが、武蔵野夫人の舞台という水と緑に恵まれた地域でも例外ではなく、住民をして案外その豊かさに慣れっこになって、変哲がないと思っていた情性に気づかせる結果をもたらした。

さらに、野原の産業観光についての展開は、ものづくりの復権を打ち出しながら、人間心理を考え、「文化芸術的側面からのものづくり」と押さえたいうえで、作品としての「もの」と「もの」がつくられる「背景」を知ることが、観光まちづくりの鍵になっていくことを示唆した。

そういえば、私が北斎に足に地のついた親近感をもったのは、文献や展覧会での鑑賞や解説からではなく、墨田区北斎通りの街灯と公園トイレにプリントされた103点の北斎画に出会ったときだった。北斎の生地における顕彰で、野原のいう「軽やかな観光スタイル」を実感した。「軽やか」という語は、観光まちづくりの心理を支える効果がある。

都内では大田区以外に、台東区・荒川区・足立区・墨田区・葛飾区もものづくり区であり、台・荒・足・墨・葛の5区は共同して地域資源の開発を行っている。各区の頭文字を合成した「TASKプロジェクト」の活動で、「TASKものづくり大賞」を実施するなどして、ものづくりの観光まちづくりを切り拓いている。

## 「日常×観光」「小集落×観光」

ところで、野原は岩手県の大野村に進出していた東大都市デザイン研究室の「村おこしワークショップ」の面倒をみていた。「日常×観光」「小集落×観光」の社会実験場だった。小単位での自立は、外部資本の乱入を防ぐ免疫力もあるという見解は、これまた心理を見通す表現である。もっとも、小集落・小資本での観光まちづくりには、ツーリズムの「巡り」を効かせる工夫が必要であろう。

2000年に大野村にプロジェクト基地を構えたのは、北沢猛助教授(後に教授、2009年12月急逝)だった。大野村基地に着目した私は、研究室新入りながら、2004年10月30、31日2泊3日で野原に同行して赴いた。

最も印象的だったのは、東大側提案で完成した「味菜館<sup>あじさい</sup>」の見学である。そのパンフレットには、「施設概要 設計アドバイザー」として、「東京大学工学部都市工学科 都市デザイン研究室」の名が印刷してあったのである。





収穫祭でも野原卓（少女の後ろ）は大歓迎された（大野村権谷地区 2004.10.31）

## 大野村基地ルポ

次は研究室ホームページ「熟年聴講生日誌」および著書『西村幸夫「都市保全計画」』（pp.139～143）に載せた私の大野村基地ルポである。

児童館・漬物工房の設計監修などむらおこし7年



佐々木村長と野原助手の歓談（権谷地区秋の収穫祭、2004.10.31）

みちのく岩手県大野村で、東大都市デザイン室の村おこしワークショップに参加した。野原卓助手に同行したが、帯島地区班と水沢地区班とに分かれて、公共施設に東大基地があった。「都市」を専攻している大学院生たちが、都会とはかけはなれた農村に入って、村おこしボランティアに目を輝かせているというのは、みごとなバランス感覚教育である。とくに知的偏向をとやかくいわれる東大による、このような村人の中へ飛び込んでの自主活動を報じなかった報道人は怠慢ではないかと思った。

訪村は2004年10月30、31両日の泊りがけだった。折しも出発直前に国立マンション訴訟が、高裁判決で住民側の逆転敗訴となった。景観利益をめぐる司法消極主義に基づくというが、市民社会の熟成により、風景のコンセンサス・レベルが上がっている潮流に逆行し、しかも景観法の制定・施行の年に、時計の針を逆回したようなこの判決を聞いて、裁判官はバランス感覚を失っているのではないかと失望した。

法科大学院を雨後の筍のように創設してまで、法曹人を大幅増加させようとしている国のねらいをひとことではいえば、バランス感覚のある法曹人の育成をめざすことではないのか。国立逆転判決のような裁判官が乱造されてはどうなるのか。法科大学院で東大大野プロジェクトのようなバランス教育を行うのだろうか。

大野村は「一人一芸」をキャッチフレーズにしている。九戸高原の中心部にあって人口7000人足らずの村だ。広さは135キロメートル。酪農と木工の村で、バター、チーズ、ヨーグルト、アイスクリームや木製コップに至るまで手づくりの里である。

大学との産学協働ならぬ村学協働の村おこしは、大学といっても文系学生の活動ならいざしらず、工学系の大学院生だけで、村民への活性化アイデア提案、それもコンピュータグラフィック

スによる現地での完璧なちらし、リーフレットづくりから、村人とのワークショップの運営まで、表方から裏方まで一切やってのけていた。

近ごろの若者は、今の教育はと自分たちのことを棚に上げて批判がましい世間においても、学生のボランティア活動は相応に盛んである。しかし、そこにおいては文系学生が企画、交渉、宣伝などを担当し、工学系学生はまちなみの図面化やノートパソコンによる資料づくりに専念していることが多い。その点、大野村の例は、たのもしい試金石である。



大野村で追い込みの資料づくり 中央筆者（2004.10.30）

大野村へは、東北新幹線二戸駅から車で1時間。少子化で今春廃校になり、地区センターに変身していた小学校に着く。玄関先に手描きイラストの村地図が看板のように立っていた。入り口の若々しい手描き地図は、大学側の提案に応じて、村の高校女生徒らがつくったのだった。近くにそびえる山桜の名木や、村に戸しかなくなった曲がり家の案内板もその手になった作品だった。

東大基地になっている近くの施設に入ると、広い畳敷きの部屋に座卓が散開し、ひとり、またはふたりが各自のノートパソコンで、提案のディテールと画像手直しの追い込み中だった。野原教官は、ひとりひとりの肩をたたいて助言していく。筆者も学生側で訪れているので、その仲間に加わり画面を見つめて参加した。都市プランナーやコンサルタントに迫る緻密で斬新な編集作業であるため、ただ見とれていただけの参加だったが、毛布を渡してくれる学生もいて、畳に寝転がって日本の教育と村おこしのことを考えていた。

したり顔の人は、他大学や文系をも誘い込んで、村内活動の対外強化をとというが、工学学徒として自力で文理シナジーの実を上げるこのプロジェクトは、総合的工学構築の道である。もともと都市デザイン研究室は、生産工学と違い、社会工学的に学際を開いた研究室である。

東大のこのプロジェクトは、毎年数日間ずつ何度もチームで訪れ、村の施設に寝泊りして、万年床もどきの徹夜作業でコンピュータグラフィックスの提案資料を仕上げ、村長も出席する村民との提案ワークショップで、熱心に採用を呼びかけるのだった。会場では、開会30秒前まで幾人もの学生が片隅でノートパソコンに向かっていて、パワーポイントでプレゼンテーションするのに、完璧を期すのだった。

村内には、近年「おおのキャンパス」という名で呼ばれるエキゾチックでハイセンスな産業デザインセンター、宿泊施設、酪農、木工・陶芸・裂き織り体験教室、動物ふれあい館、道の駅、パークゴルフ場などの複合文化エリアが出現した。こうした整備などが効果を発揮し、年間30万人の観光客が集まるようになったという。

それはそれ、ワークショップでは、好ネーミングの「感農村づくり構想」「風景むらづくり」「  
あじ味

さいかん  
菜館周り芸能舞台提案」などが発表された。さらに、散在する白い建物をとらえて「地区カラーにホワイトを」という提案もあった。味菜館は大学側提案で今春オープンした「漬物工房」である。その前庭と裏庭で、南部藩に伝わった日本最古ともいわれる盆踊り「ナニヤドヤラ」、重要無形文化財の舞い「えんぶり」や神楽などの伝統芸能行事をという提案である。

2日目、野原教官と味菜館を訪れた。おいてあったパンフレットを見ると、「施設概要 設計アドバイザー」として「東京大学工学部都市工学科 都市デザイン研究室」の名が印刷してあった。

次いで赴いたのが、林郷の権谷地区の収穫祭だった。この収穫祭も大学側の提案で実現した行事だった。佐々木村長もにこにこ出席した地区センターの卓上には、漬物がずらりと並んだ。

帰途につく日、村長と大学側との恒例ミーティングがあった。この会合は首長とさしむかえで、教官からは大学側提案の総括説明、学生ひとりひとりからは自分の提案と意見を発言する。村長も逐一答えていく。臆せず堂々と意見を述べる学生たちをみて、社会に出ればそうして首長や要人とさしではなかなか会えないことを思うと、このセッティングの持続は貴重に思われた。

帰りは、パソコン機器類を担いだ登山青年風学生たちと、夜の二戸駅から新幹線に乗った。居眠りも交わる車中談義で、「大野村は楽しい。村人はやさしい。またいきたい」のフレーズが異口同音に飛び出す。偏差値教育の終着のように入れられる、東大の人間的本領と底力をみる思いがした

筆者はまた 10 年前に二戸市金田一ホテルにおける、まちづくり市民財団主催の「二戸カシオペア物語」イベントで、シビクトラストについて講演したときのことを反芻しながら、学生たちの言葉を聞いていた。カシオペアは、当時の広域行政エリア内市町村の位置を星座カシオペアに見立てての呼称だった。

翌日、研究室で中島直人助手に大野訪村の話をして、別の遠地ワークショップの実例として福山市鞆の浦の実践資料をもらった。とくに研究室有志発行の『鞆雑誌』は、見ごたえがあり、今は、鞆の浦の過去から未来までのくらしをテーマにした『鞆絵本』づくりの最中ということだった。

都市デザイン研究室有志という形のいわば「バランス感覚フィールド」は、その他富山県八尾市、福島県喜多方市など数箇所で行われている。複数箇所参加の学生も多く、修士論文執筆の時間を割いてまでの自主的積極参加は評価したい。

ルポは以上である。都市デザイン研究室のまちづくりプロジェクトの実践を論文にすることを歓迎しているが、なかなか状況が捕捉できない。『都市デザイン研マガジン』に紹介されると、それがかなりできるのだが、ほとんど誌面に出ない。研究室にその集約蓄積の機能がほしい。

日本建築学会大会学術講演梗概集を繰っていると、2009 年度梗概集 E2 農村計画に大野村について、西原まりの論文が載っていた。「水沢地区におけるパートナーシップによる地域づくり 岩手県大野村集落地区におけるまちづくりの実践 その 3」である。3 とあるところからすれば、それ以前から発表していたことになるのだろう。こうした例は少なくないと思われるが、捕捉できない。

## 『都市デザイン研マガジン』 大野村

マガジン 創刊号 2005.4.15	大野村 岩手県北部の村。2000年から入村活動。5地区のうち拠点地区を毎年変えて、Campus Village Planを進めている。水沢地区の愛称「みっちゃあ」を冠した「みっちゃあミュージアム」や地元の人たちとの案内板づくりもし
--------------------------	---

てきた。

2号 (2005.5.1)

### 大野村プロジェクトで誕生したM1の詩

大野村プロジェクト参加から生まれた竹山奈未 (M1) の詩「卒業設計～ただいま/おかえり」  
Problem-集落が消える ただいまをいう時、ひとは安心してゐる それは、おかえりを言ってくれる人がいるから。



帰省。Uターン。過去と向き合い、自分と向き合い、再び出発する。そんな当たり前のことを失おうとしている人たちがいる。

Site-それは岩手県大野村水沢のひとたち 三つ沢が合流するみつさわ、みつさわ・・・みずさわ。地元の人はみっちゃぁと呼んでいる。沢の音の絶えない、水も空気も澄みきったところ。

ここに10個以上あった沢沿いの集落が 高度経済成長期以降、どんどん消えている。(以下略)

8号 (2005.8.1)

トップ

研究室設計監修の児童館、評判上々

北沢・野原両教官、大野村完工施設を訪問

煙舞う京浜臨海部に没頭する日々の中、岩手県大野村に霧舞う「やませ」もまた愛し。7月9(土)-10(日)、北沢猛教授と大野村を訪問しました。大野村は来年隣の種市町と合併し、洋野町(ひろのちょう)となります。(野原卓助手)



完工した林郷児童館



センス光る竣工したおおのパン工房売場



ボランティアで桜周りの草刈り



児童館横の畑



大野村唯一の曲家



完成したおおのダム

1) 林郷児童館竣工 当研究室で地域づくり(一昨年度)及び設計監修を行った大野村林郷地区の林郷児童館が4月より開館しました。評判も上々のようで、こどもたちにも楽しく利用されました。

2) おおのパン工房OPEN 4/23より水沢地区の旧小学校(現地区センター)の木造校舎+増築を

利用した「おおのパン工房」がOPEN。20 - 30代の女性組合員を中心に、若いセンスの店で日々繁盛しています。

3) おおのダム桜植樹 同日(4/23) おおのダムのOPENも記念して、桜の植樹が行われました。ソメイヨシノ、ヤマザクラ、オオヤマザクラ合わせて350本の木を「桜の会」から譲り受け、地元の方々を中心に植樹しました。視察当日(7/9)訪れると、地元ボランティアが草刈に精を出してくださっておりました。

4) 水沢縄文きてける祭り 水沢小学校統廃校のガックリも払拭して、地域の元気を取り戻す企画として昨年開催された縄文きてける祭り、今年も開催予定(9/25)。プロジェクトJ(中学生中心の地域づくり集団)もお手伝い、おおのパン工房も参戦。曲家開放企画も計画中(予定)

## 12号(2005.10.1)

### おおのむら・・曲家開放実験「えんがわカフェ」大盛況



野原助手の不敗神話(無降水記録)崩壊の雨降りしきる9月25日、大野村水沢地域で「みずさわ縄文きてける祭 in 長月」が開催されました。特にM1竹山・西原の監修により、茅葺き曲家を実験的に開放させていただき、一日だけの「えんがわカフェ」をOPEN。阪口店長、戸田マスターの下、地域の中高生を中心に営業し、大盛況と相成りました。中では囲炉裏のぬくもりを囲み、昨年度地域づくり計画みっちゃあミュージアム構想や茅葺き要覧、竹山卒業設計「ただいまおかえり」の展示を見ながら、おおのパン工房のパン試食とコーヒーでホッと一息。

## 18号(2006.1.1)



「大黒屋のばあちゃん」を囲んで

**大野村再訪記** (OB 中村 元) 就職して早3年が過ぎようとしている昨年12月、修了して以来、初めて、同期4名で「大野村」へ行ってきた。突然の訪問だった上に、陽も落ちた夕刻に到着したにもかかわらず、村の方には本当に温かく歓迎していただき、在学時から感じていた農村ならではの「温かさ」を改めて実感した。「寒波」までも、時期を早めて歓迎してくれたのには参ったが...

いまや、東京の街中で、人の本当の「温かさ」を感じることでできる“場”はほとんどない。自然のルールに逆らうことの愚かしさを、身をもって学んできた農村だからこそ、人の「温かさ」やゆったりした時間の流れを当たり前で享受できるのだろう。そのような「温かさ」を演出・提供する”場“の創出こそが、一人一人の明るさを増幅させ、町中へあふれ出させ、農村ならではの賑わいを創出できるのではないだろうか。そのためにも、合併しても、これまでに築いてきたポケットパークや豆風鈴、児童館などの”場“の活用が継続されることを期待したい。

また、突然の訪問にもかかわらず、色々ともてなして下さった役場や推進部会の方々の自然な笑顔や、扉越しに「きよとん」としながらも歓迎してくれた大黒屋のばあちゃんのかわいらしい笑顔を忘れることはないだろう。また、村に行かなくては...「大野村」という名前はなくなっても、「おおの」の人も場所も、何ら変わることはないのだから...。

(編集部注) 今回の訪村は中村氏のほか田中暁子、平井朝子、羽藤和紀の3氏。1週間後の12月18日、大野村の「閉村式」が行われた。

20号(2006.2.1)

## トップ 大野村閉村と「おおの・キャンパス・ビレッジ」

### 永遠なる大野村から新生・洋野町へ

守護神・野原の持つ「訪村晴天不敗神話」も異常気象には勝てず、時折粉雪の舞う12月17日18日、北沢教授をはじめとして、D2岡村、M2西原、M1竹山、私で、研究室最後の訪「村」であった。そう、大野村は、種市町との市町村合併により2006年1月1日からは、新生「洋野町」(ひろのちょう)に生まれ変わる。

12月18日、村民1000人を集めて盛大な閉村記念式典が行われた。伝統芸能が式典を彩り、懐かしい写真や村の子供たちの歌声に包まれる中、北沢教授を始め、大野村発展に貢献した方々には感謝状が贈呈された。

もう一つ、閉村を期に、大野村と東大との7年間をまとめた「おおの・キャンパス・ビレッジ」を刊行した。

北沢教授からのこれからの地域づくりへのメッセージをはじめとして、長年にわたるリサーチで掘り起こした地域資源、消防センターを皮切りに児童館まで続く施設整備、地域を盛り上げる夢市やえんがわカフェといったイベント、そして、各地域づくり計画と、正に集大成である。



閉村式の伝統芸能



大黒屋のばあちゃん + 北沢教授



「おおの・キャンパス・ビレッジ」

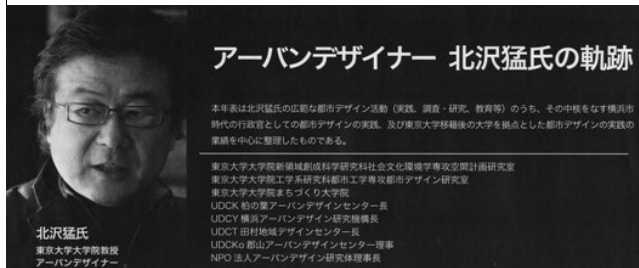
残念ながら「大野村」という村名は姿を消し、プロジェクト名も「むら」ではなくなる訳だが、それでも、各集落や地域とその地域の人々の笑顔は、変わらない。むしろ、何にも負けない集落単位の地域づくりを目指してきたのだ。

P.S. 私たちの(少なくとも私の)第二の故郷、(旧)大野村に、今一度、足を運んでみてはいかがでしょうか。(野原卓助手)

## 補遺

当時の助手・遠藤新工学院大准教授の大野村回顧

2010年3月14日、東大工学部11号館で「アーバンデザイナー・北沢猛氏の軌跡」(北沢先生の業績を思う会実行委員会)が開催され、「東京大学での実践から 岩手県旧大野村」について、工学院大建築都市デザイン学科准教授・遠藤新の話があった。大野村プロジェクトを率いた北沢猛の活動をめぐる回顧と評価である。以下は私のメモと配布資料から記述した要旨であるが、『都市デザイン研マガジン』記事の総合的理解のために、時宜を得たプレゼンテーションだった。



ありし日の北沢氏 (配布資料)



遠藤新の旧大野村プロジェクト報告

遠藤は「ご本人は楽しんで悩んでいた」と話し出した。ルールではなく、アーバンデザインを大野村という農村地域にどう活かすかについての現実の厳しさがうかがえる。この課題を克服するために北沢は、拠点と全体をうまく機能させる手法を駆使した。サテライト・キャンパスとキャンパス・ビレッジをうまくネットさせることに成功した。このために、米国のアーバンデザイン調査に飛ぶなど広い視野からの活動だった。

年月	大野村プロジェクト 超概略年表
2000.9	「キャンパスビレッジ構想」の提案
2001.3	消防コミュニティセンター竣工
2001.8	大野村夢市2001開催(+2002.8,2003.7,2004.7開催)
2002.3	明寿橋改修、街路灯(第一期)整備
2002.4	豆風鈴(大豆加工施設)オープン
2003.3	ももむらポケットパーク整備、街路灯(第二期)整備
2003.4	向田児童館オープン
2003.5	雑穀黄金(そば加工施設)オープン
2004.3	権谷地区センター竣工
2004.5	味菜館(漬物加工施設)オープン
2004.10	みずさわ縄文きてけろ祭開催(+2005.9開催)
2005.4	林郷児童館オープン、おおのパン工房オープン



#### サテライト・キャンパス構想

「ももむら再生計画」  
 ・明寿橋改修、街路灯、ポケットパーク、コミュニティ消防センター、夢市開催

「向田地域づくり計画」  
 ・豆風鈴、児童館、地元大豆畑(生産拡大)、三本木木工周辺

「林郷スクール構想」  
 ・雑穀黄金、児童館、収穫祭開催

「帯島芸術ファーム構想」  
 ・味菜館、地元映画館での地域活動

「みっちゃあミュージアム構想」  
 ・おおのパン工房、大野ダムきてけろ祭開催



(各地域)地域づくり推進部会による構想・計画策定 ← 東大調査・提案・その他支援

遠藤のスライド構成は次の通りである。

#### 1. 大野村プロジェクト超概略年表

#### 2. 大野村プロジェクト

おおの・キャンパス・ビレッジ構想：村全体の新しいビジョン

サテライト・キャンパス構想：元村、向田、林郷、帯島、水沢

大野村の個性さがし：各集落の調査、ワークショップ

協働のまちづくり：実験、実践、組織

#### 3. おおの・キャンパス・ビレッジ構想

おおのキャンパスを中心として円環状に立地する各集落が、各々に特色をつくり有機的に連携し、全体を一つのキャンパスとしていく考え方。

#### 4. サテライト・キャンパス構想

「もとむら再生計画」「向田地域づくり計画」「林郷スクール構想」「帯島芸術ファーム構想」「見ちゃあミュージアム構想」

#### 5~7. サテライト・キャンパス：地域資源ビジネスの場、地域拠点のデザイン

##### 8. 大野村の個性さがし：地域資源の調査と記録、情報発信

遠藤が挙げた地域資源は、一人一芸の村に始まって、葺や曲家はもとよりナニヤドヤラ、駒踊りなどの民俗芸能、火の見櫓までピックアップされた。

##### 9. 協働のまちづくり：実験・実践・組織

##### 10. 協働のまちづくり：イベントを通じた地域づくり実験

##### 11~13. 協働のまちづくり：イベントを通じた地域づくり実験夢市の場合

##### 14. アーバンデザイン「大野村方式」

・地域の個性を際立たせる ・連鎖的で多層的な協働をデザインする ・手を動かし汗を流すアドバイザー

##### 15. 大野村の実践から学ぶアーバンデザイナーのアプローチ

- ・全体にも部分にも明確なコンセプトを持つ。
- ・相手の目線で、わかりやす1表現で、構想を話し合い、共有する。
- ・多様な価値をつなぎ合わせる。多様な機会をつなぎ合わせる。
- ・「とりあえず、やってみるか」といえるまでの十二分なスタディをしておく。
- ・広範かつ多様な人を仲間に巻き込む。(地元住民、専門家、担当外の行政、他)
- ・目的意識を明確に持ち、要点を突く。粘り強く取り組む。(しかし撤収は素早く)



画像としては、「サテライト・キャンパス構想」の画面が、とくにマガジンで個々に紹介された写真や名称や説明を俯瞰的に再構成する場合に役立つ。

北沢は「絵にまとめて描く」、そして、わかりやすい提案をワークショップなどでしていくよう指導した。例として、曲家をリフレーンした曲家風の向田児童館のデザインは目を引く。

「イベントで終わらせずにつなげる」「とりあえず、やってみる」ということを教え、味方でない



人も巻き込んでいった。モックアップも使い、広範かつ多様な人を仲間に巻き込んだ。

## 2. 八尾 駅から旧町まで回遊提案

### 風の盆とともに観光まちづくりを考える

八尾 ここでの観光まちづくりは、地元の人たちが自分たちのまちを楽しむ姿に惹かれて、遠くからの観光客もしだいに集まってくることに主眼を置くのであって、その逆ではない。(中島直人) 『観光まちづくり』pp.175~176。



都市デザイン研究室ホームページ「八尾プロジェクト」のフロント  
2006年5月3日 曳山祭(西町公民館前)

八尾は「やお」と読まれがちで、「やつお」はむずかしい読みである。都市デザイン研究室ホームページの「八尾プロジェクト」をみると、2004年度スタートで2006年度までの報告が載っている。八尾は、西村幸夫がまちづくり活動を始めた飛騨古川から、高山本線で数駅的位置にある。

初年度の2004年度は、「経済産業省の補助事業であるコンセンサス形成事業として、八尾町福島地区において八尾町TMO構想に基づく各種事業の手法や内容の再検討を行いました。4度にわたる現地調査、2度のフォーラムでの地域の方々に対する発表及びディスカッションを通して、最終的に「平成16年度中心市街地活性化基金助成事業 コンセンサス形成事業報告書」という形でまとめました」とホームページにある。

個別には、5月プレ調査 曳山祭、7月第1回現地調査、8月第2回遠地調査、10月第1回フォーラム、おわら風の盆、2月第2回フォーラム、3月最終報告書提出。

そして、第2回フォーラムの様子を特集した北日本新聞(3月2日付)が、クリックすると現れる。「フォーラム 駅周辺から考える八尾のまちづくり」特集で、「洗練おわらの里」のカットが踊る紙面のトップに、「19 スポット観光活用 東京大大学院院生提案」が載っている。細字で判読できないが、「駅から旧町まで回遊」を提案していることは分かった。記事の最後は「今ある魅力に磨きをかけていくべきである」と西村発言で結ばれている。

同じ誌面に西村幸夫インタビュー記事もあった。「目的意識の共有を」の見出しで、「私たちの提案した19のプランは、観光客だけを狙ったのではない地域が魅力になることで、住む人が前よりも快適になり」という箇所が読めた。

#### 祭りが共通項

西村は博多どんたくの福岡が生地で、大の祭り好きである。八尾の曳山祭や風の盆などもみられる八尾プロジェクトに、何度も足を運んでいる。私の研究生時代、八尾の祭りで勇猛果敢に急展開を行う「かどまわし」を考察した修士論文をジュリーで聞き、八尾の魅力をも再認識した。

都市デザイン研マガジンには、「おわら風の盆」に酔いしれました、という記事も載っているが、そのようにメンバーも日本文化の市民イベントの華である祭り、ここでは「風の盆」に酔いしれる体験を通じて、伝統のあるまちづくりのエッセンスを感じていく。そういえば、まちづくりプロジェクトのほとんどの地域に、見るべき祭礼がある。祭りが共通項であるといってもよい。

八尾は「風の盆」の人気のため、遠征ではオブザーバーを含め最高の20人近くが参加したことがあり、都市デザイン研究マガジンへの記事・写真の総量がプロジェクト中最多で、ビジュアル編集にも最も力を入れていた。

研究室ホームページ「八尾プロジェクト」によれば、2005年度の活動は、400年の歴史をもち、かつては聞名寺の門前として栄えた西町をフィールドに、まちづくりに必要な基礎調査、それにもとづいたまちづくりの提案を行った。八尾における「文化芸術による創造のまち支援事業」(文化庁補助事業)の一環として、八尾に住む人、八尾で商う人、八尾を訪れる人など多様な視点を取り入れて地域づくりに関わった。

八尾町は、富山市を含めた周辺市町村と合併し、2005年度から「富山市八尾町」となった。この合併のメリットを生かしながら、地域の独自性を維持した地域づくりを構想していくのも、テーマだった。

それより先、2004年度から八尾町商工会の委託を受け中心市街地の再生のための調査・提案を行い、年数回の現地調査や住民とのワークショップ、高山線越中八尾駅を中心とした福島地区、次いで西町に活動を進めている。合併後の2006年度は、八尾旧町内でも、活力のある商店街が広がる上新町をフィールドに、まちづくりに必要な基礎調査とそれに基づいたまちづくりの提案をめざして活動した。

2007年度は載っていない。最後に「キーワード」として、「地方都市の再生/祭り」と都市空間/歴史的町並みの保全/市町村合併と地域づくり/地域資源の活用/新たな観光スタイルの創造/文化の継承と創造」が挙げられていた。「回遊」といい、「新たな観光スタイルの創造」といい、観光まちづくりを示唆しているように感じられた。

旅情ミステリーによる関係地の描写

内田康夫『風の盆幻想』(幻冬社、2005年)

かつては「風の盆」も「おわら」も知る人ぞ知るといった程度。あくまでも越中富山の小さな祭りではしかなかった。それが、一九八五年に作家の高橋治氏が小説『風の盆恋歌』を発表し、ドラマ化されると、たちまちのうちにブームが興った。遠く全国各地から、にわか「おわらファン」がバスを仕立てて乗り込み、「風の盆」会期の三日間は二十万人以上の観光客で賑わうようになった。この盛況は必ずしも喜ばしいものであるとばかりはいえない。小説やドラマでは、夜更けて静謐な気配の漂う町の中、すすり泣くような胡弓と、哀切きわまる唄に誘われるように踊る「おわら」が、しずしずと練り回る町流しの情景を描いていて、それこそが「おわら」本来の魅力なのだが、いまやまったくかけはなれたものになってしまった。(p.15)

問題は交通渋滞だけではない。屋台の店が出すゴミで、道路や民家の庭先までが惨憺たる有り様になる。たとえば焼きそばやたこ焼きのトレイ、ビールやジュースの空き缶、ペットボトル、段ボール箱の残骸から、はてはトウモロコシの芯など、祭りの後始末に町中の人間が駆り出される。(p.23)

手の甲から指先まで美しく反らせて、柳が風に揺れるようなしなやかさで、一糸乱れず、ゆっくりと進んで来る。どこにも力感のない優しさでありながら、行く手を遮る群衆は、波が引くようにサーッと散って、踊りの輪の邪魔にならない程度のスペースができる。(pp.181~182)

本書『風の盆幻想』は、平成十三年秋の第一回取材を皮切りに、のべ四次にわたる現地取材を経て、脱稿までに丸四年を要しました。……屋台の撤去、越中おわら伝承の正統論争といった出来事は、事実ののっとなって脚色を加えたものです。(あとがき pp.346～347)

西村京太郎『風の殺意・おわら風の盆』(文春文庫、2004年)

<とにかく、八尾は、坂の多い町だ>という三浦の言葉で、ビデオは、始まっていた。画面に石垣が写っている。その石垣は、二段、三段となっていて、その間が、坂道になっているのだ。その坂道を、普段着の親子が、降りてくる。<この町は、人口二万。井田川に沿って、細長く伸びている。風の通り抜ける静かな町である。(p.333～334)

「たいていの人が、胡弓のことを、質問するんです。変わっていますものね。歴史的に言えば、明治四十年代に、松本勘玄という人が、おわら節に、胡弓を入れたんですよ。これは、とても、勇気のいることだったと思いますよ。この頃は、民謡といえば、尺八や三味線といわれていたんですから。でも、胡弓が入ったおかげで、おわら節は、独特の哀調を、手に入れたんです」(p.94)

和久峻三『越中おわら風の盆殺人事件』(角川文庫、1995年)

「奥野さん、どうして、『風の盆』なんて言うんでしょうか?」「それはですね、台風がやってくる二百十日に盆踊りをやるからですよ」……「そのオワラというのは、どういう意味ですか?」「これは、歌の合間に入るお囃言葉ですよ」(pp.64～65)

「これは驚いたな。坂道ばかりではにゃあがね」赤かぶ検事は目を丸くした。「八尾は、別名“坂の町”とも言われているんですよ。何しろ、飛騨山脈の八つの尾根を跨いで発達した町筋ですからね。“八尾”という町名も、そこからきています」(p.67)

「なるほど。坂も多いが、橋もたくさんあるなも」「はい。八つの山と八つの川、そして八つの橋。そこへむけて、石垣の多い町でもあるんです」「うむ。石垣の町とも言われておるそうだからよお」(p.67)

聞名寺は、JR 越中八尾駅から町へ入った最初の坂を登り詰めたところにある浄土真宗本願寺派の名刹である。風の盆の夜祭りには、必ず、この寺の境内でおわらが披露される。ここでは、一般市民や観光客も踊りの輪に入ることができることあって、日没頃から、引きも切らずに人々が集まってくる。(p.139)

高橋治『風の盆恋歌』(新潮文庫、2007年47刷)

“水音が聞えない”そう思って、太田とめは足をとめた。……八尾の町では、どこにいてもこの雪流し水の音が入って来る。坂の町であるばかりでなく、八尾は水音の町なのだ。(pp.7～8)

都築は上新町の輪踊りを背にして坂をのぼり出した。えり子が肩を並べてついて来る。一番高いところにある西新町にかけて、幾分坂がきつくなる。(p.94)

「今、鏡町を出るそうです。諏訪町のお宅の前を通過して……」杏里を拾うという意味だった。「それから東新町へのぼって、上新町の裏側の通りを下るといってます」その時、急に雨脚の音が増した。(p.193)

## 中島直人の詩的ホームページ

中島直人は『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』(東京大学出版会、2009年2月)の著者である。中島のホームページは、散文詩である。越中八尾の観光まちづくりという大河を細流が形成していく過程が、何本もの弦楽器の糸のように描かれている。滔々とした大河になっていく各流れに仰臥して、空に映る大景のなかに流れの来し方を位置づけるとともに、その空からの俯瞰的分析を描ける達人である。

おわら「風の盆」という謎めいたネーミングの由来を、ここでは語っていない。坂の町を上るかのように、降るかのように、細流が途中で新しい着想の渦巻きとなり、次々と流れ出て大河に向かう様相が、中島のホームページで詩のように鑑賞される。



都市デザイン研究室メンバーが中心となって実施した越中八尾のまちづくり計画の一環としておこなった「八尾まちづくり展」の作業スタッフの様子  
(C) 西村幸夫(東大産学提携プロポーザルサイト)

詩のようにとは、苦悩を突破してきたまちづくりの人たちには静かすぎるかもしれない。しかし、ここまで誠実に住民によって織り成された越中八尾風景は、一編の詩であろう。

中島直人は、都市計画学者である。都市計画といえば、上からの硬い施策を思い浮かべがちである。しかし中島にあっては、近年まちづくりと言い換えられるほど柔軟な都市計画である。研究分野は「都市計画の歴史的文脈」「景観/風景論・公共空間論」「歴史・文化を活かしたまちづくり活動支援」と、ホームページに書いている。そのフロントに四行詩を掲げている。

人間の醸し出す  
儂さ、拙さ、懐かしさ、  
強さ、美しさ、みんな知っている  
そういう都市デザインへ

つづく文章も全文散文詩の趣である。そのなかの「ある「都市」が豊かなのは、そこに責任を持つ人々と同じくらい、愛情を持つ人々が沢山いるからである」という一節は、越中八尾につながる。

愛情なのである。中島はロックファンで、論考の文章にも、その詞を感じさせるリリシズムがある。ロマンティスト研究者である。私も都市美の研究をしていたので、2005年8月、ふたりで盛岡まで現地調査に旅したことがあった。大正末から昭和初年にわたって、都市美協会運動のリーダーだった<sup>とちないよしなね</sup>椽内吉胤が育った地の調査行だった。中津川の河川敷の草道を歩きながら、大正ロマンを語ったことが思い出される。こうした私の研究結果は、『都市美協会運動と椽内吉胤』(東京農業大学出版会、2008年12月)として刊行した。

中島のホームページは、履歴、研究とともに「人生」のファイルをリンクさせている。「人生」は、自分の生い立ちからしてオール散文詩である。研究業績リストには、『観光まちづくり』で執筆を担当した「風の盆」のまちを支える観光まちづくりのふところのタイトルを入れている。「観光まちづくり」が用語として使用されたのである。自身の社会活動の肩書きは、「富山市八尾地区中心市街地まちづくり計画推進計画協議会委員」を載せていた。

内の眼差し充実から反転

中島は研究室のプロジェクトのうち、八尾にも力を入れ、『観光まちづくり』で、その活動を次のように意味づけている。単なる事実網羅は、常に中島のとらないところである。

八尾町商工会は東京大学都市デザイン研究室と組んで、2004年からまちづくりフォーラム事業を展開した。これまでの中心市街地活性化の取り組みが、どちらかと言うと行政や組織主導で、それらの幹部たちの一存で決まっていたのに対して、これからのまちづくりは、まちで暮らす一人ひとりの多様な意見を反映させていかねばならないという考えで、大学がまちに入り、丁寧に住民の声を聞いた。

車座になって皆でまちの将来について話し合う過程で、住民主導のまちづくりの気運を高めていくことが目標であった。商店主を中心にまちの住民が集い、大学の調査や提案を素材として、ワークショップ形式で意見を出し合った。こうした内の眼差しを充実させる活動も、結局は越中八尾の観光まちづくりの一端を担うことになった。(p.176)

都市デザイン研究室のまちづくりプロジェクトについては、翌年の2005年4月15日に発行された『都市デザイン研マガジン』創刊号が、「八尾 おわら盆で有名な越中八尾のまちづくり空間戦略に取り組んでいる。駅前のにぎわいづくりを頼まれ、参加価値充分」と紹介している。この『都市デザイン研マガジン』は、かなりの頻度で八尾はじめ各プロジェクトの報告を報じている。

ところで、私が「おわら」を知ったのは、高橋治の小説『風の盆恋歌』の刊行後かなり経ってから読んだときで、その「八尾は水音の町なのだ」というとらえ方にハッとした。『観光まちづくり』では、中島の山岳都市というイメージに新鮮さを覚え、和久峻三のミステリー『越中おわら風の盆殺人事件』では、私にとって初歩的ないくつかの疑問が解かれた。作家の記述は印象的にものごとを分からせ、記憶させる。次はその一節である。

「どうして、『風の盆』なんて言うんでしょうか？」

「それはですね。台風がやってくる二百十日に盆踊りをやるからですよ」

「まあ。二百十日の厄日におわら節に合わせて盆踊りをやるんですか？」

「そうです。豊年を祈り、“風よおさまれ”という願いをこめ、九月一日の夕闇迫る頃から三日三晩、町じゅうの老若男女がこぞって町筋をねり歩き、踊り明かすんです。だから、風の盆と言うんですよ」(p.64)

おわら風の盆は、高橋治の小説が出た4年後の1989年に石川さゆりの「風の盆恋歌」がヒットするなどして、全国的に有名になった。3日間に20万人以上の観光客が訪れているのである。

風の盆踊りの魅力は何か。中島のホームページの冒頭の四行詩にもあるように、「儂さ」も大きな要素だった。儂さだけでなく、拙さ、懐かしさ、美しさもある。それに加えて「奥ゆかしさ」を感じたのが、中島の感性だった。『観光まちづくり』に、「民謡では珍しい胡弓のもたらず哀愁を誘う音色と編み笠をまとったおわら娘の奥ゆかしい姿」(pp.168~169)と書いたのである。全国的に風靡している阿波踊りとは対極の「儂さ」や「奥ゆかしさ」が、観る者の胸を締めつける。



まちを舞台としたおわらの町流し(『観光まちづくり』)

この『観光まちづくり』掲載写真には、儂さ、奥ゆかしさを感じられる。中島の撮影であろうか。おわらは、和久の『越中八尾風の盆殺人事件』のほか、内田康夫『風の盆幻想』、西村京太郎『風の殺意・風の旅』などミステリー作品の舞台になっている。これはひとつには、「風の盆」という謎めいた言い方の神秘性のせいである。八尾も「やお」と読むのが普通で、「やつお」と読むのは謎っぽい。踊りをみなくても、こうした語感と音とで推理の世界に引き込まれてしまう。京都から生まれた「地藏盆」の名称にも惹きつけられるが、「風の盆」の「風」の語は、多くの詩に使われるように、妖しいイマジネーションを起こさせる。「盆」も何かと迷わせる。

「風の盆」は江戸期が起源であるとしても、魅力はまず名称とその由来である。風を鎮めて豊作を祈る風鎮祭からともいわれるが、いまだに不詳であるところが儂い。その風が二百十日のことというのは、和久峻三のミステリーで知った。論考や観光チラシよりも、作家のくっきりした説明によって、反射的に心に飛び込んできて消えない。ところが、中島はその「風の盆」というネーミングについて言及していない。これは中島にとって儂い、しかし、懐かしげな思いがあるはずである。

ここで、八尾の観光まちづくりについての中島論考に戻ろう。おわらについて書かれたものは多いが、振れを少なくするために、『観光まちづくり』の記述の分析に限定したい。地元の観光まちづくりへの主な流れを「最後にあえて単純に整理してみると」という中島の結び(pp.179~180)を箇条書きにしてみた。

越中八尾の観光まちづくりの諸相	
1の流れ	生活の「舞台」となる町並みを磨いていった「行政主導のハード面からの流れ
2の流れ	商工会がサポートしながら、担い手である商店主や住民が自分たちの手で動かしてきたソフト面からの流れ
その共棲過程	伝統芸能の保存育成と観光振興 内の眼差しと外の眼差し 自分たちの楽しみと観光客の喜び
結論 ふところ	ますます多様化する価値観の現代 単眼的、一元的ではあり得ない 様々な思い、意図を許容する、様々な流れ、主体を束ねる「ふところ」の存在が決定的に重要
遺伝子	観光まちづくりは、「おわら風の盆」のまち越中八尾で、代々ずっと受け継がれていく一つのまちづくりの遺伝子となっている

### 矛盾克服・浮沈の経緯

中島の『観光まちづくり』の文脈を追ってみる。多くのこうした書きものは、成功一筋の描き方が

多いが、中島は研究者らしく、冷静に浮沈の経緯を織り込んでいるので、説得力がある。中島は、八尾を河岸段丘上の「山岳都市」と見据える。次いで、聞名寺の門前のにぎわいや、毎年9月の「おわら風の盆」の高密度のにぎわいを淡々と述べたうえで、観光まちづくりの歴史について、次のように直截に分析していく。斜体は、とくに矛盾克服のコンセプトを示唆していそうな箇所である。

おわら観光の本格化 越中八尾観光協会から。

越中八尾観光協会の設立は1950年(昭和25年)と意外に早い。戦争による打撃を受けた製紙や養蚕などの産業が復活できていない沈滞状態から抜け出すための起爆剤として、「おわら観光」が期待された。

起爆剤になった発想と実践が「観光協会」というのであるが、観光協会といえば、役所に近そうな産業関連組織である。「風の盆」は、古くからの町内の宗教・民俗行事で、外部の人にさらすものではなく、遠方から見にきてもらうものではないという意識だったのが、その克服に成功した。

当初の観光協会の集客目標は、「3日間で15万人」で、富山からの臨時列車とバスの確保、町内各所に無料休憩所を設けるなどして取り組み、「町ぐるみ」になっていたと中島は書いている。踊り手の組織「おわら保存会」は、競演会場を増設し、町内にあった映画館は深夜営業、各酒造は直売所を開設するなど、町ぐるみで観光協会の取り組みに協力した。(p.169)

気運の冷え込み

その後、「戦後の復興の気運が冷めてみると」と、中島は反省期に入ったことを記す。しかし、戦後の復興の気運が冷めてみると、観光協会の活動も順風満帆というわけにはいかなかった。おわらはいくまで地域が受け継いできた伝統芸能である。磨かれた技芸は確かに観光ともなり得るが、「そもそもは観光客のためにおわらを踊っているわけではないし、時に観光振興は地元の人自身がおわらを楽しむことと矛盾する」し、「おわらを一生懸命にやって、おわらが盛んになり、人が見に来られれば、それが即、観光だ」という観光協会の考え方は、受け入れられるまで時間がかかった」(p.169)というのはいちもなことである。

通年おわらの試み

1965年(昭和40年)代に入ると、観光協会はおわらを通年でみせる試みを開始した。1982年(昭和57年)からは、風の盆前夜祭も開始した。「しかし、この時代はまだ、観光協会とおわら保存会とは「水と油の関係」であったという」(p.169)

通年観光の拠点・曳山展示館

1985年になって、かつての越中八尾の繁栄の象徴であった旧養蚕試験場跡地に、八尾町が曳山展示館を開設した。その管理運営を委託された八尾町商工会は、従来の観光協会を組織再編し、展示館に併設されたホールで、「おわら観光」の通年化に本格的に取り組み始めた。具体的には団体客向けの「おわら鑑賞」というアイデアであった。「踊り手であるおわら保存会は当初、「おわらは自分たちの楽しみであって、見せるためのものではない」として難色を示したが、しだいに練習の一環として舞台に立つようになり、踊り方教室にも協力するようになった」(pp.169~170)

八尾文化会議

1983年、八尾中核工業団地の分譲が開始され、先端技術産業が進出した。この越中八尾の一大転機に、八尾文化会議が組織された。会議での議論の話題は多岐にわたったが、おわらなどのソフトな話から町並み整備などのハードな話まで、八尾の伝統文化を再評価したうえで、今後の「まちおこし」の方向性が検討された。そして、八尾文化会議を通じて、学識者らの外の眼からの意見が地元の有力者や行政担当者に刺激を与え、「まちの観光まちづくりにつながる基本的な姿勢がここに

芽生えた」(p. 171)

#### アメニティ倶楽部

また、地元在住の建築士たちによるまちづくりを考える「アメニティ倶楽部」が結成され、スピンオフの取り組み、つまり豊かな課外活動をもたらした。八尾文化会議を通じて生まれた「アメニティ倶楽部」は、1986年、建設省の補助事業である地域住宅計画(HOPE計画)に取り組むことになり、1000戸ほどの旧町の町家の構造、階数、間口の間数、屋根や壁の仕上げ、車庫の有無などをボランティアで調査した。

住まい方アンケート調査も施した。こうした自主的な調査が基本となって、八尾らしい家づくりの基本方針が定まった。アメニティ倶楽部は、家づくりに留まらず、商工会の若手部員たちと共同で、「越中八尾いろは絵図」などを作成した。そして、「おわら風の盆の3日間以外にも、地元の人たちが再発見した町並みに、観光客の姿が少しずつ見られるようになっていった」(p. 173)

「すこしずつ」という表現が、悩みつつ矛盾を克服していく過程を言い当てている。ひとつの副詞もゆるがせにしない中島の「少しずつ」であってみれば、説得力がないはずはない。

#### 観光協会と保存会の溝の克服

観光協会は1998年から「越中八尾冬浪漫」「月見のおわら」を核としたイベントをスタートさせた。ここでも、「観光協会とおわら保存会との間に溝があったが、観光協会の信念を、おわら保存会の人たちはその懐の深さで理解し始めた」(p. 170)

2000年には毎月2回の個人客向けのステージである「風の盆ステージ」、2002年には、おわら時のみに開店するにわか店舗に対抗して、日頃から本当におわらを支えている地元の商店を支援する「おわらサポート制度」を創設した。

#### 坂のまち千年会議

1999年、30歳代の集うサロンとして設立された。「八尾の町家で、アートに触れる4日間」を合言葉とした「坂のまちアート」展は、13の会場、作家20人、来場者3500という規模で始まった。

より重要だったのは、生活空間を使うということで、自ずから地元の町民が参加する仕掛けが仕組まれていたことだった。そして、「地元の人、観光客が思い思いに会場を訪ね歩くさまが越中八尾の観光まちづくりがめざす一つの目標像として共有されるようになってきた」(p. 173)



河岸段丘上の家並みと奥に見える聞名寺の大屋根(『観光まちづくり』)

#### なりひら風の市

旧町で最も多くの商店が集まっている上新町商店街では、2003年から「なりひら風の市」を始め、



パラソルの一坪テントを並べた。

観光まちづくりと言うと大げさに聞こえるかもしれないが、実はそう遠くでないところに住んでいるながらも普段はなかなか立ち寄らない人たちに交流の機会、場を提供し、まちに戻ってきてもらうことも一つの大切な試みであろう。ここでの観光まちづくりは、地元の人たちが自分たちのまちを楽しむ姿に惹かれて、遠くからの観光客もしたいに集まってくることに主眼を置くのであって、その逆ではない。(p.175~176)

西町まちづくり委員会と東大都市デザイン研究室

八尾町商工会は東京大学都市デザイン研究室と組んで、2004年からまちづくりフォーラム事業を展開した。2006年、商店会や自治会からは独立した西町まちづくり委員会が設立され、東大がまとめた提案の中から「いいところはつまみ食いしよう。真摯に受け止めよう。やるなら本気でやろう」という考えで、動き出した。最初の取り組みはまちのマップづくりだった。観光客というよりは住民にまず読んでもらい、まちへの愛着を育もうというねらいで作成したのだった。

「西町えびす亭」と名づけた即席店舗を公民館でオープンさせた。大学生も盛り上げに加わった手づくりの店舗だったが、幸いにも好評を博した。

八尾ふるさと発見塾

ほぼ同時期に、西町のフォーラムに参加していたひとりが、「八尾ふるさと発見塾」という会を立ち上げた。ケーブルテレビやホームページといった現代のメディアを積極的に使って、広く地域から全国、世界に発信している点で新しい試みだった。

## 「ふところ」の語彙で包含

ここまで要約してきて、組織の力を見直すと同時に、「西町まちづくり委員会」も「八尾ふるさと発見塾」も、熱心なリーダーが引っ張り、それを支援する人びとがいて、成り立っていることを中島が指摘していることに共感した。すべての運動はひっきり「人」なのである。

ここで、上掲の中島の「最後にあえて単純に整理してみると」にたどり着く。団体だけでも、越中八尾観光協会、おわら保存会、八尾商工会、八尾文化会議、アメニティ倶楽部、坂のまち千年会議、上新町商店街(なりひら風の市)、西町まちづくり委員会、東京大学、八尾ふるさと発見塾などが織り成す大河への絨毯を「単純整理」することは容易ではなく、中島によってこそ、シャープな評価を紡ぎながら結ぶことができたのである。

中島はひとことで包含する語を探し求めて、「ふところ」という詩情のある語彙を発見し、それを「多様な思いを包含する観光まちづくりのふところ」(p.179)として問うた。中島のリリズムが、八尾でも発酵したのである。

観光まちづくりは、坂のまちを母の懐を思わせる「ふところのまち」というコンセプトで見直すことで、八尾から新しい観光まちづくりの希望が伝播されていく可能性がある。

内田康夫の『風の盆幻想』は、記述のように越中おわら伝承の正統性についての観光協会と保存会の激しい論争や環境問題を引き起こした屋台の撤去などについて克明に書かれ、越中おわらと八尾のことは、ミステリー愛好者の間でもかなり知られていたのである。「観光まちづくり」において、作家を活用することは現実的に大きな効果を生むのであり、東大プロジェクトもその活用を図ることで、まちづくりの成果は一段と果たされるのではなかろうか。

八尾のまちづくりに、「アメニティ倶楽部」の活動が評価されている。同じ『観光まちづくり』には、東大プロジェクト以外の地域も次々と登場するが、「地域ぐるみの観光資源マネジメント～

生野」の兵庫県朝来市生野町のまちづくりにも、アメニティを冠した「市川流域アメニティ推進協議会」のマップや地図が活用されていた。（『観光まちづくり』p.149）

## 『都市デザイン研マガジン』 八尾

創刊号 2005.4.15	八尾 おわら盆で有名な越中八尾のまちづくり空間戦略に取り組んでいる。 駅前のにぎわいづくりを頼まれ、参加価値充分。
------------------	--

3号 (2005.5.15)



### 八尾プロジェクト始動、曳山祭調査

今年度はフィールドを旧町へと拡げる富山県八尾プロジェクト。5月3日に開催された曳山祭を岡村 D2、田辺 M2、江口 M1 が見学・調査した。勇猛果敢に急展開を行う「かどまわし」や装いを一転した幻想的な「提灯やま」など祭文化を堪能した。

参考：倉橋宏典 修論「北陸の曳山祭における祭と都市空間の関係性に関する研究 曳山の動きと都市空間の対応関係に着目して」 今春社会人になりました。

11号 (2005.9.15)

今年も「おわら風の盆」に酔いしれました



おわらの「流し」、まちなかを行きます



行燈で演出された八尾のまちの夜景

都市デザイン研究室メンバーが建築学会大阪からそのままの足で向かった先は、越中八尾。昨年度から研究室でまちづくりのお手伝いをしている富山の小さなまちですが、胡弓が奏でるなぜか物悲しい音色と、伝統的で洗練された男女の動作が人をひきつけてやまない「おわら風の盆」で全国的に名を知られています。今回は、おわら祭りの際の都市空間の変容を調査するという大義名分を有した八尾チーム（中島助手、岡村D2、田辺、大谷&金M2+1.5、江口&三澤&楊M1）に加えて、野原助手、内山M2、竹山M1、星野OB、藤本OG、山内OGが9月3日の晩に八尾に集結。現地で西村先生も合流し、まちなかの至るところで繰り広げられるおわら踊りと、ふだん物静かな八尾のまちのどこか誇らしげな姿に、一同朝まで酔いしれました。

16号 (2005.12.1)

八尾 旧町へ転戦、最終報告・提案に向けて待ったなし



昨年度関わった駅前の福島地区から、今年度は河岸段丘上に今も残る伝統的な街並みと壮大な石垣が魅力の旧町に進出、福島地区からの玄関口である西町地区を中心に、地域づくり提案を中島助手、岡村 D2 はじめのべ 10 名で作成中。現在全戸アンケート調査を含めた 4 回の調査と中間報告会を終え、計画を再考中である。

21号 (2006.2.15)

「越中八尾冬浪漫」シンポジウム 西村・遠藤・中島教官陣 『北日本新聞』報道



中島助手



シンポジウム風景 右端西村教授



遠藤講師

都市デザイン研究室八尾プロジェクトの活動の一環として、2月4日に西村教授らが参加して開催された「越中八尾冬浪漫」シンポジウムの記事が、『北日本新聞』（2月5日付）で大きく報じられた。1面を演壇の西村教授らの記事・写真で飾り、研究報告をしたOBの遠藤新金沢工業大学講師の「観光まちづくり推進協議会の作業過程」と中島直人助手の「福島・西町のまちづくり」などの詳細が15、16面に展開された。

西村教授 住民が住みやすいと感じられる町は、訪れた人にも良さが伝わり、感動を与える。

遠藤講師 「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりがキーポイントだ。

中島助手 私たちがしている活動はいわば「ボトム」だ。地域主導・主体で進めていくことが大切だ。

27号 (2006.5.15)

トップ 喜多方・八尾チーム、相次いで現地入り  
M1記者によるプロジェクト初参加ルポ

ゴールデン・ウィークこそ、プロジェクト活躍の舞台。八尾プロジェクト・チームは5月3、4日の二日間、3日の曳山祭りに合わせて現地へ（参加：D3岡村祐、M2楊恵亘、M1後藤健太郎・伊藤雅人・塩澤諒子・筒井直央・ウィチエンプラディトー・ポンサン）。

### 曳山に惹かれて、八尾

今回の目的は3日に行われる八尾の「曳山祭り」の調査をメインにし、初めて八尾の町に触れるM1はその全体像をつかむというものだった。これから密に関わっていく、言わば第二の故郷になる町との初対面に期待と不安を抱えて八尾に足を踏み入れた。1日中歩き回り、祭事の空間の使われ方や人々の行動

を調査。昼と夜では大きく印象も異なり、また次の日は祭りの余韻を残しつつも日常に戻っていく。

2日目は地元の商工会の方との顔合わせとミーティングを行い、今回の行程を終えた。これからが本番、自分自身を楽しみ



M1、いざ石垣に見参！

つつデザイン研の醍醐味であるプロジェクトに責任をもって関わってきたい。(M1塩澤諒子)

## 35号 (2006.9.15)

トップ

風の盆に八尾調査、収穫多々

往く夏 踊り、調査し、議論重ねる

年に一度、9月初めの3日間に行われる「おわら」は八尾を語るには欠かせないお祭り。その最終日の9月3日に合わせて、デザイン研のメンバーも八尾入りをした。今回は、中島助手、D3岡村、D1永瀬、M2江口、後藤、三澤、楊、M1伊藤、塩澤、筒井、平林、ポンサンの八尾メンバーに加え、研究室の他のメンバーも一度はおわらを経験しようと大勢が訪れた。



八尾に関わるからには、この町が誇りにする伝統行事を、非日常の様相に変わりゆく姿をしかと目に焼き付け、その雰囲気をもろごと体に染みこませてから、一緒になって考えていきたいのです。(shiozawa)



## 2度目のおわら

今年は私にとって第二回のおわら見学。この二回の経験でおわらは八尾にとって不可欠の伝統活動だと感じています。三味線と胡弓の音楽と共に歌が流れ、それにあわせて静かな踊りが続きます。視覚と聴覚に印象深く残る伝統的な行事です。

普段は静かで落ち着いたこの町が、この三日間は観光客で賑い活気づきますが、観光客に見せるためだけでなく、地元の人自身が心から楽しみ、皆、本当におわらが好きなのだということが伝わってきます。上新町(今年調査対象の町)ではこの期間、店舗のショーウィンドーにもおわらに関する商品が飾られ華やかに変身します。こういう光景は普段の様子からは想像しにくく、町全体を支えるのにこのような伝統行事に頼りがちな八尾は、これからどういうふう to 生きのびていくのか、私たちも真剣に考えてきました。これから八尾のような町はどんどん出てくると思います。まちづくりの領域でこの問題について考えなければなりません。(楊恵巨 M2)



提案現場の確認



浴衣も持参で楽しむ



住民と輪踊り



軒高低い公民館



郵便局でヒアリング

## 2006年度・第3回現地調査

今年で2回目となる西町では、M2を中心にいよいよ観光MAP作りに向けて本格的な打ち合わせがスタート、八尾プロジェクトの真価が試される正念場を迎えている。一方今年からかかわっている上新町では、空き地活用のための現地調査を始め、おわらに欠かせない「えんなか」と呼ばれる水路調査、建物の実測間取り調査を3件、郵便局や祐教寺、上新町自治会長、行政センターなど6件のヒアリング調査など滞在中の3日間はあるという間に過ぎた。

そして調査後、疲れをものともせず富山へくり出し、団欒とはかけ離れたエネルギッシュな会話が飛び交う居酒屋。ドクターO&N氏から次々に飛び出す宇宙的尺度の言語群。脱帽した。結論。都市デザインには、「情熱」「根性」「体力」は欠かせないのだな。まだ修行が足りぬ。でも体育会顔負けの研究室を支えているのは、1人1人の都市への「愛情」に違いない、と思う。(三澤繁樹 M2)

37号 (2006.10.15)

トップ

八尾上新町にデザイン研台風上陸  
「おわら」ひと月後・まちづくりフォーラムと展示会



完成した展示会場

風の盆に合わせた前回調査から約ひと月、いまや十余人を擁する巨大プロジェクトとなった八尾チームは、まちづくり提案を携えて現地へ。M1の若い力が中心となって、展示とフォーラムを成功させた。(shiozawa)

### パネル展示

今回の訪八の最大の目玉は16日に開かれた「第一回上新町まちづくりフォーラム」。4月から積み上げた調査をもとに練った、八尾上新町を元気にするための提案を、展示のためのパネル作成に追われ、13日の始発の富山行き飛行機にともかくも完成した順にパネルを抱え、かけこむM1先発隊、伊藤、筒井、塩澤。未完だった残りのパネルを託され1日遅れて後を追う平林。M114名で展示の準備に取りかかりました。

試行錯誤しながらの力づく作業、足りない物は現地調達。ちょうど展示期間中には「風の市」も開かれ、地元の方をはじめ八尾を訪れた観光客の方にも私たちの提案を見ていただきました。



塩澤、体力任せに揮毫す



地元の方々への説明



「なりひら風の市」の賑わい

### まちづくりフォーラム

平日の遅い時間帯ではありましたが、約 30 名という多くの住民の方々に足を運んでいただきました。西村教授のレクチャーに一同聞き入り、「住民の方々の意向次第でまちが変わっていける」。その説得力のある一筋の光に背中を押されるように、その後のワークショップ形式での議論はどのグループも白熱。ひとたび始まるやいなや会場は熱気に包まれ、議論は一向に尽きず、あっという間に時間がきてしまいました。

まだまだ私たちの提案はそこに住む住民の方々の生活にまで肉薄したのではなく、及ばない点も多くありましたが、2月の最終的な提案までにまた深めていきたいと思えます。

今、八尾が大きく動き出そうとしています。周りだけが盛り上がっていても意味はなく、住民の方の気運を高めていくのも重要なまちづくり。八尾を愛する住民の方の熱い想いを感じながら、それに負けないうらい体当たりで挑んでいこうと決意する八尾の夜でした。



軽妙な西村レクチャー



フォーラム、熱が入れば腰が浮く



ボンサン、フォーラムデビュー

### 41号 (2006.12.15)

#### 初冬の八尾、年内最後の調査 12/1～13

北陸の冬ごもりを感じさせる冷たい空気が漂う師走の八尾で、伊藤、ボンサン、塩澤のM1組が今年最後の八尾入り。今回の訪八の目的は主に4つ。

「駐車場と車保有実態の徹底解明」全戸聞き取り調査 上新町若者ミーティング 八匠さんヒアリング 旧町郊外店舗ヒアリング

#### 上新町若者ミーティング

フォーラムを含め今まで何度か上新町の住民の方との話し合いの機会を持つことができましたが、これからの町をつくっていく比較的若い層の方からは、まだ十分にうちに秘めた想いを吸い上げ切れてないのではないかと。そんな思いから今回は20代から40代の方々に普段の生活や、私たちの提案についてお話を伺いました。

#### 八匠さんヒアリング

八尾の大工棟梁、通称「八匠」。八尾の街並みや住まい方に対しての提案を考える上で、八尾を知り尽くす伝統的和風住宅の意匠や、近頃の生活の変化に伴う住宅の作り方の工夫などについてお話を伺いました。

多忙にも関わらず7名もの方にお集まり頂き、経験豊富で幅広い知見からお話をして頂きました。理事長の石原さんには大変よくしていただき、次の日は実際に建物を見て回り説明をして頂きました。名付けて「八尾八匠と巡る建築探訪」。伝統の継承と現代のライフスタイルの変化の狭間で、いかに住みよく、また街並みにも配慮した建物をつくるか。乗り越える壁は共通。いざ、2月の第2回フォーラムに向けて、この機会を生かして。(shiozawa)



2班に分かれて話し合い



粋で面倒見のいい石原さんと現場で実習



## 45号 (2007.2.26)

トップ

3年目の八尾P、いよいよ大詰め  
まちの将来像を思い描く

上新町第2回フォーラム

いよいよ本年度の八尾プロジェクトも大詰め。2月15日、前回よりも多くの方が集まり、上新町の方々のまちづくりに対する意気込みが感じられました。



パネル展示



西町えびす亭のおでんで



夢あかりで灯るまち



帰り道高山のまち

今回のフォーラムの目的は、上新町の今後の方向性を探っていくこと。特に、具体的に誰か、何から始めればいいのかを、住民の方が主体的に考えることによって、まちづくりの第一歩を踏み出す機会にしたいと考えました。どんな町になってほしいのか、どんなまちにしたいのか、そしてそれは誰が中心となって推進していけばいいのか。あえて地元組織やそれぞれの世代ごとに分かれて話し合ってもらい、最後にお互いの考えていることを発表していただきました。

前回のフォーラムから、意見をもとに発展&追加した私たちの提案には賛成の意見を数多く頂き、ぜひすぐにでも、というものから、長い目でみて段々と実現していきたいというものなど、新町のまちづくりに役立てたのではないかと思います。

世代や立場の違いによって、それぞれ求めるものなど少しずつ意見は違うものの、八尾の文化を活かし、まちをもっとよくしていきたいという意識は皆一緒。短い時間の中では話も尽きず、議論も白熱、それぞれが積極的に自分のまちに対する想いを言葉にして、意見を交わし、将来のまちの姿が少しでも共有できたのではないのでしょうか。(shiozawa)

48号 (2007.4.10)

### 八尾2006年度報告書完成

2006年度八尾プロジェクトの集大成、活動報告書が完成しました。1年で行った現地での実測調査などの基礎調査や、ヒアリング、アンケート結果などを盛り込み、上新町の具体的な場所に対する空間的要素、あるいは仕組みの提案など、計119の提案をしました。そしてさらに参考資料として全国の様々な事例紹介を付け加えて、最終的には200ページを超える力作となりました。またこれをステップに、今年度更に有益な提案ができるよう励んでいこうと思います。(shiozawa)



追伸: できたてほやほやの生原稿です。重量感。



八尾から買ってきたチューリップがめでたく  
開花。M2伊藤が真心こめて育てました。

56号 (2007.8.10)

### 八尾訪問レポート 八尾まちづくり大学に向けて



9月に始まる「八尾まちづくり大学」のために、八尾プロジェクトメンバーは7月28～31日の間現地調査を行った。まちづくり大学の大きな二つのテーマである「生活」と「観光」についての情報を集めるために、今回の調査は自治体長へのヒアリング、空間調査、行政へのヒアリングなど、たくさんの作業に追われることになった。ハードスケジュールをこなしながら、最終的に無事にすべての調査を終えたことは、プロジェクトのメンバーにとって一息安心だといった様子である。今回のメンバーの努力は、間違いなく来る「八尾まちづくり大学」を成功させることになるであろう。(M1 パンノイ・ナッタポン)

57号 (2007.8.25)

### 東大まちづくりかふえ「千の間」、酷暑の「風の市」で初陣飾る

八尾プロジェクトでは8月11日(土) うだるような暑さの八尾上新町で開催された「風の市」にまちづくりかふえ「千の風」を初出店しました。「風の市」は2003年に上新町商工振興協同組合が寂しくなってきた商店街に新たな賑わいを作りたいと始まったイベント。冬期間を除く毎月一回、開催されています。



今回の我々の出店の目的は昨年行った提案を実際に実験すること。まちづくりに関する展示を路上や休憩施設に効果的に配置することで、まちなか観光を促す工夫を示した提案、「風の回廊」を実現しました。



八尾Tシャツ（絶賛販売中）で着飾り店を守る男たち。この日の女店員は一人もいなかった

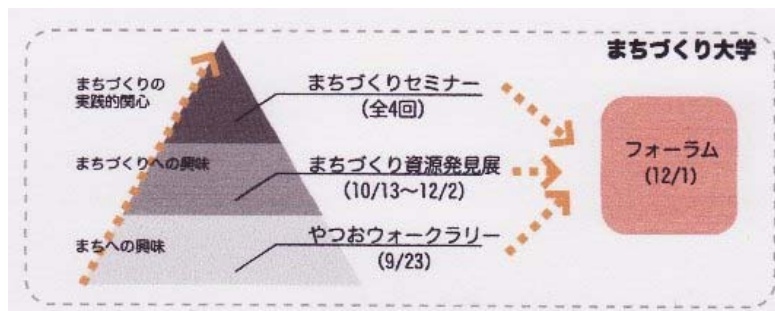
暑さの中では、来客者の関心は展示よりもかふえの冷たい飲み物に集中しました。自信のメニューはトロピカルフルペチーノなど4種類。沢山売れたのになぜかの赤字。念願の黒字を目指して10月6日（土）坂の町アートにあわせて出店します。（M2 平林直 空間計画研）

59号（2007.9.25）

トップ

八尾まちづくり大学開講  
今までと、これからをつなぐ

「まちづくり大学」とは何かということ、主に「まちづくりセミナー」「まちづくり資源発見展」「やつおウォークラリー」の3つの柱から構成されていて、9月22日から12月2日までの期間、八尾にて怒涛のまちづくり月間が継続するというものです。



「やつおウォークラリー」は主に子どもを対象に、八尾のまちをもっと知って、まちを楽しんでほしいという思いから企画し、商工会や「ふるさと発見塾」の方と協力して行ったイベントで、9月23日に開催されました。子どもと親合わせて総勢40名を超える参加者に感慨もひとしおでした。逆に楽しませてもらった思いです。（shiozawa）



セミナーの様子



毎回持参 大学ですから



ウォークラリーの様子



チェックポイント

61号（2007.10.25）

トップ

「八尾まちづくり大学」これからが山場

## 「まちづくりセミナー」折り返していざ第4回へ

八尾まちづくり大学では、第1回セミナーに引き続き、第2回セミナー（10月13日）、第3回セミナー（10月20日）が行われました。

前回の第2回セミナーでは「観光」をテーマとして取り上げ、「なぜ今八尾において観光交流について考えることが必要か？」という根本的な問題提起から始まり、私達が八尾のまちにした具体的な提案（100を超えるアイデアを「提案カード」として提出）についての議論がされました。今回で第3回目となるセミナーは第1回とは異なるワークショップ形式で、参加者がより積極的に議論に参加し、活発な意見交換がされました。「生活」をテーマとして、進む少子高齢化とどう向き合っていくか、現状と問題点を話し合いながら、より住民の方の日々の思いに肉薄した熱い議論となりました。次回第4回（11月11日）では、今後のまちづくりのリーダーとして活躍していただけるよう、より実践的な体験ができるワークショップを計画中です。（shiozawa）



セミナーの様子

## ■ 八尾まちづくり展 「マチヅクリノタネ」



八尾まちづくり展

10月31日から12月2日まで、八尾旧町の「ふらっと館」でまちづくりの展示を行っています。私たちが見つけた八尾の魅力を伝え、そしてその魅力の種を育ててほしいという思いから始めました。今までの調査・提案をまとめたものや、旧町全体のガリバーマップに加え、セミナーの様子も順次更新していく予定です。

63号（2007.11.25）

トップ

「八尾まちづくり大学」を越えて  
八尾を引っ張る次世代のリーダーと共に、「次」へ

「八尾まちづくり大学」のメインイベント、「まちづくりセミナー」は全4回、無事終了しました。11月11日に行われた第4回セミナーでは、1つの小グループに分かれてそれぞれ違ったテーマを議論するワークショップ形式で行いました。歴史的建物の活用方法を考える班、空き



家を利用し新たな居住者・長期滞在者を招く仕組みのマップを考える班です。より少人数で、よりを考える「新飲町屋」班、そして八尾旧町

のマップを考える班です。より少人数で、より具体的・実践的な内容を参加者主体で議論することによって、全4回の中でも一番充実した内容になりました。最後には参加者の方へ西村教授から「修了証」を授与。この「まちづくり大学」によって八尾の未来を担う牽引役が多く活躍してくれることを願うばかりです。(shiozawa)



上段左から：歴史的建物班。模型があるとやはり盛り上がりますね。

／「新飲町屋」班。特に議論が盛んだったようです。

／マップ班。個性あふれる様々なマップを制作。／修了証書授与。

参加者から一言ずつ感想もいただきました。

下段左から：左3枚ライトアップの様子。ペットボトルを利用してろうそくの柔らかい光で夜のまちを演出。／「風の市」での出展。カフェラテが大人気。

### 「千の風」／ライトアップ

11月11日に行われた上新町「風の市」に東大チームも再び加わり、まちづくりカフェ「千の風」も常連・・・とまではいきませんが、顔なじみになってきました。夜には上新町の裏道「柳清水」で手作りのライトアップ企画も行い、地元の方の反響もなかなかのものでした。

八尾プロジェクトは今年度をもって一度、今までの私達の活動を総まとめします。2008年2月に行われるフォーラムでは4年間の蓄積を振り返り、広く住民の方々の前で報告する場を設けたいと思っています。今後のまちづくりへのステップとして十分に生かされものになるように、もうひと踏ん張り。

70号 (2008.3.10)

トップ

八尾まちづくりシンポジウム 2008  
4年間の集大成、そして次のまちづくりへ



八尾プロジェクト4年間の総仕上げ、八尾まちづくりシンポジウム2008が、3/9に開催されました。

八尾プロジェクトは、2004年福島、2005西町、2006上新町とこれまで小さな町単位で関わってきましたが、今年には八尾旧町全体を対象にしたまちづくり大学を開催、そしてこの4年間の活動をこれからの八尾のまちづくりにつなげる、という位置付けで今回のシンポジウムのテーマが開催されました。シンポジウムのテーマは、「今日からはじまる八尾のまちづくり」。ビジョンは大きく持って、しかし他人任せのまちづくりではなく、今日ひとりひとりが出来ることから始めよう、という想いが込められています。

シンポジウムでは、西村先生からの講演に続き、都市デザイン研究室の4年間の活動を報告、そしてデザ研から八尾のまちづくりへ4つの提案を行い、これを基にコメンテーターの方々に貴重なご意見を頂きました。また、最後には参加者の方々に、まちづくりへの想いを記した「私のまちづくり宣言」なるものを書いて頂き、様々な想いが集まりました。

ひとを、まちを、動かしていくことを痛感し続けた1年でしたが、少しでも私たちの想いが八尾のまちに伝わってくれればよいと思います。(M1 鎌形敬人)

## 82号 (200.9.10)

### 「おわら風の盆」@八尾



9月1日、八尾の「おわら風の盆」を見学してきました。今回の訪八の主目的は観光でしたが、今後の八尾プロジェクトのための調査旅行という側面も持ち合わせていました。

平成16年度から続く八尾プロジェクトは、昨年度で一つの区切りを迎えています。今年度はこの4年間で私たちが「何をしてきたか」、「何を考えてきたか」を八尾市民に伝えられるよう、雑誌を作成しています。その一方で、まちづくりに関わり続ける継続性も大事だと考え、極少数数であります、八尾の活動を続けています。その一つとして、10月に行われる「坂の街アート」への参

加を企画中です。短期集中プロジェクトですので、興味のある方はいらっしゃいましたら、是非声を掛けて下さい!!(kikuchibara)

### 3. 総合魅力つくり出す喜多方・くらはく

#### 「蔵のまちづくり博覧会」で集大成した青雲の7年

喜多方 観光まちづくりの活動は、まちなかと農山村それぞれで行われているという段階にある。互いに切磋琢磨しつつも連携して新たな「融合魅力」をつくりだしていくことが、観光まちづくりの次の展開として求められるのではないだろうか。(中島直人)『観光まちづくり』p.164

#### 喜多方プロジェクト



雪の大和川酒造(2001年12月)

都市デザイン研究室ホームページ「喜多方プロジェクト」2001年度のフロント 雪の大和川酒造(同年12月)



喜多方図(2006.11 バンコク研究室旅行先での「研究室紹介」)

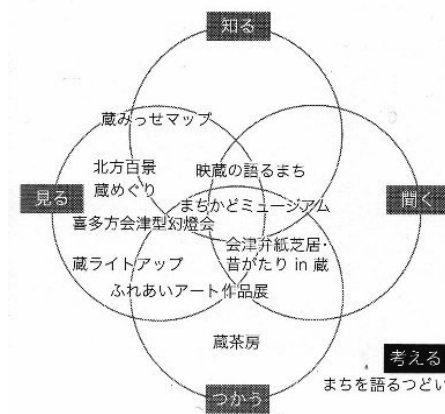
## 魅力的な「融合魅力」

喜多方についての叙述で中島直人が、上記のように「融合魅力」という語を用いているが、同じ『観光まちづくり』のなかで、石山千代・野原卓が「観光まちづくりの活動は、まだ、まちなかと農山村それぞれに行われているという段階にある。互いに切磋琢磨しつつも連携して新たな「融合魅力」をつくりだしていくことが、観光まちづくりの次の展開として求められるのではないだろうか（p.164）と書いているので、研究室では観光まちづくりとセットで使われているのだろうか。魅力のある用語である。

## 蔵とラーメンのまち

喜多方というと、「蔵とラーメン」というイメージが反射的に浮かぶ。この『観光まちづくり』第5章1「生活と観光が隣り合わせの「蔵ずまい」のまち～喜多方」の書き出しは、簡明である。

人口約5万4千人のまちに約4200棟の蔵と、100軒以上のラーメン店が軒を連ねる「蔵とラーメンのまち」喜多方。（p.154）



蔵みっせのねらいと取り組み（『観光まちづくり』p.159）

このまちに、東大都市デザイン室のプロジェクトチームを率い、社会貢献的研究実践をするために訪れた都市計画家・アーバンデザイナーの北沢猛は、2009年12月急逝した。石山・野原論考の一節に、次のようにあって、北沢訃報を想起したのである。

北沢猛助教授（当時）率いる東京大学大学院と都市デザイン研究室の喜多方チームが訪れ、外部の視点が注入されたことも喜多方の観光まちづくりの大きな促進剤となった。（p.158）

北沢は、2005年7月以後、大学院新領域創成科学研究科・工学系研究科兼任教授だった。都市デザインと空間計画に関する実践と実証研究で知られた。

「北沢猛助教授（当時）」の名に出会ったとき、在りし日の温顔が浮かんだ。西村幸夫と北沢猛両教授が、私の恩師だった。北沢の学部3年対象の「都市デザイン概論」の講義は、皆出席で受講した。授業では、北沢は必ずフロアに降りて次々質問する。

双方向性の丁寧な授業だった。横浜市都市デザイン室室長だったキャリアが活かされ、横浜の都市デザインの事例が、絢爛たる都市デザイン画像とともに、毎回講義に織り込まれた。横浜で課外授業やシンポジウムも開かれた。それにも参加した。

学生への質問については、私だけが毎回のように当てられた。シニアの受講生と質疑することで、若い現役学生の刺激になることを考えてのことと思われる。

スケールの大きい都市デザイン講義に感銘を受け、受講のレポートに、身近な都市デザインでは

なく、当時つづけていた海外文明ツアーで最も印象に残っている、ペルーのマチュピチュ都市遺跡に発想した「マチュピチュ基盤ラテン文明コミュニティ(LGT)」構想」を提出した。奇想天外で未熟な発想でも読んでもらうことができるという北沢の器量に、引き込まれていたからだった。

大野村の次に喜多方の東大基地を開いた北沢とは、大野村で合宿した。2006年春、研究室追い出しコンパのとき、北沢がスピーチ中に突如、研究生の私に博士論文を書くようにと発言、満座がどよめいたことがあった。その師と喜多方合宿もしたかった。

都市デザイン研究室の私の指導教官だった西村幸夫編著『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』という本は、研究室で教えを受けた研究陣が顔をそろえて分担執筆していたが、北沢の執筆がなかった。病状のためだと推察された。

西村の「都市保全計画」の情熱・濃縮・総合の大学院講義を2年間(2004、2005年度)重複して皆出席受講した授業風景、その感銘から『教え子のノートが記した西村幸夫「都市保全計画」&東大研究室ホームページ熟年聴講生日誌』の本を出すまでの燃焼、その特論で学んだ景観論に刺激され、山形県東根市に通って景観問題をまとめ、自主レポート「重要風景の視点場保全と修景のバランス問題 東根市の事例考察」を提出したアクション、および北沢講義で毎回当てられていたことなどが怒涛のように回想され、一読して熱いものがこみあげた。そして、副題の「まち自慢からはじまる地域マネジメント」を超えて、両教授のスケールである大きな包括的な世界を感じたのである。

『観光まちづくり』は、東大生協書店で手にしたのであるが、懐かしい研究室列伝現代版の感じがするとともに、同書によって、観光まちづくりツーリズムの扉が開けるのではないかと直感した。研究室研究陣の分担執筆の既刊本は幾冊もあるが、この『観光まちづくり』は、ツーリズムの模索を始めていたときだったため、その面でもインパクトが強かった。

### 『観光まちづくり』に絞る

そこで、通常するように関連文献を漁ることはせず、この本1冊を反芻して、研究室の西村幸夫、岡村祐、野原卓、中島直人、窪田亜矢(掲載順)の研究陣に学ぶことから始めようと思い立った。私の正面に、にわかに「観光まちづくり」が浮上した。以前、西村が観光まちづくりのプロモーターであることを知ったときから、観光まちづくりに関心はあったが、『観光まちづくり』を繰った瞬間に、その1冊に深く学んでみようと思き動かされたのである。

喜多方は故北沢猛教授の生地であり、このプロジェクトを率いた北沢が、空き蔵を利用して東大都市デザイン室喜多方分室とし、まちづくり支援に活発な活動を展開していた基地である。

本稿は、これまで『観光まちづくり』執筆の上記5人の論考それぞれについて書いてきた。しかし、「生活と観光が隣り合わせの「蔵ずまい」のまち～喜多方」は、石山千代・野原卓の連名稿である。連名論考や記事は、一部を評したい場合、筆者の特定ができずに戸惑う。財団法人日本交通公社研究調査部研究員の石山は、都市デザイン研究室OGで、私が『都市デザイン研マガジン』編集長のとき寄稿をお願いしたことがある。『観光まちづくり』は、都市デザイン研究室の現役とともにOB、OG人脈の執筆がある点で、研究室の裾野と底力をみせている。石山とともに、佐賀大准教授三島伸雄、財団法人日本ナショナルトラスト主任研究員土井祥子がそうである。

ところで、都市デザイン研究室のホームページ「喜多方プロジェクト」を開くと、2007年10月の呼びかけ風記事が大きく載っていて、活発な活動の一端がうかがえた。

くらはく開催！ いよいよ明日から 14 日までの 10 日間、喜多方蔵のまちづくり博覧会「くらはく」が、アートぶらりーと同時開催されます！ 期間中は喜多方の町中が博覧会の会場となります。メイン会場の大和川酒蔵北方風土館を始めとして、小荒井会場、小田付会場の地区会場、そして町中に「サテライト」として蔵の再生事例などがパネルと共に紹介されています。その他、様々な催し物も盛りだくさんです。

まちづくりフォーラム&語り合い 13 日（土）のフォーラムでは、これまでの喜多方のまちづくり活動を概観し、今後どうして行けば良いのか、みんなでざっくばらんに話し合います。そのための語り合いでは、4 つのテーマについて、狭く深い議論をします。

「くらにわ」の社会実験 蔵の前の空間を利用した、まちの潤い空間の創出。ここでは、くらにわかフェや農産物販売、極上のおにぎりの試食販売などが開催されます。

小田付 のれんのお披露目第 2 弾、カフェモーツァルト横での夜の幻燈会などなど・・・蔵の街並みを楽しみましょう

おもてなしの花小径（はなこみち）期間中、まちなかの散策路を草花が彩り、おもてなしをします。ほかに多くの企画が盛りだくさん！

## 喜多方観光まちづくりの歩み

生活と観光が隣り合わせの「蔵ずまい」のまち～喜多方の本体に戻り、いくつもある観光まちづくりへの流れを表にしてみた。

喜多方観光まちづくりの歩み		
原点	地元写真家金田実の存続の危機にある蔵撮影 1975 年 NHK の新日本紀行「蔵ずまいのまち」	観光客増加
潮流	国鉄のディスカバー・ジャパン アンノン族の出現	観光客急増 女性の旅心
町並み保存機運	<small>ほっほう</small> 北方風土会（現喜多方のれん会）の活動 1978 年全国町並みゼミ	町並み保存連盟
喜多方ラーメン	1987 年「蔵のまち喜多方 <small>らーめんかい</small> 老麺会」設立 店の質 観光広報	
観光まちづくりの端緒	1995 年月「蔵の会」（約 60 人）発足。活動分野は地域、まちづくり、教育、芸術、文化	
東大参加	2001 年 北沢猛ら都市デザイン研究室喜多方チームと蔵の会共同で、蔵の活用実験「蔵みっせ」（蔵めぐり、蔵みっせマップ）	
文化芸術	2001 年「蔵のまち・アートぶらりー」喜多方市美術館主催 2002 年「喜多方発 21 世紀シアター」（街ん中で大文化祭）喜多方プラザ文化センターほか、2007 年 5 日間 5 団体 110 公演	
民から官民提携	「あいづ DC 喜多方地区推進委員会」（DC はデスティネーション・キャンペーン）DC 後は「極上の会津喜多方推進委員会」	市民型から民官型、東大など入り民官学
ランキング	2006 年『NIKKEI プラス 1』「散策したい蔵の町並み」東日本 1 位 その後、市役所に「まちづくり推進課」	
新事業	2000 年度「日本一の蔵再生によるまちづくり」（地方の元気再生	





KITAKATA 図 (2006.11 パンコク研究室旅行先での「研究室紹介」)

喜多方のまちづくも実質観光まちづくりと捉え、その歩みを上の表で示したが、この論考においては、いくつかの重要ポイントをテークノートしておきたい。

喜多方の蔵は、単なる建築物としての意義に留まらず、喜多方に暮らしてきた人びとの時代ごとの営み、生業、思想、それらの背後にある農業や自然といった広い裾野を持つ喜多方文化の象徴なのである。(p.155)

この一節に「建築物はシェルターを提供するという次元にとどまらず、意味をもたらすことによって人びとの人生を支えている」という米国のアーキテクトの言葉を想起する。次いで「蔵の「再発見」と観光対象化がもたらした期待と不安」の項目を立て、最初に、喜多方の蔵が「見る」対象として注目され始めたのは、蔵のまちの歴史の長さに比すれば最近のことといえようと時代設定し、記述をすっきりさせている。

地元の人びとにとっては、これまで生活の中で当たり前に使ってきた蔵を見るために外から人が訪れるという新たな現象に戸惑いながらも、深い関心を持ってわざわざ喜多方を訪れてくれる人の期待に応えるべく、蔵を公開するところも出てきた。(p.156)

### 「戸惑い」は達意

「戸惑いながら」のひとつが、状況を如実に表現している。エンクロージャー気味だったまちへ、蔵を見るために「外から人が訪れる」という「新しい現象」への戸惑い。観光まちづくりが、外部刺激で台頭することが多いという通念のモデルではないか。「戸惑い」という言葉はこの場合、達意である。

このフレーズは、民がその外部刺激を受け入れて前向きに発酵させ、次いで官と提携して今日の喜多方観光まちづくりに達したことを物語っている。東大などの学が入り、民官学でもある。先見的飛び込み実践の学サイド、北沢猛の莞爾とした面魂をここでも思い浮かべる。

論考は、戸惑いを経過して、蔵を公開するところも出て、個々の蔵だけでなく、町並みとして保存していこうとする気運になったと書くとともに、いいことづくめではなく、「しかし、一方では」と半面に言及していることが、説得性を増す。

しかし、一方では、座敷蔵に代表される喜多方特有の住まいとしての蔵は、不特定多数への公開には馴染まない部分も多く、展示物の盗難や観光客の見学マナーの悪さに辟易とした所有者が公開を控えるという動きもやがて出てくる。(p.156)

観光まちづくりはアメニティとして捉えることができるが、アメニティはマナーでもあり、こう

したディスアメニティは、どこのまちづくりにおいても足を引っ張る要素であり、喜多方も例外ではない。

その過程で、ディスアメニティというのではないが、微妙な齟齬が生まれてきた。「ラーメンのまち喜多方」と「蔵のまち喜多方」との間の齟齬である。東京など大都市は相反する業種がひしめき、齟齬にはかなり不感症になっているのに対して、喜多方は相互に気になりすぎる間合の都市規模なのであろう。論考は、それを「危機」と表現した。

蔵のまちを訪れる観光客に、ゆっくり滞在してもらって観光収益を増やすため、もともと市内に多くあって、市民から愛されていたラーメン店を紹介して好評だったことが、喜多方観光の大きな転換点になったというのである。喜多方ラーメンが観光客の集客に力を発揮してきたのである。蔵にもラーメンにもいいことというのは皮相的な見方で、そこに「皮肉なことに」危機感が生まれたと指摘する。

皮肉なことに、「喜多方ラーメン」が注目され、それを目的に訪れる人が増えるほど、そのきっかけとなった「蔵のまち」としての印象は薄まってゆく。(p.157)

蔵のまちの印象が薄れるとは、人間心理の機微を突いている。なぜだろうと思わせるこのような問題提起をして、すぐ次の答えをつづける。

蔵もラーメンも喜多方の人びとにとっては、共に生活と密着した魅力である。しかし、複数要素を同時に外へ発信するとなると、蔵を主目的に訪れる人とラーメンを主目的に訪れる人は、どうしても嗜好、行動パターンが異なるため、両者の幸せな共存はなかなか悩ましいということが示されてきたのがこの時期といえよう。(P.157)

確かな指摘である。蔵とラーメンは似合うとは言い難い。その危機を民の力で突破したのが、「蔵の会」の誕生だった。東大プロジェクトは、この蔵の会と取り組むことによって、「蔵みっせ」の成功をみせたのである。

ともあれ、この危機すなわち「蔵のまち」としての印象が弱まっていくのに合わせて、手入れが行き届かなくなり、存続が危ぶまれる蔵も増えてきたという。石山・野原は、蔵の会をエポックとみて次のように記した。

そうした喜多方の保全・活用は、長らく、蔵を所有する人や商店主が個々に善意で取り組んできたが、1995年、年齢や職業、住まい、蔵の所有のいかんに関わらず、「蔵を愛する」約60名により、「蔵の会」が結成されたことが、喜多方の観光まちづくりの端緒と位置付けることができよう。(p.157)

蔵の会のことは、私もメンバーだった全国町並み保存連盟の全国町並みゼミで、地元勢のプレゼンテーションとパフォーマンスで知ったが、そのエネルギー活動に呼応するように、喜多方市美術館が市街地にある蔵との連携を立ち上げ、2001年秋、その美術館と蔵々を巡回会場として「蔵の街・アートぶらりー」を始めた。

2002年には、喜多方プラザ文化センターが、プロの公演を集めた「アートフェスティバル 喜多方発 21世紀シアター」(街ん中大文化祭)を成功させた。芝居、音楽、人形劇、落語、講談、大道芸などであるが、街中の蔵や空き店舗を舞台に活用した工夫が人気を呼び、2007年には5日間55団体、110公演、延べ388人のボランティアを動員する規模になった。

次の段階は、2005年夏、JRグループと関係自治体、地元関係者の協力による全国大型観光交流キャンペーン「デスティネーションキャンペーン(DC)」が、喜多方地域でも展開されたことである。カタカナネーミングが流行といっても、この名称はむずかし過ぎる。これを観光まちづくりの冠に

することに抵抗を覚えるが、それを喜多方を含む会津 21 市町村が、合併後初めて「地域」という単位で選ばれて活用された。そして、DC 後も地域発の誘客キャンペーン「極上の会津」へと進化し、夏の会津の風物詩として定着したという。

喜多方市は、2006 年に熱塩加納村、塩川町、山都町、高郷村と合併し、「豊かで元気な農山村と活力ある生活・観光都市」を目標とした地域づくりを始動したとも述べられている。「熱塩」という名に、起爆剤としての言霊が感じられる。

この喜多方観光まちづくりへの歩み DC 効果は、各地区、地域にキャンペーン期間やオフ期をねらったユニークな試みを誘発した点が、とくに指摘されている。「レトロ横丁」「蔵してる通りフェスティバル」、東大プロジェクトもハッスルして取り組んだ「喜多方蔵のまちづくり博覧会(くらはく)」などである。

活動の縦糸も横糸も充実してきたのである。このような中で、これまで公開を控えてきた蔵も、キャンペーンにあわせた期間限定、ガイド付きといった条件付きで公開してくれるようになってきたことも嬉しい変化である。(p.162)

私は広島県鞆の浦の東大プロジェクト基地で合宿し、店先の雛めぐりなど、参考になる状況を見学してきているので、喜多方の状況も論考を読むだけで理解できた。ここまで息をのむように喜多方観光まちづくりの螺旋型発展をみてきたが、手を緩めない石山・北原は冷静に判断を下す。

しかし、依然として、多くの観光客の観光スタイルは、お昼時にラーメンを食べて 1、2 時間程度散策して帰るといったものであり、外から人が訪れることが地域全体の活性化に結びついていることを実感できる状況とは言い難い。(p.162)

## 実質観光まちづくり

『観光まちづくり』の本でありながら、実は「観光まちづくり」を冠したまちづくりの事例がないのをもどかしく思いながら、しかし「実質観光まちづくり」と考えることで、同書を読み込んできた。本当は「観光まちづくり」を冠したり掲げたりしたまちづくりの事例を知りたいのだが、「実質」観光まちづくりでも、地元、観光客とも幸福感を得られればベターというのが現実であろう。

かつて、ぎょうざのまちづくりで成功した宇都宮へ駆け足で、実情の一端を見にいった。その迫力ある状況に圧倒されたが、昼時ならぬ夕食時に、ラーメンならぬぎょうざを食べて、1、2 時間程度散策して帰った旅をいまここで反省するのである。石山・野原論考では、「融合魅力」という言葉が使われている。

この「融合魅力は、中島直人も使っているが、主語が観光まちづくりとなっている点、魅力的な提起である。2006 年 9 月、日経の生活情報紙『NIKKEI プラス 1』の「散策したい蔵の町並み」ランキングで、東日本における 1 位、得票数では全国 1 位になった認識度が、融合魅力の強い足がかりになったようである。アメニティは「総合快適性」であり、「融合魅力ツーリズム」と響き合う。

## 補遺

北沢猛の喜多方プロジェクト：「北沢猛氏の軌跡」(偲ぶ会)における野原卓助教報告

2010 年 3 月 14 日、東大工学部 11 号館で「アーバンデザイナー・北沢猛氏の軌跡」(北沢先生の業績を思う会実行委員会)が開催され、そのまちづくり活動、喜多方と旧大野村についての回顧報告は、アーバンデザインの視点を軸に、当時助手として現地をともにしていたふたりが、それぞれ構成・制作したスライドを投影してこれを行った。

先に旧大野村、つづく喜多方は、『都市デザイン研マガジン』で数多く登場している東大先端科学技術研究センター助教・野原卓が担当した。「喜多方・9つの都市デザイン」と題し、喜多方プロジェクトの活動を9点にまとめた報告だった。これまでの『都市デザイン研マガジン』の報道と重複するところがあるが、誌面で散開している記事と違って、こうした包括的な総まとめは貴重である。次は、私が走り書きしたメモを起こしたものである。



野原助教の北沢先生と喜多方報告



北沢少年（小学4年）の描いた蔵

1. 蔵ずまいのまち、喜多方
2. 北沢先生と喜多方

「幼少期から中学生まで喜多方にて暮らす 愛着のあるまち」と画面に出た。そして、この蔵のまちの原景をしっかりと捉えた小学校4年当時の絵が映された。すでにして、みごとな作品である。私は北沢授業ではいつも話しながら描き、描きながら話す絵達者に驚いていたが、それは児童のころからの画才なのだと初めて分かった

### 喜多方・9つの都市デザイン

1. 学生・地域とともに都市の未来を考える：「プロジェクト」の確立

「東北における都市間連携による広域観光圏整備計画調査」という広域観光まちづくり調査（2001年、文化庁、日本ナショナルトラスト）と蔵のフォーラム開催（喜多方観光まちづくり提案）

「蔵みっせ」（2002年11月）：蔵のまち（商店街を中心に、地域全体）の魅力向上イベント 大学と地域が協働で1年間調査、計画、提案、議論を行う仕組み

2. 競争（協奏）関係を創る
3. 動かしながらデザインする

大学院生の提案と町衆のニーズとで、空き蔵の活用と再生の持続プログラムを組み、借り上げた空き蔵を「まちづくり寄合所」（2004年）とした。東大都市デザイン研究室喜多方分室でもある。

4. 空間を構想する

ストリートをデザインする。街路と建物との統合。駅前通り拡幅整備事業のリ・デザイン。アーバンデザイン実験。まちなかプラン（2006年）とまちづくり7つの提案（2007年）

5. 実空間を創出する

丸見食堂の再生（2005-06年） 実際に構想を実践する機会。

6. 空間を統合する

蔵庭（くらにわ）プロジェクト。歴史（蔵）と自然（庭）との統合

#### 7. 公民学の連携を図る

喜多方まちづくり研究会の発足（2005年）

喜多方蔵のまちづくり協議会（2006年） 蔵のまちづくり博覧会（くらはく）2007年

市役所通りまちづくり検討委員会（2006年） まちづくりモデルプラン策定委員会（2009年）

#### 8. 空間を構想する

北沢先生から野原がよくいわれたのは、「空間を構想する」だった。そのために、とにかく「ビジョンを描け」といわれた。思い切ってビジョンを描いてみてから議論する。バックキャストイングである。

#### 9. 人の和・輪をつくる

若者を大切に育成する視点（小・中・高・大生）

要旨以上のことを述べた野原の結びは、「北沢先生は都市デザインは市民の幸福を高めることができるという信念で、国民総幸福論を唱えた」ということだった。

そういえば、私が受けた北沢講義「都市デザイン概論」でも、授業中に「市民の幸福のために」という言葉を重ねて聞き、そのソフトでヒューマンな発言に驚くと同時に、ホッとしたことを覚えている。

この野原報告による北沢の手法や人柄は、観光まちづくりの極意ともいえる。喜多方のまちづくりプロジェクトの活動を読み解く鍵になるう。

## 『都市デザイン研マガジン』 喜多方

<p><b>創刊号</b> 2005.4.15</p>	<p>喜多方 昨年空き蔵をまちづくり寄合所にしたが、注目されてカフェに売却され、次の空き蔵に移るという好調ぶり。まちづくりを方向づける全体プランを県から委嘱された。東北まちづくり学会<sup>まなびあい</sup>第2回開催もできそうだ。ご飯とお酒の好きな方はどうぞ。</p>
---------------------------------	--

### 4号(2005.6.1)

トップ

全体のまちづくり構想に向けて現地調査

喜多方プロジェクト、5月も2度にわたり遠征

2001年に始まった喜多方プロジェクトも今年で5年目を迎えた。昨年度はまちづくり寄合所の開設や東北まちづくり学会の開催などの成果をあげた。今年はさらに一步踏み込んで、最も大きな課題とされてきたふれあい通商店街のアーケード問題を中心に、喜多方全体のプラン作りに挑んでいる。喜多方チームは、5月もゴールデン・ウィークと20日-22日の2回にわたって、中心市街地の駐車場調査や水路調査、来年1月合併予定の周辺市町村の調査を行い、喜多方全体のプラン提案に向けて活動した。



撤去を検討中のふれあい通アーケード



二代目まちづくり寄合所

・二代目まちづくり寄合所オープン（小原酒造の蔵から向かいの大森家の店蔵に移動。1階は喜多方市高齢者活動支援センターの作品が、高齢者自身によって展示・販売されている。初代は和風のカフェとして、オープン予定。昨年度の建築学会設計競技で発表した「マチコロ」の提案が実践されつつある。）

・喜多方まちづくり会議連絡会開催（まちなかのステイクホルダーと県・市・商工会議所が、一つの場で喜多方のまちなかのあり方を話し合う場作りに向けて活動している。喜多方まちづくり構想も策定段階から地元の方と意見交換している。）

・新メンバー加入（新 M1 の鈴木・柴田・早坂の 3 名が加入・韓国からの留学生のイルジも参加予定）

・喜多方分室覚書（昨年度から<http://kitakata.seesaa.net/>にて喜多方プロジェクトのブログを開設）

< 黒瀬武史 M2 >

## 16号 (2005.12.1)

トップ

### 百花繚乱・プロジェクト報告会

11.8研究室会議で年度中間成果を発表  
喜多方 「学び会い」からプランへ



提案準備の夜

2006年1月に合併を控え、現在、喜多方市は「これからの喜多方」を考える上で最も重要な局面を迎えている。我々は喜多方市全体のプランを作ること为目标として調査・研究会を重ねてきた。11月のシンポジウム「学び会い」や12月に予定されている「商店主意向調査」などの成果を盛り込んだ、より質の高いプランを作るため現在活動中である。

## 22号 (2006.3.1)

成長着々、「喜多方まちづくり研究会」 2月19日に、「第3回喜多方まちづくり研究会」を開

催しました。喜多方の住民、市、福島県、TMO等、多くの方々（過去最多の約30名）にお越しいただきました。私たちが1年間かけて考えてきた喜多方全体プランと地区プランについて、有意義な議論をすることができました。その後の懇親会（2次会）では、M2の3名が、喜多方のまちづくりに関わってきた2年間を振り返り、卒業を前にした今の思いを熱く語り...喜多方のみなさんから温かい拍手に包まれたのでした。（鈴木智香子 M1）

## 26号（2006.5.1）

トップ 春本番・プロジェクト、自主活動一斉始動  
積極参加 M1、早くも多忙週間

4月24日（月）10:00 喜多方プロジェクト 諸活動の先陣を切るミーティングに、M1・7人が集まる。前年度までは、市全域を扱ったプランをつくったが、今年度は地区レベルを中心に活動する方針。「地区の景観計画を策定するという話に興味を覚えた」（M1）

## 27号（2006.5.15）

トップ 喜多方・八尾チーム、相次いで現地入り  
M1 記者によるプロジェクト初参加ルポ

ゴールデン・ウィークこそ、プロジェクト活躍の舞台。喜多方チームは、野原卓助手自ら車を運転して、8人（野原助手以下、M2 柴田直・鈴木智恵子・早坂勝一、M1 鄭一止・石井宏典・奥田紘子・横田俊介）が5月6、7日に訪喜。マガジン編集部がM1が、「手ごたえ十分」の初現地・印象記を送る。

喜多方の青雲に誓う

M1 石井 宏典

磐梯山をかすめる峠道の眼下、  
不意にぱっと開けた会津盆地のまちなみ。  
迎えてくれた遅咲の八重桜。  
とりどりの装いを見せる数多の蔵。  
静かに老いるレンガ窯。  
そして、地元の方々と交わした、  
挨拶の乾杯と街の未来に対する熱い想い。

帰りの車中、喜多方で見た美しい点景と体験した時間を反芻し、ひとつひとつ胸の中に整理し終えた時、これはきっと充実した1年が待っているぞ、という鮮やかな予感を得ました。



机上で都市計画を学んで2年半、「責任」という重い荷と引き換えに、ようやく、そして少しだけれど、知識を社会に還元できる舞台をいただけた、という気持ちです。

初心に灯る期待を糧に、まちづくりの先輩方に学び、新メンバーと協力しつつ、これから精一杯力をつくしたいと思います！

31号 (2006.7.15)

熱気上昇、喜多方まちづくり  
景観協定締結へ向けて

7月1日から3日にかけて、本年度2回目の喜多方訪問を行いました。

喜多方チームは現在、「蔵の町並みが残る小田付地区における景観協定締結」「メインストリート・市役所通りの大拡幅問題」「蔵の再活用：『中高生対象のまちづくり塾 in 蔵』の実施」という3つの活動に対し、重点的に関わっています。

今回の訪問は、景観協定締結の第一歩として実施された「小田付まちあるきワークショップ（景観資源・阻害要因を見つけ、住民・行政・東大チームの3者で議論：地元新聞記事が研究室掲示板に貼ってあります）」がメイン。

他にも、豪雨の中の景観現地調査・自作模型を使っの市役所通り拡幅の是非の議論、まちづくり塾の舞台になる蔵の大掃除など、息つく暇もない、盛りだくさんの日々でした。

前回5月は「お客さん」として訪問した僕達M1も、今回は一応の戦力として参加。作成した資料や模型、アイデアや発言のひとつひとつがそのまま実際のまちづくりの血肉になるという体験をし、面白さと責任を感じます。一方で、経験に勝る地元の皆さんから逆に指摘を受け、学ぶ場面も…。いや、これぞプロジェクトの醍醐味といったところでしょうか。



小田付の中央通りの景観について意見を交わす永瀬D1（写真右）チーム

32号 (2006.8.1)

トップ

喜多方・まちづくり塾開講  
地元中高生と意見交換、結ぶわがまち未来像

先月26日、喜多方Project有志は（青春）18きっぷを握り締め、会津を目指しました。今月2回目となった訪問の最大の目的は、翌27日から開かれたまちづくり塾。この地元中高生を迎えてのワークショップは、小田付郷と喜多方の未来像を若い世代にも考えてほしいと、地元・小田付町衆会と東大チームの柴田・鄭・横田を中心に、春からプランを練ってきたもので、再生した町内の古い空き蔵を舞台におこなわれました。





今回のワークショップの舞台である蔵は、7月初め、前回訪問の際に、東大チームも参加して大掃除を行ったもの。詰め込まれた玉石混交の骨董の上、50年間の埃がたまっていた内側は、本棚や机、ゴザが敷かれ、品のある空間に生まれ変わった。

貴重な夏休みを使って参加してくれる学生たちに、とにかく「楽しく」をテーマに塾コンテンツを展開。地元の方々の協力を得ての「蔵見学」や「バーベキュー」を通して喜多方の「蔵」と「まち」を見つめ直します。

34号 (2006.9.1)

### 喜多方の夏、触れ合いの夏

#### 「語り合い」からまちづくりを考える

5月から毎月欠かさず現地訪問を続ける2006喜多方チーム。今回の訪問では、ヒヤリングやワークショップを通じて年齢は10代から60代まで、普段は直接「まちづくり」に関わっていない方を中心に色々な立場のみなさんと意見を交わす機会を得ました。人との交流はまちづくりの第一歩。こうして得たつながりや新しい視野は、今後の喜多方チームの大きな財産となりそうです。

<まちづくり塾>2日間にわたり、「まちづくり塾」の第2タームが開催されました。参加メンバーは野原助手ら8人。

<観光調査>ハイジ、石井の2名は喜多方に延長滞在し、JTBFの石山千代さん(研究室OG、喜多方PJ一期生)、中島さんと共に、合併後の喜多方市の観光戦略プロジェクト策定に先駆けての調査に同行しました。

今回は観光関連事業者のヒヤリングと、関係者ワークショップの開催の2本立て。ワークショップは工学院大学の窪田助教授にコーディネートしていただきました。(石井)

37号 (2006.10.15)

### 円熟喜多方は秋風とともに

#### 景観形成MS、まちづくり塾観光調査

9月29日から5日間、喜多方チームは再度現地訪問を行った。内容はまちづくり塾、景観協定WS、景観資源調査の3点セット。まちづくり塾も今回で3度目になるが、塾生の高校生たちがいつもと変わらぬ元気な姿を見せてくれた。現在は課題のまとめ段階に入っている。(M1 吉田拓)

39号 (2006.11.20)

### 蔵に灯る三月の成果

#### 喜多方 まちづくり塾ミニ発表会



力作のA1パネルを前に、まちづくりプランを発表する塾生のみなさん

まちづくり塾もいよいよ最終章に突入である。今回の目的は、今まで高校生達が発案し、形にしてきたものを住民の方々の前でミニ発表会・展示会を開催することだった。

正直なところ、最初は不安ばかりだった。成果物はちゃんと完成するだろうか、会場設営は上手くいくだろうか、お客さんは来てくれるだろうか……。これらの不安を拭い去るため、様々な策も講じた。しかし我々の心配とは裏腹に、発表会は予想以上の出来だった。……。多くの住民の方々が寒い中会場へ足を運んでくれた事には私自身涙が出そうになってしまった。(吉田拓 M1)

40号 (2006.12.1)

小雪舞う喜多方、塾生修了  
別れの季節・育て若い力

12月3日、今年度喜多方PJの締めを飾る「まちづくり講演会@大和川酒造・北方風土館」を開催。数百人は入る大きな蔵を舞台に、北沢教授講演～地域づくりの構想～、今年度2事業「景観WS まちあるきMAP」と「まちづくり塾」の成果発表を行った。当日は、福島県知事も(!)最初の挨拶までご参加頂いた。……。講演会前日に開催した油屋蔵“まちづくり塾”修了式。生徒は目に涙を溜めていた。(M1 横田俊介 まちづくり塾塾長)



北沢教授と高校生たち、懇談会で談笑

46号 (2007.3.10)

トップ

交流の冬、喜多方Pは眠らず  
新しいコラボレーションに向けて

ヤマガタ蔵プロジェクトの来喜

3月5日、東北芸術工科大学のサークルであるヤマガタ蔵プロジェクトの学生たちや山形の蔵

持主の方などを含め、12名が喜多方を訪ねた。……彼らの大リアクションは生き生きしていて、案内している立場としても本当に嬉しかった。

三春町・船引町を訪問

次に三春まちづくり研究会による勉強会に、喜多方地元の方とともに講師として呼ばれたことについてである。……二つのまちを歩き回り、地元からの説明を聞きながら、感じたのはやはり両方のまちも、それなりに貴重な資源をもっていることであった。しかし、それを自分の地域のプライドとして考え、まちづくりに実際参加したり、このような資源を活かそうとしている地元の方は少なく、ちょっともったいない気もした。(M2 鄭一止)

49号 (2007.5.16)

トップ

まちづくりの芽吹いて

全国各地で今年もプロジェクト始動

喜多方

喜多方では市内の様々な活動を統合し、まちづくりを一つのビジョンの下に行おうという流れが出来つつあります。また、我々研究室の活動も7年目を迎え、今までの活動内容をまとめる必要性があります。そこで今年度は、研究室を含めた諸団体が、活動内容の共有や意識を統一することを目標に、「のれんプロジェクト」や「まちづくり博覧会」などイベント開催をはじめとした様々な活動を行います。(M2 吉田拓)

53号 (2007.6.25)

喜多方「くらはく」へ向けて準備着々と進む

今年度2回目の訪喜がありました。今回の目的は、のれん企画、蔵のまちづくり博覧会(くらはく)、蔵サイン計画、それぞれに関する調査と企画の詰め。

二回の訪喜で見つけたツボを紹介します。

相当古びた看板+廃墟寸前の建物。奥に長い蔵によって生まれる長~い路地。時々現れる標語「下水道みんなで参加 蔵のまち」

今回は喜多方市内の3つの中学校で、蔵の構造や種類など基礎知識を野原助教が講義。終了後にはお礼を頂く場面も。翌日は「福島民報」の新聞記事で取り上げられました。(柏原沙織 空間計画研・M1) 柏キャンパスの北沢研究室

56号 (2007.8.10)

トップ

喜多方「のれん作りワークショップ」

多くの地元民が参加した目玉イベント

今年度3度目の訪喜は7月29日~8月3日、きびしい暑さの中での滞在となりました。今回のイベントとしての目玉は、「のれん作りワークショップ」。地元高校生6名、住民・商店の方々12名に参加いただき、まち歩きやのれん裁縫などの2日間の行程を楽しく終えました。(kakibaya)

59号 (2007.9.25)

## 喜多方のれんお披露目



のれんの景観実験

9月8日、「蔵して通りフェスティバル」開催とあわせ、おたづき蔵通りに連続してのれんを並べた景観実験が行われました。.....多くの住民・商店主の方々の積極的な協力のもと32枚の日除けのれんが完成。並んだのれんは通りに一体感を与え、訪れた人からは「こういうまちなのかと思った」という声も聞かれました。(kakibaya)

60号(2007.10.10)

トップ

喜多方くらはく開催  
プロジェクト7年間の集大成、博覧会として実る



まちづくり展メイン会場



ん

2001年の文化庁委託調査をきっかけに都市デザイン研究室に喜多方プロジェクトが発足してから早7年。その集大成として、また喜多方のまちづくりが新たな一步を踏み出すための総まとめとして、喜多方蔵のまちづくり博覧会「くらはく」が10月5日～14日、10日間にわたって開催された。

研究室内外から多数の来訪者で賑った今回のくらはく。まちづくり展に限っても1500人以上の来訪者があるなど、喜多方の魅力とまちづくりの歩みを発信する好機会となった。複合イベントの「くらはく」。期間中は、喜多方じゅうの蔵内外の空間で多種にわたるイベントを実施。



盛況のフォーラム会場

### まちづくり展

喜多方の魅力紹介やプロジェクトの活動・提案、まちづくりに関わる人々の声などを展示。メイン会場に加え、地区会場が2つ、さらにまちなかにも、「サテライトスポット」として蔵紹介やその場所に関する提案などのパネルを設置。計200枚のパネルを展示した。

### くらにわ社会実験

蔵のまちなみを堪能し、ゆったりと足を休める場所として「くらにわ」を設置した。椅子やパラソル、植栽によって設えられたくらにわで一休み。同時に行われたカフェやおにぎりの試食販売なども好評だった。

### くらはくイベント

夜の幻燈会や蔵バー、ベロタクシーによるツアーなど市街の2地区をつなぐ歴史ある道には、沿道住民の協力のもと、草花に彩られた「おもてなしの花小径」がつくられた。

### まちづくりフォーラム/語り合い

計4回の語り合い(分科会)で各地域やテーマについて意見を出し合い、13日の全体フォーラムではそれらを総合して、喜多方の将来について議論した。

## 64・65合併号(2007.12.20)

### プロジェクトの一年 喜多方

2000年から始まった喜多方プロジェクト。2007年には、これまでの取組みを総まとめして、広く市民に知ってもらい、まちの方向性を共有しながら具体的な取組みにつなげることをしたい...そこで企画したのが「蔵のまちづくり博覧会」でした。いざ企画を具体化しようとする、やりたいたいことが多すぎたりして本当に大変でしたが、でも、地元の方々が協力し合って、3会場でのまちづくり展示会、フォーラム、語り合い、くらにわ社会実験、蔵カフェ、おもてなしの花小径等々を見事

実施することができ、非常に意義深い「くらはく」となりました。

年明けには喜多方まちづくりのまとめ冊子をつくる予定です。(D1 鈴木智香子)

68号 (2008.2.10)

### 喜多方シンポジウム 今後の方向性を語り合う

去年10月に喜多方蔵のまちづくり協議会が喜多方プロジェクトチームと連携し開かれた「喜多方まちづくり博覧会(くらはく)」(都市デザイン研マガジン第60号参照)を終えて以来、久しぶりに喜多方に行ってきました。そのくらはくの結果と今後の喜多方まちなかプランについて喜多方市民と一緒に語り、ビジョンを共有しようと「喜多方のまちづくりシンポジウム」が2月3日に開催されたのです。



その中では、市内在住の中学生を対象に実施された「喜多方の蔵悉皆調査」の結果発表がありました。学校で野原先生や地元の方を招き、蔵についての基礎勉強を行い、それから学生自ら学校周辺を歩き、蔵を数えながら、その場所を地図上に落とすなどの作業をやってもらう形で行われた蔵調査の結果は、中学生らしく、演劇、パワーポイント、絵本など様々な形で示され、中学生の蔵に対する考え方や、中学生パワーを感じさせました。

また、福島県からのまちなかプランをベースに北沢先生をコーディネーターとし、喜多方市長、商工会議所副会長などが参加した中で今後の喜多方のまちづくりについてのパネルディスカッションも行われました。市民側から熱い意見が出るなど、喜多方に対する皆の関心が高まっているものの、たくさんの課題も残っていることから、これからのまちのあり方について再び考えさせる場でした。(D1 鄭一止)

### 補遺

#### 「アーバンデザイナー・北沢猛氏の軌跡」

2010年3月14日、東大工学部11号館で「アーバンデザイナー・北沢猛氏の軌跡」(北沢先生の業績を思う会実行委員会)が開催され、「東京大学での実践から 福島県喜多方市」について、東大先端科学技術研究センター助教・野原卓の話があった。喜多方プロジェクトを率いた北沢猛の活動をめぐる回顧である。

配布された資料のうち、蔵のまちづくり協議会2008『喜多方まちづくりブック』所収の北沢猛稿「喜多方の地域遺産と未来デザイン」の一部を紹介する。北沢は喜多方出身で、東大喜多方プロジ

ェクトの開設者だった。

#### 喜多方の地域遺産と未来デザイン

私は喜多方(豊川と花園)に暮らしておりましたが、中学3年の時に横浜へ引っ越しました。その頃の喜多方の記憶は鮮明に残っています。今も変わらず、身近な自然が豊かな町ですが、15年程前でしたか、米山淳一氏(当時日本ナショナルトラスト)と訪問した際に、蔵の会の会長であった先代佐藤弥右衛門さんの話を聞いたことが大変に印象に残っています。蔵文化の奥の深さと尊敬や愛情が伝わってきました。

蔵は日常の生活や風景の中に印象が残っていますが、さらには地域の芸術文化や伝統産業技そして生活、まさに喜多方を育んできたという事実です。東京大学の『喜多方研究』も地域で暮らしている人たちとの協働作業で進めてきたものです。喜多方が忘れつつある豊かさや智慧を整理してきたものとも言えます。

4120棟の蔵。これからの悉皆調査でさらに増えると思われませんが、蔵の数としては日本一。座敷蔵から厠蔵、塀蔵とその種類や煉瓦などの素材も豊富で、鏝絵などの職人技は現在も継承されていることは驚くべきことです。

蔵の会や小田付町衆会、喜多方建築士会、東京大学、喜多方市が協力して、小学生の総合学力、高校生地域計画学習、中学生の蔵調査と、若い世代が地域遺産を知る機会も提供してきたことは意義あることだと思います。今年2月の中学生の調査発表には本当に感動しました。「身近にこんなに文化遺産があった」と素直に喜び、取り壊しに直面し「大変なこと」と残念がっていました。わたくしの子供の頃にはこうした体験がなかっただけに喜多方遺産の継承に期待いたしました。それだけに喜多方まちづくり協議会に集まった「公民学」の力を合わせて、喜多方の未来をデザインし次世代に可能性や楽しみをひきついでいくことが大切であると思います。

2008年5月

東京大学教授 北沢猛



北沢先生の業績を思う会 臨時の2階席まで埋まる満員の会場  
(『都市デザイン研マガジン』118号2010.3.15)

配布資料集には、野原卓の「蔵の文化を継承・活用する民官学の協働まちづくり(喜多方市と東京大学)」のコピーもあった。これは小林英嗣+地域・大学連携まちづくり研究会編著『地域と大学の共創まちづくり』(2008年)所収である。コピーの次の結びを載せておく。

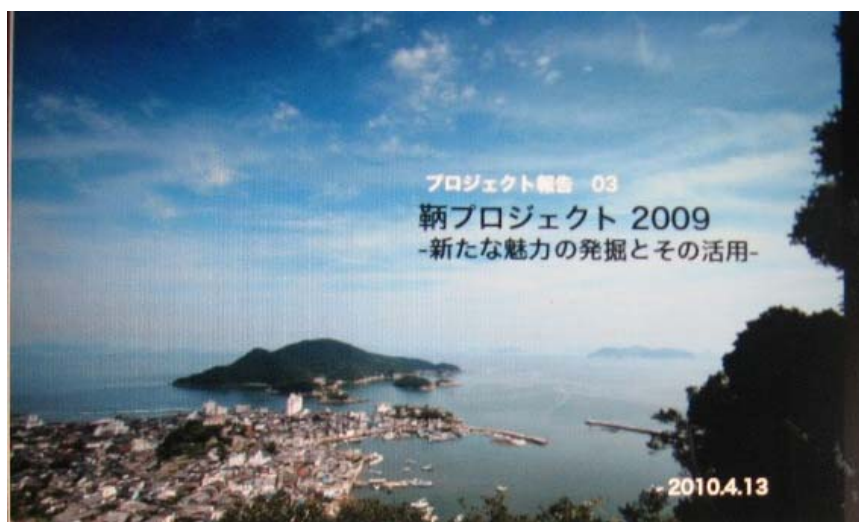
このように、喜多方のまちづくりは、全体として、地域の活動を大学や行政が支援する形で始まり、様々な活動を積み重ねとつながりを経て、有機的に絡み合いながら展開している。……ここでは、大学は、協働を行う上での第一歩の後押し、活動の方向性を定めるための空間像や再生

戦略の提示、そして、個別団体や個別地域に特化しがちな地域の動き、分野別で動きがちな行政の動きを補う形で、不足した連携を埋めるための「横」の動きをする役割を担ったということが言えよう。

## 4. 鞆の浦 まち博・ヨルトモ・鞆雑誌

### ユネスコ第1回プロジェクト未来遺産に登録

鞆の浦 鞆のまちは生きている。前に来た時には特に気にも留めなかった一介の空き家が、次に来てみると素敵なお店や住まいに再生されている。しかもそれらが次第に連なって、通りが明るくなったり、生き生きした表情を見せるようになっていく。そして、そうした再生に携わる人たちは、皆、手作り感覚で楽しそうに取り組んでいる。鞆雑誌第三弾では、「空き家」の再生から、まちづくりについて考えてみました。(中島直人)『鞆雑誌 2006』(2006年3月)



都市デザイン研究室ホームページ「鞆プロジェクト」のフロント

### 日本ユネスコ未来遺産

2010年、日本ユネスコ協会連盟の第1回「プロジェクト未来遺産」に、この鞆の浦が登録された。「鞆の浦には江戸時代の歴史的な町並みが今も残り、昔と変わらぬ穏やかな生活風景が広がっています。最近では映画『崖の上のポニョ』の舞台となったことでも知られています。こうした生活風景の中で、三味線やお囃子などの伝統文化を子どもたちに伝え、鞆の港やその周辺の美しさを未来へ引き継いでいきます」

未来遺産鞆の浦の概要である。東大まちづくりプロジェクトの活動も、この選定に力があつたのではなかろうか。けだし、2000年まちづくりプロジェクト元年から、ひたすら活動を充実させてきたベテランプロジェクトなのである。全国10団体が初登録されたが、東大まちづくりプロジェクト基地のある地域が2件も選ばれた。世界遺跡記念物会議（ICOMOS）前副会長で、日本イコモス国内委員会委員長・「プロジェクト未来遺産」審査委員長の西村幸夫にとって、登録団体は東大でない



にしても、都市デザイン研究室の初代まちづくりプロジェクト根拠地のうちふたつが選ばれたことは、感慨ひとしおと思われる。

私は 2006 年 3 月に学生と新宿から夜行バスで参加し、野原、中島、学生たち合同の合宿や「まち博」などを体験し、そのルポを『都市デザイン研マガジン』に発表した。その後もプロジェクトは着実な活動をつづけ、『都市デザイン研マガジン』によって「ヨルトモ」の提案を知った。

## ピストンのような中島活動記録

東大鞆の浦プロジェクトについて、2000 年度から 2005 年度までの活動は、研究室ホームページの鞆プロジェクトのファイルに、次のように克明に報告されている。ピストンのような訪鞆による活動ぶりである。中島直人のまとめである。

2000 年度 (2000.4-2001.3)

[鞆との出会い]私達は鞆で・・・何ができるだろう? 3/28 松居秀子さんから都市デザイン研究室にて鞆の浦を紹介 4/22~24 訪鞆(とにかく鞆のまちを見てみよう) 『第2回鞆の浦シンポジウム「つくろうわが町 21 世紀に向けて」』 5/3~7 ゴールデン・ウィークを利用して観光客に対するアンケートを実施 6/17~19 訪鞆(交通量調査・まちかど調査・ヒアリング、あいさつ) 8/31~9/3 訪鞆(発表・提案に向けた最終調査「地区別調査・テーマ別調査・実走交通量調査」)

9 月論文:「鞆の浦における観光のあり方に関する一考察」 10/21~22 訪鞆

「T-HOUSE2000」開催 12/1World Monuments Watch 登録申請 12 月『鞆雑誌 2000』発行

論文:「歴史的港町鞆の浦における実践的取り組み」 3/11~12 訪鞆(今年度の締めくくりとして、シンポジウムで発表)「第3回鞆の浦シンポジウム『鞆の浦の遺産と重伝建のまちづくりを考える』」参加・発表

2001 年度 (2001.4-2002.3)

鞆のまちづくりについて、思いっきり考えてみた、二年目。5/12~13 訪鞆(街並み環境整備事業関連) 6/23~25 訪鞆(交通の実体を知るためにまちなかでの現地調査、第一回鞆学校参加) 8/7~9 訪鞆(IFHP 国際学生コンペティションへ向けての現地調査) 8/17IFHP 国際学生コンペティションに参加(Revitalizing Urban Coreless Spaces)(佳作入選) 9/12~15 訪鞆(T-HOUSE 2001・鞆雑誌へ向けての現地調査)

9/2 2001 年度建築学会大会ポスターセッションで鞆雑誌 2000 の内容について発表 10/11 港町鞆が世界遺産文化財団(WMF)の World Monuments Watch に選出される 10/20~21 訪鞆「T-HOUSE 2001」開催 第5回鞆学校参加 12 月『鞆雑誌 2001』発行 3/2 ハウジングアンドコミュニティ財団の活動報告会参加 3/21~22 訪鞆(二年間の活動を総括して、シンポジウムで発表)「第4回鞆の浦シンポジウム『港町鞆の浦の再生に向けて』」参加・発表

2002 年度 (2002.4-2003.3)

初代メンバーが去った後、新しい活動を。鞆学校、町並みゼミでまちづくりのお手伝い。4 月計画案「鞆再生への提案」(『造景』36 号) 6/14~16 訪鞆(町並みゼミ関連。現 M1 は初の訪鞆) 8/8 訪鞆 鞆の浦から伊予までのクルージングに参加) 8/17 2002 年度建築学会大会ポスターセッションで鞆雑誌 2001 の内容について発表 9/19-22 訪鞆 第25回全国町並みゼミ鞆大会開催(分科会「まちづくりってなんだろう? ~鞆の魅力、町並みをこえて~」 夜なべ会「大学と町並み」などなど) 12/14~15 訪鞆(来年度の活動に向けての予備調査)

2003 年度 (2003.4-2004.3)

地元と協働して、四つ角の家の再生に取り組む。丁寧に丁寧に、進めてみた。4/19~20 訪鞆 鞆学校参加(「四つ角の家」再生ワークショップ(1)企画・実施) 5/31~6/1 訪鞆 鞆学校参加(「四つ角の家」再生ワークショップ(2)企画・実施) 7月日本建築学会設計競技「みち」に参加(凸凹みち) 8/22~25 訪鞆 IFHP に向けての調査 9月 IFHP 国際学生コンペティションに参加(Towards a Hosting Portal Town) 11/16~18 訪鞆 (来年度の活動に向けての予備調査) 12/13 「鞆ねぎらいと出発の会」(東京・日本大学駿河台校舎)参加 3/20~21 訪鞆 鞆学校参加(「四つ角の家」完成記念式典)

2004年度(2004.4-2005.3)

次のステップを模索。初心に戻り、鞆を見直す、鞆の動きに学ぶ。6/5-7 訪鞆 提案に向けた公共空間(バス停、神様など)調査 8月日本建築学会設計競技「建築の転生」に参加 「五拍の呼吸」(中国支部入選) 「漁師の大家」 9/25-27 訪鞆 空き家再生インタビュー調査 11/14-16 メディア研究会、鞆視察 3/11-13 訪鞆 鞆雑誌 2005 に向けた補足調査

2005年度(2005.4-2006.3)

空き家再生からのまちづくりに資する活動と学術的関心との融合を。6/11-12 訪鞆 ほうき工場実測調査 6月論文「鞆の浦埋め立て架橋事業に関する中国新聞記事分析」(メディア研究会) 8月空き家の実態に関するアンケート調査準備、登記簿取得 8/25-29 訪鞆 空き家実態調査/桑田家実測手伝い 11/3-7 訪鞆 「鞆まちづくり博覧会」開催(日本大学との共催)

## 都市工学専攻メンバーで観光班

2009年度の活動は、東大大学院の都市工学専攻6人を中心に、建築学と社会基盤学専攻および新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻の13人による合同活動が、ヨルトモを含めて行われた。

まず鞆の浦の紹介は、研究室の鞆の浦プロジェクトのホームページに、次のように書き込まれていた記事がまとまっている。

Location 広島県福山市は瀬戸内海に面した小さな港町。福山市中心部からはバスでおよそ30分。アニメ「崖の上のポニョ」のモデルとなった地。

History 瀬戸内海の中央に位置し、1500年頃から北前船、朝鮮通信使潮待ち寄港地として繁栄した。朝鮮使節は対馬 江戸間において最も美しい景色であったとし、「日東第一形勝」と評した。

Attractions 鞆の魅力は瀬戸内海国立公園として指定されている自然美溢れる風景だけではない。日本で唯一、近世港湾施設5点が一体となって残る。常夜燈、雁木、波止、焚場跡、船番所跡。

雁木については、私が鞆の現地で聞いたとき、新潟などで雪を避ける軒下アーケードと違って戸惑った。ここでは、海岸の階段状護岸が、横からみて雁行に見立てられるところからの名称だった。

ホームページによれば、合同活動の13人のうち最も多い都市工学専攻6人のうち、松井(D2)、阿部(M2)、神原(M2)の3人が「観光」をテーマに選び、「観光班」を名乗った。プロジェクトに「観光」が躍り出たのである。『観光まちづくり』の影響が考えられる。次いでツーリズムの頂も現れた。

Tourism 観光班は社会実験「ヨルトモ」の運営を中心に行いました。夜の魅力調査 夜景、ライトアップ箇所、広報活動、ホームページ、ポスター、チラシ、他大学への呼びかけ 現地事後報告会、地元主体の活動へ向けた議論。

そして、次のアナライズにも観光班らしい記述がみられる。

Analysis 目的 観光客にとっての魅力把握する。 広い範囲に観光客を誘導する。 宣伝に力を入れ、実験イベントとする。 夜の観光需要を把握する。

結果 観光客の多くは、ライトアップに魅力を感じていた。少しではあるが、サインにより広範囲に誘導はできた。半数近い観光客が事前の宣伝によって、ヨルトモを目的として訪問していた。福山市などの鞆近郊から自家用車による日帰りの観光客が多くみられた。

そして、最後の今後の課題について、「夜の観光を受け入れるためには、住民主体の準備が必要となる。学生活動からの転換をいかに図っていくか、昼だけでなく夜の魅力も伝え、滞在時間をいかに長くして経済的効果をもたらすかなど。

そのうえ、「鞆のまちづくり資源としての観光学史調査」などを進めたいという。観光まちづくりに拍車のかかる観光班の登場だった。一過性では惜しい。

旅情ミステリーによる関係地の描写  
内田康夫『鞆の浦殺人事件』(徳間文庫 1991年)

「鞆の浦」といって、すぐにその名のイメージが浮かぶ人は、地元付近の人をべつにすれば、そう多くはないだろう。広島県福山市鞆町は、しかし歴史的にかなり著名な土地柄である。福山市の観光パンフレットには「鞆の浦」について、つぎのように紹介されている。

福山駅から南へ14キロ、沼隈半島の先端にある鞆の浦は、瀬戸内海国立公園を代表する景勝地で、おだやかな瀬戸内の海に、弁天、仙酔、皇后などの緑の島々が浮かぶすがたはさながら一幅の絵のようです。また、鞆の浦は瀬戸内海の中央にあたり潮の流れの変わる所で、その落ち着いた港町の風情に瀬戸内のふるさと感じさせてくれる町です。

観光パンフのうたい文句は、概してオーバーなものが多いけれど、鞆の浦についてのこの説明は、ほぼ掛け値なしだと思いたい。……鞆の浦には巨大仏像もなければ、大レジャー施設もない。あるのは、まさに「瀬戸内のふるさと」を感じさせる。いかにも素朴で、のどかな風景ばかりである。そしてそれがまことに美しい。

ただし、鞆の浦が隅から隅まで、すべて美しい景観であるというのでは、もちろんない。鞆の浦沿岸にもごくふつうの暮らしをする人々が住み、日々のたつきに励んでいる。零細な漁業者もいるし、海岸線を北へゆくと、すぐ隣には寂れた工業団地もある。かつて盛んであった酒造りの家も、ボロボロの壁を傾けて、ひたすら歴史の重みに喘いでいるかのようだ。

また、足利義昭が織田信長に追われ、毛利を頼ってきて、この地に「鞆幕府」と呼ばれる足利最後の拠点を樹てたといわれる。そういった「つわものどもが夢のあと」は、いまはひっそりと、瓦屋根ばかりの低い家並みそのものように、鞆の浦の風景の中に沈んでいる。そのさりげなさが、なんとも味わい深いものなのである。

鞆の浦の美しい風景に浸りきりたければ、仙酔島に渡るのがいい。仙酔島からの眺望には、瀬戸内海はおろか、日本中の海でも残り少なくなった、手垢に汚れていない「むかし」がある。夏の海水浴シーズンを避ければ、この島はたとえ東の間でも、浮世の憂さを忘れさせてくれる別天地だ。茜雲を映した夕暮れの海に、黄金色の波を立てながら、小さな漁船が港に帰る風景は、たぶん子供の頃、どこかで出会ったような郷愁を蘇らせる。(pp.64~66)

寺の裏手の斜面に、両親と祖父の骨を入れた墓がある。そこからは鞆の浦が一望のもとに見渡せる。祖父が馴れ親しんだ仙酔島も、きらきらと漣が輝く静かな海に浮かんでいる。……鞆美は応え、祖父のために最後の花を飾った。境内に駐めてあった車に乗った。鞆の町の道は狭い。崩れかかったような旧家の谷間に、人力車でも擦れ違えるかどうか というような道がある。「鞆美って、いい名前だなあ」牧村はいまさらのように言った。(p.233)

## 創刊号

2005.4.15

鞆の浦 広島県の潮待ちの港町として栄えてきた風光明媚なところ。人口減と空き家増、細い道の交通渋滞が目立つ。サーベイ、ワークショップを重ね、空き家を改造したりしてまちづくりに取り組む。みんなでつくった評判の『鞆雑誌』はぜひ見てほしい。

## 7号(2005.7.15)

トップ

鞆の浦メンバー、元ほうき工場を実測

6月11日から12日の週末に、都市デザイン研究室鞆の浦メンバーは、今年最初の広島県鞆の浦行きを敢行しました。中島助手、阪口M2、西原M1、そして鞆初体験の留学生チー、新M1の江口、鈴木、ゲストの黒瀬M2。毎度おなじみの新宿20時55分発の夜行バスでの早朝の鞆入りは、何度体験しても新鮮な気持ちになります。今回は、新入生まちあるきや地元NPOとの懇親会のほか、今は空き家になっていますが、今後まちづくりの拠点として活用が期待される元ほうき工場の実測などを行いました。新しい『鞆雑誌』の発行、ほうき工場での新しいIT-Houseの開催と夢はふくらむばかりです。



相変わらずの常夜灯



ほうき工場内部、廃墟・・・



実測調査隊の面々

**チーM2の感想** 鞆初体験の留学生として、この港町の美しさに強く感動しました。波止、雁木、常夜灯のような特別なものを発見するのはとても楽しかったです。とくに、その都市構造には長い歴史の痕跡が見られます。伝統的な商家が並ぶ通りや寺院が卓越する界限、ずっと昔から変わらない斜面を登り下りする階段が印象に残りました。また、住宅の建ち並ぶ地区では、排水施設やおしゃべりの場、祈祷の祠、そしてお風呂まである多機能な共用空間の存在が大変興味深かったです。住民の人たちが古い家をミュージアムや公共施設として活用していました。

## 16号(2005.12.1)

トップ

百花繚乱・プロジェクト報告会

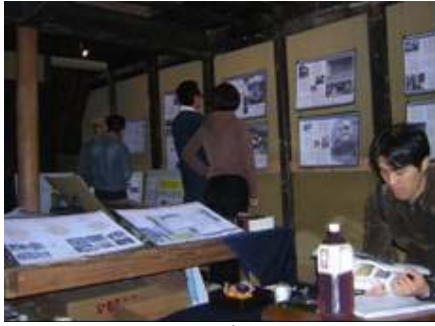
11.18研究室会議で年度中間成果を発表

鞆の浦 空き家「まち博」成功が拓くこれから

今年度メインの活動は、伝建地区を対象とした「空き家調査」。最新の空き家実態を、住宅地図などの文献と現地調査から把握した。その上で夏休みに、空き家の持ち主にアンケート調査を実施。アンケート用紙を一枚一枚訪問手渡しして、今後の空き家利用の意向などを問うた。得られた結果を生かして今後どう活動を展開してゆくかが問われる。

<鞆まちづくり博覧会> (11/4~6)

おだやかな晴天に恵まれた「鞆まち博」は、初日、(金曜日)のテレビ報道のおかげもあって、週末に多くの人を訪れた。会場は、県道に面した、常夜灯への通り突き当たりの空



展示会場



展示パネルの一部

き家。この建物は12月に鯛めし屋としてオープンするため内装工事中であり、正に「空き屋再生」が進行する現場を借りての展示となった。展示では、上記アンケート調査結果・空き家再生の事例紹介とインタビュー・空き家利用に関する試案などをまとめた。

また今回は、日大/伊東研との共同開催というかたちを初めて試みた。デザイン研が「まち展示」、伊東研が「みなと展示」と題して、連携・協力。毎夏恒例の「雁木ライトアップ」を協働して行った。(M1 坂内良明)

## 24号 (2006.4.1)

### トップ



### 鞆「まち博・春一番編」で空き家調査集大成

都市デザイン室研究室有志チームは、3月17~21日の5日間、第2回鞆まちづくり博覧会(「鞆まち博・春一番編」)を日大・伊東研究室と共同開催した。昨年11月に実施した「第1回まち博」以降の補足調査の結果を新たに盛り込み、会場も、鞆でもっともにぎやかな通りに面する太田家住宅・新蔵(重要文化財)に移して、年度納めにふさわしい堂々の博覧会となった。展示の内容は『鞆雑誌』としてまとめられていて、近日中に発行予定。(左は、「まち博」ポスター)

## 「花開ク時蝶来リ」の鞆プロジェクト

### 引かれてまちを荷風ばりに悉皆散歩

本誌前編集長・酒井憲一

「花開ク時蝶来リ 蝶来ル時花開ク」という良寛の詩がある。研究室の鞆プロジェクトに参加してそれを想った。3月17日からNPO鞆まちづくり工房で合宿し、第2回「鞆まち博」オープンに立ち会った。鞆の調査研究と提案パネル30枚が夜行バスで研究室から運び込まれての開催だった。

鞆プロジェクトの活動については、『鞆雑誌』創刊号で電撃的に魅了され、研究室会議で幾度となく報告を聞くうちに参加意識が募り、『都市デザイン研マガジン』7号のトップ記事に、鞆の浦行きは「毎度おなじみの新宿発20時55分発の夜行バス」とあった「毎度おなじみの」の7字にぐっと親近感が出て、どうしても参加したくなった。今回の鞆入りは、そのバスで学生たちと赴くことができラッキーだった。

まち博で住民の声を聞いた。東大の空き家再生調査活動が直接役立つので関心が深い、という複数の答えが返ってきた。パネルを読んでは、そこに表れた場所へ足を運んだ。西端の医王寺太子堂(きつい登りだった)から東端の安国寺までの間は縦横に歩き回ったが、実際思わず入りたくなる茶処田淵屋、深津屋、友光軒、食事処海彦などが、最近まで荒廃した空き家だったとは、つゆ想像

できない町並みの繁盛ぶりだった。そのひな飾りの家で、港の埋立架橋計画はひどいという反対の声を聞いた。その港にあるいろは丸展示館となりの茶処「とうろどう」には、「西村幸夫様 ねじめ正一」の色紙が飾ってあって驚いた。同姓同名だった。ここから平まで足を延ばした。

この期の町内は「鞆町並ひな祭」にあたっていた。民家、店舗計80軒が道から見えるようにひな飾りを見せていて、「花開ク時客来り」の賑わいの波が、まち博にも及んだのだった。各拠点でひな飾りを公開する行事は、全国的に珍しくないが、民家までそろってお披露目という風景は初めて知った。鞆の優しさと物静かさの心意気がいい。

今回も女子学生たちは風のようにインタビューに向かい、男子学生は龍馬会談の旧家再生現場でヘルメットをかむって、こともなげに木製の磨き出しに精を出した。この「風のように」と「こともなげに」が学生たちの共通した行動姿勢だった。奇しくも鞆と同じ優しく物静かな心意気が、研究室のキャラクターなのだと思った。

空き家再生のプロモーターで、いつものように宿所を提供された鞆まちづくり工房代表松居秀子さんの情熱的な話を昼に聞き、夜はさらに情熱的な夫君を交えて、中島直人助手や学生たちと夜っぴて懇親したほとぼしる夜が忘れられない。「鞆開ク時東大来り 東大来ル時鞆開ク」の誇りで、鞆プロジェクトの充実を期待したい。参加者：江口久美M1、岡村祐D2、酒井憲一研究生、阪口玲磨M2、鈴木智香子M1、中島直人助手、西原まりM2、坂内良明M1（五十音順）



にぎわうまち博会場



ひなざりど（ホテル）



おや、西村教授色紙？



民家再生作業（右端院生）



宿舍の深夜コンパ 中央左筆者

27号（2006.5.15）



『**鞆雑誌 2006**』発刊・頒布中 2000・2001 に次いで3巻め

鞆チーム悲願の『鞆雑誌』が、ついに完成。2005年度に取り組み、2回の「まちづくり博覧会」で地元はその成果を問うた「空き家」調査の結果を中心に、106ページの冊子となった。

5年ぶりの発刊、といっても、その間、活動が途絶えていたわけではない。2000年度からの初代・鞆メンバーである中島助手が「あとがき」で述べているように、2004年度にも冊子作成が試みられ、あと一步のところで見送りとなった経緯があったのだった。内容的には、3部構成中の「第2部 空き家再生インタビュー」の多くと、「第3部

空き家再生提案」の半分ほどは、2004年度の活動の成果に依っている。2004年度も編集作業に加

わった西原まり M2 は、「一昨年度来の「宿題」を果たした、という感じでしょうか。気持ちを新たに、今年度の活動を進めてゆけそうです」と、感慨深げに語った。

『鞆雑誌 2006』入手希望の方は、下記までメールでお申し込み下さい。郵送にてお送りしますので、同封の振込用紙にて、実費（印刷・製本代：700 円 + 送料 300 円 = 1000 円）をお振込み下さい。

都市デザイン研究室・有志鞆チーム tomo@ud.t.u-tokyo.ac.jp

29号 (2006.6.15)

鞆チームもそろり始動

港とまちの関係をさぐる2006年度

プロジェクト・チームの現地訪問が相次ぐなか、自主プロジェクト「鞆」も、5月からほぼ一度のペースで、こぢんまりとミーティングを重ねている。日本の港風景に憧れたタイの留学生コンビ ユイD2、ボンサンM1 今は海なき埼玉県民ながら生まれは瀬戸内・今治の吉田M1、3名の新メンバーを加えて、いざ潮は満ちたりと、ゆるやかに出帆だ。

積年の課題であった「空き家」に『鞆雑誌2006』で一区切りをつけた今年度は、「港町にとって港とは何か」をテーマに、鞆以外の港町との比較も含めた広い視野で鞆を見つめ直す。(bannai)

34号 (2006.9.1)

トップ

鞆チーム2006、さすらいの港町調査

「港町にとって、港とは」問うて三港めぐる

昨年度に『鞆雑誌2006』を発売して、鞆の「空き家」再生潮流を紹介した有志鞆チーム（中島直人、M2チー、西原、鈴木、江口、M1ボンサン、吉田）。今年度は副題の問いを掲げて、他の港町事例を研究中。先8月16日から19日にかけて、訪鞆に合わせて瀬戸田（尾道市）、手結（高知県香南市）の2港の現地調査を行った。

8/16瀬戸田の燈籠流し 8/17鞆へ

8/18・19手結の跳ね橋 最終日の19日は、8人全員で、「日本最古の掘込港湾」手結港の、みなとまわり建物を悉皆調査。1時間おきに立ち上がる臨港可動橋の異景にうなりながら、何とか持ちこたえた天気感謝しつつ、午後に解散。

ふりかえれば、毎日海を眺めながら、一度も泳がずじまいだった4日間。旅費などの都合もあって、各港1泊ずつの慌しいスケジュールだったが、誰に頼まれるでもなく、事前の文献調査のみを元にしながら、まったく未知のまちを歩いて問いの答えを探る旅には、鞆チームならではの自由研究ぶりが横溢していた。(bannai)

49号 (2007.5.16)

トップ

新緑の季、まちづくりの芽吹いて

全国各地で今年もプロジェクト始動

鞆TOMO-広島県福山市

瀬戸内の情緒ある古港、鞆の浦が舞台のプロジェクトです。

今、鞆の浦は、歴史的港湾への埋立・架橋を巡る裁判を6月に控えています。このような状況を受けて、鞆プロジェクトは、研究室のプロジェクトとしての意義も模索しながら、昨年度から鞆の

浦だけでなく他の港町にも目を向けた活動をしてきました。

今年度は「港町ネットワーク・瀬戸内」と連携した活動を計画しています。具体的には、「北前船」という観点から瀬戸内の港町の歴史や現在のまちづくりを調査研究して、町の将来像を描き、今後のまちづくりのあり方を提案しようと考えています。(D1 鈴木智香子)

## 52号 (2007.6.10)

### トップ 「鞆」遠方より来る、亦楽しからずや 鞆プロジェクト2007、現地訪問で二浦まちあるき

快晴の空が東京からの来訪者を迎える。6月9日・10日にかけて、鞆プロジェクトメンバーも現地を今年初訪問。1泊4日の強行日程も物ともせず、鞆・尾道2つの町で精力的に散策をおこなった。

架橋問題をめぐる裁判を7月に控え、激動が予想される2007年の鞆。東大チームの今年のテーマは「港町ネットワークの創造」。昨季より続く中国・四国の古港調査を、広域的なまちづくりにつなげたい。新メンバー3人を加えた鞆プロジェクトは、瀬戸内の海に大きな航跡を描くことが出来るか。(ishii)



## 57号 (2007.8.25)

### トップ 盛夏の瀬戸内調査、3港を倒す

夏真っ盛りの八月初旬、4泊6日で3港回り、最終日に成果を発表するという強行日程のもと、瀬戸内調査は行われました。

初日はメンバー全員で香川県は粟島へ。島民300人弱。観光まちづくりもこれからという小さな島ですが、両側を浜辺に挟まれた天然の砂洲や、夜には淡い光を放つ海ほたるなど、自然が豊かに残った美しい場所でした。2日目は午後瀬戸大橋を渡って一路本州へ。3日目は岡山で尾道班と室津班に分かれ、それぞれ調査へ。観光まちづくりがかなり進み、多数の主体が活動しているためにヒアリングに奔走する尾道班とは対極的に、小さな港町で活動を集約している室津ではじっくりとお話を伺うことができ、少ない時間ながらも濃密な調査ができたと思います。



4 日目は一同輓にて合流し、夕方に予定されていた、日大伊東研との合同調査発表会の準備に追われました。室津班に至ってはわずか2時間弱の猶予でしたが、各港の空間特性とまちづくり活動実態について報告しました。港湾施設を中心に調査してくれた日大チームの報告に新たな発見を得るとともに、自分達の調査をまとめるよい機会となりました。輓チームは今年中に再度瀬戸内の港調査を行う予定です。(M1 山田渚)

72号 (2008.4.10)

### 1 席に入選 輓PJ、広域観光論文

輓PJの受賞に関してご紹介します。紙面での取り扱いが遅くなり申し訳ありません。

昨年、財団法人アジア太平洋観光交流センターが募集する「第13回観光に関する研究論文」に、「北前船をテーマとした広域観光に関する基礎的検討 北前船関連観光資源の全国調査を中心として」を応募しました。内容は、北前船に着目し、その広域観光のテーマとしての可能性の検討、提案のための基礎作業として、北前船寄港地における近年の北前船に関する観光施策の全国的動向および先進地の特徴を明らかにするというものです。北前船寄港地を有する全国の13自治体に実施したアンケート調査(回収率89.9%)を中心に研究を進めました。

審査結果は、大変喜ばしいことに、「一等」。昨年12月に、表彰式に出席してきました。

審査委員長の白幡洋三郎先生をはじめ、審査委員の先生方からは、以下の点を評価していただきました。

- ・既存行政区域に縛られがちな日本の観光行政に新たな風を吹き込もうとする問題意識。
- ・北前船を広域観光のための資源と位置づけた発想。
- ・全国調査による「基礎的検討」という位置づけをもとに着実な手法から観光の現状に問題提起する堅実さ。



受賞の様子。

鈴木(前列中央)、山田、北村、  
江口(後列左3人目から)

< 審査委員長の言葉 (HPより一部抜粋) >

一席に選ばれた鈴木(ほか計7名)論文は、「広域観光」をキーワードにして、既存行政区域に縛られがちな日本の観光行政に新たな風を吹き込もうとする問題意識に満ちたものである。江戸時代から明治中期まで活躍した広域商船というべき北前船に注目し、とくにその寄港地が日本各地にまたがることから、広域観光のための観光資源と位置づけた発想は秀逸だった。もっとも北前船関連の「観光資源」調査は周到であったが、主として関係自治体へのアンケートで補完されてはいるものの、いわば臨場感に乏しい分析との印象は否めない。論文末の提言部分も特段の強固な論理と主張が見られないところから一席に推すことに不安感が残ったが、全国調査による「基礎的検討」という位置づけをもとに、着実な手法から観光の現状に問題提起する堅実さが評価され、最終的に全員一致で一席に決まった。(D2 鈴木智香子)

82号 (2008.9.10)

トップ

鞆、今年は表舞台でプロジェクト!

瀬戸田で第2回展示会、鞆で企画実施に向けたWS開催

宮崎駿作品の「崖の上のポニョ」の舞台となり、何かと話題が豊富な鞆の浦。都市デザイン研究室の鞆プロジェクトでも「港町交叉展 in せとだ」やワークショップ「ヨルトモ」を実施。今年は鞆から目が離せません。

8月、鞆PJはいつになく大忙しでした。まず23日、瀬戸田にて「港町交叉展 in せとだ」を開催。最初、でだしは鈍かったものの、地元の方が知り合いなどを連れて来てくださり、活発な意見交換ができました。「とあるヤンママ風の奥さんが、子供が『もう他に行こうよ!』とせがむ中、『あとちょっとだけ』と、ずっと熱心にパネルを見てくれていたのに感動した」と、M2山田。最後は灯籠流しを見つつ、海岸でビールを味わい、至福のひとときを過ごしました

息つく間もなく、次の日の晩には鞆でワークショップ。「夜こそ、鞆の魅力がある」と考え、鞆PJでは中秋の名月に「ヨルトモ」という夜のイベントを企画。遅くまで店を営業してもらうべく、この日はお店の人など10人ほどに集ってもらい、夜遅くまで営業することの課題などについて議論を交わしました。店の方々の反応は上々。何としてでもお客さんを町に呼び込み、「これからは夜まで店を開けよう」って思ってもらうべく、企画の成功を祈るばかりです。

なお「ヨルトモ」は、9/13~14の夜に実施します。もし学会前にお時間があったら、ぜひ鞆へ来て下さいね!(M2 北村修一)



港町交叉展 in せとだ (汐待亭、歴史ある町屋)



鞆でのWSの様子



灯籠流しの様子

83号 (2008.9.29)

ヨルトモ'08、中秋の名月の下で開催

夜の鞆を楽しむイベント、その名も『ヨルトモ』が、9月13・14日の2夜、地元の秋祭りに合わせて開催されました。普段はほとんどの店舗が夕方5時過ぎには閉まってしまい、観光客もほとんど出歩かない鞆の町。『ヨルトモ』は、そんな鞆で夜の店舗営業の可能性を探ること、静かで美しい夜の魅力を観光客の方々にも知ってもらい、ゆっくりと滞在してもらうことを目的とし、我々有志鞆チームが実験的に企画しました。

当日は店主の方々のご協力のもと、特別に夜10時まで延長営業。雁木(がんぎ)に月を眺めながら飲める、保命酒カクテルバーを即席営業しました。

ホテルから浴衣を着てきたり、ちょっと時間を延ばして夕飯まで食べて帰る観光客の姿が見られ、「潮風が気持ち良かった」「夜景が綺麗だった」など、夜のそぞろ歩きを楽しんでもらえたようです。初めてということで、課題も多く見つかった今回。ぜひ次回に繋げ、鞆の新たな恒例イベント

になってくれたらと思います。(M2 山田渚)

86号 (2008.11.10)

### 靱プロジェクト北海道遠征

11月8日、第43回日本都市計画学会学術研究論文発表会が北海道で行われ、その中でワークショップ「歴史的港町・靱のまちづくりを展望する～埋め立て架橋計画、世界遺産訴訟のその先へ～」が行われました。

靱の原告の方、NPOの方、担当弁護士、イコモス、および西村先生、中島さんによる講演のあと、参加者による熱い議論が交わされました。

靱PJメンバーは資料作成や運営の手伝いなどを行いましたが、訴訟の技術など初めて耳にすることもあり、とても感心させられました。参加者も想定より多く、埋め立て架橋問題に対する関心の



担当弁護士の訴訟経緯に聞き入る参加者

の高さを伺うことができました(ついでに、持っていった靱雑誌10冊は完売しました)。前日には小樽にて、小樽運河の保存運動に長く関わってこられた方々の講演も伺いました。ある講演者の方は、94歳にしてなおその喋りに力があり、訴えかけるものがありました。まちを保全していくこと以上に、輝かしい人の生き方を見せていただいたような、そんな気持ちでした。(M2 北村修一)

88・89 合併号 (200.12.25)

### 靱

中島助、M2 喜多村、山田、長澤、M1 西川、六田( ) 印が執筆担当者

「靱雑誌2008」の出版を皮切りに始まった靱PJ、今年は観光と生活・文化の視点から靱を捉えるということを目指し、7月に駐車場の利用状況調査や店舗に関するヒアリングを行いました。この調査を踏まえ、夏の明け方の山田さんの一言から始まった。「『ヨル』の靱にちょっと立ち『よる』」をテーマにしたイベント「ヨルトモ」を中秋の名月のもとに行い、準備期間が短かったにもかかわらず多くの方から好評をいただきました。

その他にも、8月に尾道市瀬戸田町で「潮待ち交叉点展 in せとだ」の実施、11月には北海道で行われた都市計画学会のセッションへの参加と、靱以外での活動も充実した1年でした。

94号 (2009.3.10)

### 2008年度を締めるワークショップ開催



ワークショップの様子

金子国土交通大臣の発言を受け、さらに架橋問題で揺れる靱においては、ポスト埋立架橋計画を見据えて、諸課題について早急に考えることが必要とされており、外部の新鮮な目線を取り入れることで、今後のまちづくりに対する示唆を得たいとの思いから、3月6日～8日の日程で、ワークショップを開催しました。

留学生を含む建築史・景観・交通を専攻する学生約20人が参加し、交通・観光・建築史・環境デザインの4つのチームに分かれてのまち歩きとディスカッションを経て、住民の方からも好評でした。

「鞆雑誌 2008」の発行に始まり、夜の鞆の町を楽しんでもらう「ヨルトモ」のイベント、都市計画学会でのシンポジウムそして今回のワークショップと、今年度の鞆プロジェクトは「啓蒙」の年であったように思います。来年度以降も鞆の未来を描くお手伝いをしていきます！（M1 六田康裕）

104号（2009.8.10）

プロジェクト報告 鞆 ヨルトモに向けて着々と進行中!!

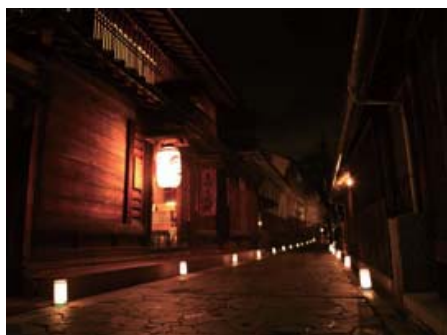


今年度第二回調査を実施。8月1~3日にかけては建築史班が茶屋蔵の実測を、6~7日にかけてはヨルトモへ向けた準備としてライトアップ実験、地元の方々へのヒアリングを中心に行いました。今年は昨年反省を踏まえて、広報にも力を入れていこうと頑張っています。ヨルトモ'09は9月12~13日に開催。第二回鞆の津ともえ祭りも同時に開催されます。ぜひ、ひと味違う夜の鞆を体感しにいらして下さい!!（阿部）

107号（2009.9.25）

ヨルトモ 2009 を開催!!

“Yorutomo 2009” was held!!



太田家住宅前ライトアップ



地元の方々の三味線演奏

鞆プロジェクト前半の活動を総括するイベント「ヨルトモ 2009」を去る9月12日(土)、13日(日)に開催しました。昨年度に引き続き2回目となった今回は、内容・規模ともに昨年度を上回る取り組みとなりました。

今年度は夜の鞆の魅力を探ることを目的に、まちなかの店舗の延長営業、路地や浜のライトアップ、茶屋蔵の公開、保命酒を使ったカクテルを提供するバーなど、数多くの企画を用意。1日目は夕方まで大雨に見舞われたものの、その後は幸いにして天候に恵まれ、多くの観光客の方や地元の方に楽しんで頂けたようです。また、学部生も手伝いに駆けつけてくれ、2日間のイベントを無事に終わることができました。今後はヨルトモの結果報告会を鞆にて開催し、来年以降に繋げていく予定です。（M2 西川亮）

112号 (2009.12.16)

2009年、都市デザイン研究室 日々変化、日々成長

Following the track of Urban Design Lab in 2009

鞆の浦 TOMONOURA



2009年度初の現地調査ヨルトモに向けて準備 ヨルトモ2009開催 昨年を上回る盛り上がり

113号 (2009.12.25)

プロジェクト報告 鞆 ヨルトモに向けて着々と進行中!!



初鞆の今回、「ヨルトモ報告会」に参加させて頂きました。学生報告の後、住民の方々と交えてWSを行い、まだ知られていない鞆の魅力、ヨルトモの運営方法など真剣な議論が行われ、大変有意義な場となりました。鞆を実際に歩いてみて様々な発見があり、貴重な体験になりました。今後も真摯に取り組んでいきたいと思っています。(空間研 M1 阿南隆史)

121号 (2010.4.25)

プロジェクト報告

春! プロジェクト始動!

鞆プロジェクト

新メンバーを迎え、それぞれのプロジェクトも本格的に動き出しました。

4月18日から20日にかけて新生プロジェクトチームが訪鞆。今回の訪問・調査には今年度から参加する5名の新メンバー(都市工学専攻:高見、西村、安川、山重;建築学専攻:内藤)が参加し、地元でお世話になっていた方々に挨拶、昨年度までのプロジェクト内容を踏まえたまち歩きをした後2005年度に一度実施した空家調査の現況アップデート、伝建地区内の道路における交通量調査といった、これからの活動に必要な基礎的な調査を行った。

判決が出た昨年の秋から急激に観光客が増えているという地元の方の話を目の当たりにした。茶屋蔵の有効活用、空家のセミナーハウスの転用実験と並んで、押し寄せてきた観光の波にどのようなまちづくりのあり方で応えていくのかが我々のチームにとって大きな課題であることが感じられた。(D1 ウィチエンブラディット・ボンサン)



常夜燈を背景にPJメンバー勢揃い



早速現地でポストイットトーク

### 補遺

2009年10月3日、広島地裁で鞆の浦埋立架橋事業免許差し止め判決があった。「鞆の浦の景観は美しいだけでなく文化的、歴史的価値を有し、国民の財産である」と「景観利益」を認めた。原告団事務局長・松居秀子さんの「NPO 法人鞆まちづくり工房」は、東大鞆プロジェクトに合宿の場を提供し、私も宿泊したことがある。観光まちづくりにとっての勝訴に、鞆プロジェクトも沸いたに違いないが、控訴審待ちの状況を受け、『都市デザイン研マガジン』は目立つ扱いをしない冷静さをみせた。

ともあれ<「鞆」遠方より来る、亦楽しからずや>の名見出しを残した編集部健闘である。

## 5. 佐原 合言葉「ぐるぎ+」・回遊性向上

### 空き家で古着屋実験、倉庫で「夢見るくら」

佐原プロジェクト 都市デザインの中で、古き良き「まち」に新たな可能性を与える。そんな試みが千葉県・佐原でおこなわれている「佐原プロジェクト」だ。地元のひとびとと研究者・学生との活発なコミュニケーションの中で、少しずつ「まち」の将来像が浮かび上がっていく。単に町家を店舗とするのは、マーケティングや市場の仕事だろう。それを東大都市デザイン研究室が社会実験しとして関わったのはなぜか。(窪田亜矢) 東大広報誌『淡青』23号 p.21



都市デザイン研究室ホームページ「佐原プロジェクト」のフロント

## 工学院大からの継承

都市デザイン研究室の佐原プロジェクトは、2007年度に発足した。大きな佐原での活動は、東大都市デザイン研究室時代に工学院大専任講師に転じ、准教授になっていた窪田亜矢がその工学院時代に実績を築いていた。この実績が2008年度、窪田の古巣東大着任時に導入され、都市デザイン研究室の「工学院・東大合同プロジェクト」として新発足した。

佐原は同じ北関東の佐倉と混同されやすいが、佐原市という市はなく、千葉県香取市佐原である。そして、香取神宮とともに、隣の茨城県潮来市潮来と水路めぐりで有名な観光地である。

佐原プロジェクトのホームページは、「LOKATION 八重洲からバスで1時間半、東京駅から電車で約2時間」から始まる。次いで、あとは「駅前再生計画」「香取市の生活拠点づくり」「空き家再生計画」とあり、観光については「観光と生活の共有」という言葉が並んでいる。

ツーリズムは巡り、周遊であり、観光といえば回遊性である。その回遊性づくりに力を入れていて、「回遊性向上計画」「周遊性まちづくり」とある。

その他「行政との近さ 住民との近さ」「建築から都市まで」「リーダーシップ チームワーク」の項目もあるが、行間にまで観光まちづくりへの意気込みが感じられた。佐原プロジェクトで最も惹かれたのが、「ぐるぎ+」というロゴである。『都市デザイン研マガジン』に、「人や物がぐるぐる循環するように」という願いを込めた言葉とあった。まさにその通りの語感である。平戸市の隠れキリシタンが守り伝えた「グレゴリオ聖歌」の歌オラショに、「ぐるりよぎ」があるが、この「ぐるり」も巡り、巡礼、ツーリズムを連想させる言葉である。「ぐるぎ」は「ぐるり」「ぐるぐる」を昇華した言葉に感じられる。

## 佐原・潮来日帰りバスツアー

その佐原であるが、ツアコンになる気持ちが起こったとき、ツアコンの実務状況を改めてみたくなり、時期もあやめシーズンということで、2009年6月にはとバス日帰りツアーに参加した。「小江戸佐原の舟めぐりと水郷潮来あやめ祭り」コースである。5980円だった。

新宿西口を8時40分に出て、浜松町、東関道を経て1時間半足らずで佐原に着いた。電車では東京駅から2時間かかる。当地ゆかりの伊能忠敬旧邸と記念館を観て、その前の

野川を「小江戸さわら舟めぐり」と称する舟に乗り、佐原のまちなみを川面から見上げて往復し、下船後は香取街道の重伝建地区を散策した。

『都市デザイン研マガジン』で、佐原プロジェクト活動の見所を調べて、「ぐるぎ+」古着屋の跡や中村屋倉庫など、その足跡を自由行動の時間に駆け足で回りたいかったが、時間が足りず探し得なかった。

佐原のまちから、バスは潮来町へ移動した。こちらのサッパ舟めぐりは、オプションだった。むろん、オプションであろうがなかろうが、そこでも舟に乗り込んで周遊した。前川あやめ園のあやめは、みごとだった。ツアコンもガイドも誠実な実務ぶりで、楽しい一日だった。佐原プロジェクトの活動は、『都市デザイン研マガジン』にかなり克明に掲載されている。

学生たちが参加したまちづくりプロジェクトの活動が、なぜ論考や書き物にされないのか、という疑問に答えていたひとりに、都市デザイン研究室のパンノイ・タッタポン（博士課程）がいた。佐原プロジェクトで積極的に活動したことは、都市デザイン研マガジン誌上でかなり伝えられていたが、2009年度日本建築学会大会で「町並み保存から町並み観光への展開における住民組織の成長と役割-NPO小野川と佐原の町並みを考える会を事例として-」を発表したことで分かる。

それを掲載した梗概集は、書きたいことがあり過ぎたのであろう、2 ページとも画像なしで文章ぎっしりの異例誌面だった。内容を要約しておく。

論文の趣旨は、1991 年に発足した「NPO 小野川と佐原の町並みを考える会」の活動の経緯を整理し、考える会の町並み観光における役割と会員の意識を明らかにすることである。

考える会は「勉強会」や「町並み調査」や「町並み保存啓発」などの町並み保存活動を通じて、佐原の町の文化的資源の大切さや地域に対する責任を感じるようになった。「佐原市町並み案内ボランティアの会（2004 年に考える会と合併した）」が結成された。その会員は、観光客に佐原の町並み保存地区を案内するボランティアガイドとして活動を展開し、観光を快適に楽しむだけでなく佐原の歴史・文化を理解してもらうことも重要視している。そして、観光客の滞在プログラムの創出や観光客の回遊性の向上に大いに貢献している。

1944 年以降は多くの伝統的建造物が修理・修景されたが、佐原の保存地区にはまだ「空き家・店舗」が多く残っているエリアや町並み保存があまり進んでいないエリアも存在する。

保存と観光の対立を回避し、今後のまちづくりを展開するために、観光に関わる様々な主体による話し合いや観光マネジメントの必要性を認識した考える会は、各主体が意見交換する場を設けようと、2006 年から「よっしゃ佐原」という会合を開催している。（2009 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F -1 都市計画 pp.91 ~ 92）

#### 旅情ミステリーによる関係地の描写

菊村到『あやめ祭殺人景色』（光文社文庫、1987 年）

水郷として知られる茨城県潮来町のあやめ祭は六月一日から一カ月間、開催される。……潮来の名物は、あやめとそして娘船頭だ。昔の潮来は、ベニスのように細い水路が縦横に走っていて、ひとびとは家の前からサッパ舟と呼ばれる小舟に乗って出かけたものだ。買物にも野良仕事にもサッパ舟に乗っていた。その細い水路は江間えんまと呼ばれている。江間とサッパ舟によって、住民たちの生活とそしてコミュニケーションは支えられていたわけだ。この江間の一部は、いまでも残っている。この江間を娘船頭さんが、サッパ舟に観光客を乗せて、のぼりおりする。これを十二橋めぐりと称している。その江間に十二本の小さな橋がかかっている、その橋の下をサッパ舟はゆっくりくぐりぬけていく。娘船頭と言っても、農家の主婦のアルバイトである。手ぬぐいで顔をつつみ、そのうえにポッチ笠をかぶり、紺がすりの着物でさおをあやつる。（pp.5 ~ 7）

「千葉県の佐原市、ご存じでしょう」「行ったことはないけど、知ってます」「そこに水郷タイムズというローカル紙があるんです。知り合いを通じて、その記者を紹介してもらいましてね。その記者に事情を話したら、現地をいろいろ案内してくれそうなんです」「ほんと？ そうしていただくと、ありがたいな」「ただ、条件があるんです」（ン？）という感じになって、あやめはちょっと息をのんだ。「このついでに、佐原市で講談を一席、お願いしたいというんです」（pp.62 ~ 63）

佐原市の文化会館に向かった。佐原駅の北口にコミュニティ・センターと呼ばれる広場があって、そこには中央公民館、文化会館、図書館、体育館など、赤レンガ造りの重厚な建物がかたまっている。その文化会館の中の小ホールで、あやめは、「潮来の遊び」を演じた。（p.72）

十二橋めぐりと言えば、昔は、この加藤洲のほうだけだったのだが、いまでは、前川のほうでもやっている。加藤洲は千葉県の佐原市に属しているが、前川は茨城県の潮来町を流れている。前川は、常陸利根川と北浦を結ぶ形で流れているのである。あやめと牧場、小山と和泉の四人は、加藤洲水門の近くの舟着き場から、サッパ舟に乗った。（p.92）



74号

2008.5.10

佐原 窪田亜矢准教授着任にともない、前任の工学院大研究室の佐原プロジェクトと東大都市デザイン研究室のプロジェクトと共同活動となった。

74号 (2008.5.10)

プロジェクト始動  
2008年度の活動は 佐原



昨年8月、コンペ参加から小さく始まった佐原プロジェクト。今年は、窪田先生がデザ研に来られたことで工学院大学との共同プロジェクトとなり、空家の町家を使った実験店舗を行うこととなりました。(M2 鎌形敬人)

75号 (2008.5.10)

佐原 PJ、本格始動  
-コンペの塀の第一期工事も完了！-

5月12日、千葉県・佐原市に見学に行ってきました。今回は、まず佐原の町並みを知る事が目的で、街全体を歩き回りました。古い町並みと中心を流れる小野川のゆったりとした流れが続きます。午後からは香取市の抱える問題や近年の観光に関するお話を聞きました。実験店舗に使う(予定の)蔵を数軒見せていただきました。これからは実験店舗の決定を進めていくこととなります。

また、コンペで実施設計を勝ち取った塀の第一期工事も無事完了し、メンバーに初お披露目となりました。(M1 西川亮)



メンバー全員でまちあるき



塀に設けられたベンチにて記念撮影

81号 (2008.8.25)

トップ

佐原プロジェクト、勝負の夏！

「空き家は使われてこそ」の精神で実験店舗運営開始-

4月からスタートした佐原プロジェクトが準備期間を経て、ついに実践のステージに移行しました。工学院大学から引き継いだ古着屋を中心によりパワーアップした空き家活用の取り組みを紹介します。

「ぐるぎ+ (ぶらす)」、いよいよ開店



実験店舗「ぐるぎ+ (ぶらす)」の外観

8月8日、佐原プロジェクトチームが運営する実験店舗「ぐるぎ+ (ぶらす)」が開店しました！実験店舗の目的は、歴史的建造物の活用の可能性を探ること、佐原で遊ぶ・暮らす事の魅力を感じてもらえる場所を提供すること。古着屋を選んだ理由は、建物の活用と古いもののリサイクルをリンクさせ、古い物を大切にすることを伝えたいと考えたからです。ぐるぎ+という名前には、人や物が「ぐるぐる循環するように」という願いを込めました。

前日に佐原入りしたメンバーは、内装の組み立てや商品の仕分けとタグ付け、ポスター貼り、のれん作りなどなど、必死で準備。足りない部分はありながらも、なんとか開店にこぎつけました。どのくらいのお客さんに来てもらえるのか不安もありましたが、普段閉まっている店が開いていると目を引くようで、中をのぞいてくれる人や買って行ってってくれる人もいて一安心。とりあえずは成功のようです。

しかし、本番はこれから。まだまだ改善の余地のある内装や商品の見せ方などに手を入れながら、11月まで続けていきます。みなさんもぜひ、遊びにきてくださいね。(hiraoka)



「夢見るくら」クイズラリー開催

去る8月22、23日、佐原の小学生を集めてクイズラリーを行いました！ 歴史的建造物『中村屋倉庫』の活用案を求める絵画コンテストの前フリとして、「中村屋倉庫で遊ぼう」というものです。楽しみながら佐原や空き家問題について遊べるというスグレモノ。中にはphotoshop加工による修景前後イメージを比べた間違い探しという超教育的問題も……。

自分としては進行が遅れてしまったり答え合わせしようにも答えが分からなかったりと、たくさんの不備がありましたが、ナッタポンや地元の人々の協力、そして偶然に偶然が重なりなんとか終わることができました。多くの方から労いの言葉を頂きましたが、やはり何より嬉しかったのは子供たちの楽しそうな笑顔と『またやりたい』という感想カードでした。次は絵画コンテスト！（M2 西川亮）



「夢見るくら」の中村屋倉庫



大勢の子が集まりました



中村屋倉庫内の様子



窪田先生のお子さんの参戦

## 86号 (2008.11.10)

### 佐原PJ、古着屋ぐるぎ+、倉庫活用コンテスト無事終了

古着屋「ぐるぎ+」と倉庫活用案コンテスト「夢見るくら」を行ってきた佐原プロジェクト。11月2日に、ついにフィナーレを迎えました。

「ぐるぎ+」は閉店セールを実施。商品を全部100円で売り、店内は大盛況でした。そして、最後の作業は片付けです。のれんを外し、店内の棚や服が全部なくなると、とても寂しい気持ちになりました。メンバーは毎週末交代で佐原に行っていましたが、店番をしながら佐原のみなさんといろいろな話をすることができ、楽しく充実した3ヶ月間を過ごしました。佐原の皆さま、ありがとうございました。



混雑する店内

「夢見るくら」こと中村屋倉庫では、活用案コンテストの発表会を行いました。このコンテストは、地元の小学生に「夢見るくら」の楽しい使い方を絵に描いてもらい、発表してもらったもの。なかなか絵が集まらなかったり、発表会参加者が直前までわからなかったり。不安だらけで迎えた当日でしたが、9人の小学生達が観客のおとなたちを前に堂々と自分の考えを述べてくれて、たいへん盛り上がりました。8月から始まった企画の締めくくりにふさわしい、ステキな発表会でした。

97号 (2009.4.25)

トップ

新しい年度を迎え各PJ続々と始動

M1を伴いまず現地へ 佐原



2009年度の佐原PJは大熊、秋庭、鈴木の名が加わり、新チームで活動を始めました。4月24、25日に佐原を訪ね、まちづくりを行っている各団体の方のお話を聞いた後に、歩いて佐原という町を体感しました。2日目は激しい雨の中の町歩きでしたが、調査というよりは、観光しながら町の人と触れ合うことが目的であったので、ビショビショに濡れたものの、楽しくお話を聞いて有意義な時間でした。

と同時に、まちづくりの構造の複雑さも感じました。また、重伝建の他にも、香取神宮、観福寺といった佐原の魅力を感じることができ、大熊のものもらいが悪化するというハプニングはありましたが、M1の3人とも今後の活動を楽しみにしています。(suzuki)

101号 (2009.6.25)

佐原PJ観光客追跡調査

佐原PJメンバーは6月13、14日と佐原の町で観光客の追跡調査を行いました。それを今後計画しているお祭りでの実験や、その後の提案につなげていきたいと思います。(suzuki)

102号 (2009.7.10)

佐原「夕涼み」イベントに向けたMTG

7月1日～2日に佐原を訪れ、地元のおかみさん会と夕涼みという夏のイベントの打ち合わせを行いました。夕涼みでは回遊性の実験を行います。また、工学院大学から今年のミスあやめの小林由理さんがメンバーに加わり、新鮮な気持ちで夕涼みに臨みたいと思います。(M1大熊瑞樹)

103号 (2009.7.25)

プロジェクト報告 Project Reports

佐原 佐原の大祭に圧倒！ 夏の実験への意気込み増す



現在佐原PJは、8月13-15日に行われる夏祭りでの、「回遊性」の実験に向けて、佐原の大祭を観覧。佐原の名物である祭りの雰囲気には圧倒される一方、8月の祭りでは、学部3年生の3名が協力してくれることになり、若返った佐原チームで取り組んでいきます！ スタッフとしてでなく、観光客としてでよいので、皆さん是非お盆は佐原にいらしてください！(suzuki)

105号 (2009.8.25)

## 佐原PJプロデュース“灯りの小路”開催

text\_suzuki

“Akari-no-komichi” produced by Sawara team was held.

8月13～15日の3日間、佐原の夏祭り“夕涼み”が開催された。佐原PJチームが企画・運営を進めてきたイベント“灯りの小路”も住民・観光客の方に楽しんでいただき、無事終わることができた。“Yu-suzumi”, summer night festival of Sawara, was taken place on 13rd, 14th, and 15th August. Our team produced “Akari-no-komichi”, the main event of the festival. It attracted many visitors and residents, and will lead us to the next step.

今年の佐原PJのテーマは「回遊性」。伝統的建造物が並ぶ小野川沿い・香取街道沿いに集中する人々を、いかに面的に回遊させるかという課題に取り組んでいます。“灯りの小路”は、夏祭り恒例の小野川の灯籠流し・ライトアップに合わせて、普段人がなかなか通らない路地にあんどんを設置し、夜専用のマップを配布することで人の流れを生み出そうというものです。どうしたら人々は路地に入っていくのか。人々が路地を回遊することでどのような効果・課題があるのか。回遊性を考えていく上でのこういった疑問に対して、実験をしてみよう。その思いから“灯りの小路”を企画しました。“灯りの小路”はきれいな空間となり、いろいろな方々に楽しんでもらうことができました。と同時に、日常的に回遊性を生み出すためにやらなければいけないことや課題もたくさん見つかり、長い道のりのほんのわずかな一歩を踏み出したに過ぎないということも実感しました。しかし、イベントを通してまちの方々との出会い、話ができただことはこれからの活動に大きく役に立つ経験であり、小さいながらも大事な一歩を踏み出すことができたと感じています。



最終日はメンバー全員浴衣姿に。スタッフ自身も大いに楽しみました！

灯りにかざすときれいに見える夜専用のマップ。マップと実際の空間とのインタラクションを目指しました。見慣れないマップに、来場者のみなさん興味津々で大人気でした。



スライドショー



“灯りの小路”の核の一つとして、蔵を利用したカフェ、カフェへと誘導するガラスのオブジェをプロデュースしました。小路の中の立ち止まるスポットとして、人を路地に流すポイントとしてのデザインを心がけました。

佐原の回遊性を高めるための昼用お散歩マップ。限定された現在の観光ルートを面的に広げることが狙った。マニアックな情報が多い点は反省点だが、暑い中うちわとして大活躍。



“灯りの小路”の入り口として、「さわら百景：新しい佐原の魅力、みんなで作る佐原の魅力」をコンセプトに、観光客の送ってくれた写メールを上映しました。送ってくれた人たちが夜まで滞在してくれ、映し出された自分の写真に喜んでいました。

夜の佐原の魅力を知って欲しい！という思いのもと、普段人通りの少ない飲み屋街から繰り出される屋敷街へと、あんどんの灯りで人々を導きました。

## 佐原『全国町並みゼミ』プレ大会

8月23日、佐原中央公民館にて、1月に開催される『全国町並みゼミ』に向けての関東ブロックでのプレゼミを行いました。佐原、川越、台東区谷中、成田、栃木茨城県桜沢市真壁町、桐生の7つの団体によって、これまでの町並み保存の努力、観光に対する意識等の発表や議論が交わされました。特に、回遊性については、各地域、それぞれに意見が交わされ、私たちとしても今後の佐原の回遊性について深く考えさせられました。パネリストとして参加したD1ナッタポンは、佐原の『回遊性』について、これまでの私たちの現場での実験を例に、時代の流れと佐原のまちの空間の構成をわかりやすく解き、聴衆の心をつかんでいました。なにより、コーディネーターを務めた窪田先生の最後の言葉、『回遊性。それは人生を豊かに生きること。回らなくてもよいところを回遊すること、いろいろなものにぶつかること、こうして人生が豊かになる』...と胸に響きました。



コーディネーターの窪田先生とパネリストのナッタポン



回遊性について語る窪田先生

109号 (2009.10.25)

佐原PJ、香取市長を前に堂々の発表-清見屋デパート跡地の提案-

香取市佐原駅前再生の課題である「清見屋デパート跡地再開発」に対して、10月14日(水)に佐原PJチームが香取市長に開発案を提出。提案内容は市の現状と今までの計画を踏まえ、施設プログラム、施設設計、開発プログラム、事業インパクトなどの総合的な内容になっています。(D1 パンノイ・ナッタボン)



メンバー、市役所の皆に熱弁



提案 市民が集まれる施設中庭イメージ

110号 (2009.11.10)

トップ

プロジェクト活動の半年間

上半期の成果と今後の展望

佐原 「なんでも屋」で終わらせないぞ!

地域観光と町並み保存の可能性を探ろうと始まった当PJは、気づいたらこの半年で、「駅前再開発の提案」で市長に面会したり、地元の皆さんと「夕涼み」イベントを行ったり、観光と町並み保存の関係を科学的に解明しようとしたり、空き家問題の解決ビジョンを製作したりするなど、内容の濃いものになっています。このように「多岐に渡る問題」を扱っていることは、2009年度の佐原PJの最大の特徴です。

若干PJメンバーの疲れが見えてきたこの頃ですが、今年度の活動が単なる「なんでも屋」にならないために、今日もさわら—ずの皆は今年度のまとめに向けて必死に作業をしています。(D1 パンノイ・ナッタボン)



地元の皆さんで行った「夕涼みイベント」の実行メンバー

111号 (2009.11.25)

佐原PJチーム、スタッフとして参加 全国町並みゼミ

全国各地で、町並み保存に取り組む団体が一堂に会する第32回全国町並みゼミ佐原・成田大会が11月13日から15日にかけて千葉県香取市・成田市で開催され、佐原PJはスタッフとして参加し、各分科会の記録及び、閉会式にて分科会での議論の報告を行いました。

テーマが「民官学による歴史まちづくり」という分科会では、行政人でありながら6つものNPOに参加し、民と官の連携を深めている方や住民組織が成功事例を作り出すことで、行政の後押しを促そうとする団体等、多くの興味深い話を聞くことができました。(suzuki)



溢れる住民団体の熱気

113号 (2009.12.25)

プロジェクト報告 Project Reports

佐原 連携しよう、未来の佐原のために!

12月25日、香取市役所にて、空き町家活用提案を行いました。「私たち3つの課の助成制度を組み合わせれば」という市役所の方の発言や、「次世代のこどものために」という所有者の方の思いを聞いたことが、私たちにとって何よりのクリスマスの贈り物となりました。(sakuraba)



119号 (2010.3.24)

プロジェクト報告 Project Reports

走り続けた佐原PJの総括実施



3月19日(金)、香取市役所にて多くの市職員の方やお世話になった地域住民の方に今年度の活動報告会を行いました。今年度は、回遊性向上、町家活用、駅前再生、夏の灯りのイベントと、盛り沢山のテーマに、挑戦してきました。が、がむしゃらに取り組んできた感も否めません。4月からは、新たに加わるメンバーとともに、まちの歴史を空間に落とし、まちを読み解くことにトライしたいです。(sakuraba)

122号 (2010.5.10)

**プロジェクト報告**

プロジェクト、続々本格化!

佐原

前号に続き M1 を加え、新しいスタートを切ったプロジェクトの活動をお伝えします。



山車で賑わう佐原の町



ナッポタンお疲れ&皆頑張ろう会

### PJ始動！ 新メンバーと佐原の魅力との出会い

今年度の新メンバーを加えた佐原 PJ が始動し、2 回の現地訪問を行いました。初回はまち歩きや市や NPO の方々との話し合いなど有意義な時間を過ごした一方で、この PJ のメインテーマである回遊性向上がいかに難しいかを実感しました。

2 回目はまさかの M1 + 永瀬さんという新メンバーのみという不安の中での訪問でしたが、偶然にも佐原の大祭の名物、山車とお囃子に遭遇し、早速佐原の魅力に触れることができました。(人で溢れ返り調査どころではなくなりましたが...)

今後も観光と地域の生活を両立できる提案に向けて頑張りたいと思います。(M1 吉田健一郎)

### 補遺

窪田亜矢率いる佐原観光まちづくりと足助の労苦 東大広報誌『淡青』23号から

佐原は、工学院大窪田研究室時代のユニークな古着屋「ぐるぎ+」や倉庫蔵の「夢見るくら」など、実践が魅力的だった。包括的に、先取り精神の行動的で繊細な観光まちづくりが把握できる。

東京大学広報誌『淡青』23号(2010年1月)に、都市デザイン研究室・准教授窪田亜矢の佐原プロジェクトについての記事1ページ(p.21)が載っていた。2010年3月14日、東大工学部11号館で「アーバンデザイナー・北沢猛氏の軌跡」(北沢先生の業績を思う会実行委員会)が開催され、その際正門守衛室前のボックスから手にした『淡青』に、この窪田稿が掲載されていたのである。

#### 古き良き「まち」の可能性を広げる社会実験、佐原プロジェクト

都市デザインの力で、古き良き「まち」に新たな可能性を与える。そんな試みが千葉県・佐原でおこなわれている「佐原プロジェクト」だ。地元のひとびとと研究者・学生との活発なコミュニケーションの中で、少しずつ「まち」の将来像が浮かび上がっていく。

佐原(さわら)は、利根川支流の小野川と香取街道が交差する立地条件を活かし、周辺農村の中心として栄えたまちである。富は立派な蔵や町家となった。

しかし、物流や産業構造の変化により中心性は低下した。それでも地域を愛する市民組織と行政の連携により、町並みは重要伝統的建造物群保存地区として国に選定され、町家への修理補助が可能となった。本物の町並みの魅力はしばしばメディアでも取り上げられ、観光地ともなっている。

今、まちの課題の一つは「丁寧に修理されたにも拘わらず、空いている町家」を活用することである。



香取市や NPO 法人「小野川と佐原の町並みを考える会」の方々のご協力、そして何よりもご当主のご理解によって、「都市デザイン研究室」では空き家を借り受け、2008 年夏から秋、金曜と土曜に古着屋をオープンさせた。店員は企画者でもある有志学生さんら。服は着られてこそ、町家は使われてこそ、活かされる。

単に町家を店舗とするのは、マーケティングや市場の仕事だろう。それを東大都市デザイン研究室が社会実験として関わったのはなぜか。出来事を起こすための詳細な調査、多様な方々との協働、実験結果を真摯に受け止め次へ活かす考察が、私たちの技術と能力を磨いてくれるからである。そして、まちが向かっている将来像に合致した使い方を具現化し、様々な理由で空き家になっている状況に一石を投じ、灯がともった町並みを先取りして実感できることが地域への貢献にもなると考えている。



## 6. 浅草 「観音うら」イメージアップ作戦

### 回遊・小さなミュージアム育て

昭和二十三年一月初九。罹災後三年今日初めて東京の地を踏むなり。……仲店両側とも焼けず。伝法院無事。公園池の茶屋半焼。池の藤恙なし。露店の大半古着屋なり。木馬館旧の如し。其傍に小屋掛けにてエロス祭といふ看板を出し女の裸を見せる。木戸銭拾円。ロツク座はもとのオペラ館に似たるレビューと劇を見せるらしく木戸銭六拾円の札を出したり。公園の内外遊歩の人絡繹たるさま戦争前の如し。(永井荷風)「断腸亭日乗」『荷風全集』第24巻(岩波書店、1964年)p.234。



都市デザイン研究室ホームページ「浅草プロジェクト」のフロント 2008 年度

## 花街、遊郭、芝居、皮革、材木の文化

奥浅草ともいう浅草寺の「裏」まちを「うら」とひらがな書きして、言葉からイメージチェンジを図っている地域の東大プロジェクトである。国際通り、千束入谷振興会など住民団体と提携してのまちづくりである。観音うらは花街の文化、遊郭の文化、芝居の文化、皮革の文化、材木の文化の歴史で捉えられている。浅草まちづくりプロジェクトは、2007 年度から始まった。

活動目的は、観音うらの歴史、文化を掘り起こし、それらを活かしてまちの「賑わい」を取り戻し、「愛着」を育てることを、地元の振興会と大学との連携で促進することである。

都市デザイン研究室ホームページの「浅草プロジェクト」によると、「42 のアイデア」「3 つのプロジェクト」「5 つの戦略」のうち、2009 年度のプロジェクト活動の方針は次の通りである。

1. まちを歩いて資源を探す・とにかくまちあるき・東京なので普段の生活の延長のような感覚で取り組める。好きな切り口から分析できる・きちんと分析してキレイにまとめる。
2. 色々なまちの声を聞く・ヒアリングとアンケートを多数実施・だんだん地域の方々とも仲良くする・きちんと分析してキレイにまとめる。
3. まちづくりの指針をつくる・両エリアのポテンシャルを見定め、それらを活用した成長戦略を練る・住民の皆様と議論を重ね、まちづくりの理想を共有し、洗練させていく。例 国際通りまちづくり指針、光月町木材を用いた7つのアイデア。
4. アイデアは実際にアクションにうつす!! アクションプランを実施し、まちに大きなうねりを生み出す。きちんと事後検討や反省を行い、住民の方々とフィードバックする。・住民自らの手でこれからのまちづくりが行われていくよう方向付ける。例 国際通りやシャボン玉イベント、木材イベント“光月工房”企画中。

そして、2010 年度には、国際通り振興会が終了するが、光月工房イベント(当方のプロジェクトの中心的活動)を実施する。

「3 つのプロジェクト」は、「1. 滞在 中心部に人を泊める」、「2. 回遊 小さなミュージアムを育てる」、「3. 活気 ものつくりを支援する」である。「回遊」は八尾や佐原、喜多方プロジェクトなどでも打ち出しているが、観光まちづくりにとくに重要である。

「5 つの戦略」とは、「行きやすい、行きたくなる観音うら」「歩きまわって楽しい観音うら」「長居したくなる観音うら」「生業が活きている観音うら」「歴史を大切にする観音うら」である。

2008年度の東大プロジェクトの活動は、8月第1回まちあるき、10月観音うらに向けて42の提案を作成、9月第1回ワークショップ、12月第2回ワークショップ、2010年2月第3回ワークショップ、3月観音うらまちづくりプラン2008作成、4月第1回定例会となっている。

2009年度記事の最後に、「M1の皆様へ～浅草ってこんなプロジェクトです。・まちづくりの基本を忠実に、堅実に・取り組みやすい風通しのいいプロジェクト・他PJでは体験できない"都市向上場"とコマーシャルがある。

旅情ミステリーによる関係地の描写

高梨耕一郎『入谷・鬼子母神殺人情景』(光文社文庫、2005年)

仲見世は浅草寺の参道で、江戸情緒溢れる土産物屋が両側にひしめく観光スポットとなっている。平日にもかかわらず、観光バスで乗り付けた人々や、外国人観光客等で大変な賑わいだった。年間三千万人から四千万人の人々が参拝や観光に訪れるといわれている。仲見世を抜けると三門(桜門)に突き当たり、ここを抜けると境内となる。(pp.189~190)

現在古着店や雑貨店、飲食店などが軒を連ねているR O X 3という建物が国際通りに面してあるが、かつてここには、荷風が『葛飾情話』の作曲者であり、その楽屋には、荷風がご贔屓としていた桜むつ子がいて、その時の一座の名前は、「ヤパルモカル一座」(やっぱり儲かる一座)といった。(p.94)

当時浅草は、日本で一番の歓楽地域だったが、その中でも『今半』は、『今半御殿』と呼ばれた竜宮殿を模した建物を建て、黄金の鍋ですき焼きを出していたという。(p.191)

雷門周辺は、ほおずき市と週末の土曜日が重なったということもあるのだろう。風鈴がセットになったほおずきの鉢植えを下げた人々で、大変な賑わいだった。一馬は早速デジカメを取り出し、アングルを変えて納めていく。ほおずき市は、俗に四万六千日と呼ばれている。(p.232)

『都市デザイン研マガジン』 浅草

創刊号

2005.4.15

浅草 2004年8月開通の筑波新線で、浅草六区に浅草駅ができる。15店と少数ながら駅前通りの店主が振興に立ち上がった。

56号(2007.8.10)

待望の浅草プロジェクトついに始動

ついに、浅草プロジェクトがその重い腰を上げ動き出した。舞台は、国内外の観光客が集う浅草寺から言問通りを越えた北側に広がる『裏観音』と呼ばれる地域。

二、三十年前は、それはそれはにぎやかで、朝から三味の音が聞こえ、芸者さんが行き交い、人の流れが絶えない町だったという。



しかしアクセスの悪さと目玉となる資源の不足から次第に活気を失い、現在は地域の人々が利用するありふれた商店街となっている。バイタリティあふれる町会長さんと新東京タワーという好機をいかに活かせるか。第一歩として、8月中に観音裏イメージアップを予定している。(M1 鈴木淳也)

59号(2007.9.25)

浅草プロジェクト

地元会合でまち歩きの報告と提案を発表



浅草寺の浅草燈籠会の様子

9月20日、浅草観音うら地区で地元振興会の会合が行われ、中島助教が地元に行くアンケートとまちづくりビジョンの提案を、私がまちの印象を発表いたしました。

地元では外国人向けのマップを作成する、お年寄りの方からヒアリングを行う、100円バスを新東京タワー経由して走らせるよう要請したといった街の振興に向けての活動が行われて

いて、その報告が行われました。

地元の方のまちづくりに対する関心の高さが実感でき、我々メンバーとの相互理解も進んできました。今後は観音うら全体のビジョンを策定し、街を細かく調査した上で実現性のある提案を行っていきます。(M1 北村修一)

## 62号 (2007.11.10)

### 浅草プロジェクト 提案発表



意気込みを語る佐藤  
(空間計画研・M1)

新M1佐藤君も加わり10月31日、町内会長さん等浅草観音裏のまちづくりに強く関心のある方々に、形として初めての提案を行いました。八尾などでおなじみの提案カード形式で、時間不足・経験不足もありかなり拙いものになってしまいましたが、手をつけたことに対しまずまずの評価をして頂きました。

周囲のポテンシャル・新東京タワーという好機・まちづくりに関心のある方々など好条件はそろっているの住民の皆様への期待を裏切らないよう、精一杯努力したいと思っております。次は11月14日に、もう少し多い人数を相手に詰めた内容を発表する予定です。(M1 鈴木惇也)

## 64・65号 (2007.12.20)

### プロジェクトの一年 浅草

浅草プロジェクトは今年が初年度ということで、大変のびのびとした自由な雰囲気ではじめましたが、頼れるM2がないという事実は想像以上にプロジェクトを路頭にまよわせることになりました。



ゆるーりと調査をしていた空気の中島さんも焦り、10月11日に急加速して提案カードの作成と二回のワークショップを行う運びになったのです。提案としては詰められていない甘っちょろいものでしたが、とりあえず「観音うら」に目を向けます、という意思表示に対して満足して頂けたようです。

今後は、人気のあった提案カードについてさらなる意見を集め、詰めて真に観音うらの為になる活動をしていきたいと思えます。(M1 鈴木惇也)

## 68号 (2008.2.10)

### 浅草PJ、地元でWS『通りの名付け』を实践

2月5日に、浅草プロジェクトで3回目となるワークショップが行われました。前回までの2回

のワークショップで提案した内容から、実際に一つ実践して、まちづくりを体験してもらおうという企画です。今回は最初に行う内容としてちょうどいいということで、「通りの名付け」というテーマで実践してみました。

すると地元の方から「ここはこういう通りだ」といった、私たちが知らない名前が多数出てきました。さらに「ここはこういう名前にしたい」といった提案も多数頂きました。



地元で長年住んでいるだけあって、住民の方がとても積極的に参加してくださいました。その分まとめの我々は一苦労。本当はもっとじっくりと話を伺いたいところですが、時間が足りなくて、また今度となりました。後から区史などを見返してみると、住民の方がおっしゃっていたことがそのまま書かれている、なんてこともあり、まだまだ勉強不足だと反省しています。来年度はより具体的な内容に取り組んで、何か一つ実現できればなと思っています。(M1 北村修一)

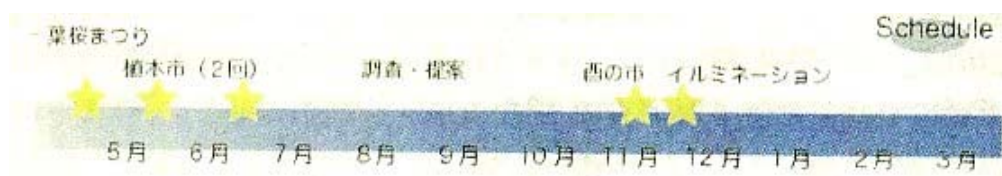
74号 (2008.5.10)

### プロジェクト始動 2008年度の活動は 浅草-東京都台東区-



浅草プロジェクトは昨年はじまったばかりのプロジェクトです。対象地は、浅草と言っても浅草寺から言問通りを渡って北側にある観音うらという地域。昨年度は簡単な調査を行い、提案カードをつくり、「観音うらまちづくり2008」を完成させました。

今年度は、「しっかりした調査」「アイデアを深める」ことを行っていきます。まずは5月末及び6月末に、観音うらにおける大きなイベントの一つである「植木市」があるので、アイデアブックのうち実現可能なものなどを練り上げ、アンケートと合わせて実施する予定です。(M2 鈴木惇也)



78号 (2008.7.10)

### 浅草P 観音うらまちあるきマップ完成

観音うらでは、6月28、29日にお富士様の植木市(二の富士)が開催されました。

今回は新メンバー2名(空間研M1)も参加し、一の富士(5月31日、6月1日)と続けて、まちづくりパネルの展示、アンケートを行いました。二の富士では、一の富士の反省を踏まえて、パネル、アンケートともに大幅な更新を行いました。新たに散歩地図(まちあるきマップ)をつ

くっていたこともあり、直前までバタバタと格闘し続けましたが、無事に発表にこぎつけることができました。



地元の方といっしょに親睦を深めながら、地元民にとっての観音うら、観光客から見た観音うらに関して生の声を伺うことができました。同時に励ましの言葉を、時に厳しい意見をいただきながら、継続していくことの大切さをしみじみと感じました。努力の結晶・散歩地図はたくさんの人に見ていただくことができたので、今度まちなかで見ている人がいたらなと思います。(空間研 M1 佐藤亮洋)

101号 (2009.6.25)

各プロジェクト、いよいよ本格化!  
The projects are proceeding actively!  
浅草 PJ アンケート調査

浅草 PJ メンバーは6月20日にアジサイ祭りに行って、来場者の方にアンケートをしました。アンケートの内容はアジサイ市や浅草界隈のまちづくりについて伺いました。(suzuki)

103号 (2009.7.25)

プロジェクト報告 Project Reports  
浅草 「シャボン玉」を使ったイベント開催を決定

7月22日、地元の一葉桜国際通り振興会の方々の会議に参加。その地にゆかりのある作曲家・中山晋平の代表作である「シャボン玉」にちなんで、シャボン玉を使って地域の一体感を出すためのイベントの開催を決定。「まずやってみる!」。このことを胸に活動中。(suzuki)

106号 (2009.9.10)

プロジェクト報告 Project Reports 浅草

8月31日に予定されていたイベント「晴れのちシャボン玉@こくさい通り」は、残念ながら台風のために中止となりました。しかし、まちづくりの第1歩として、住民にまちとしての一体感を感じてもらうことを狙いにしたこのイベント、次の機会に実現したいと思います。(suzuki)

110号 (2009.11.10)

トップ プロジェクト活動の半年間 上半期の成果と今後の展望

今年度もはや折り返し地点となり、プロジェクト活動は、中心的役割を担ってきた M2 の引退な

ど、ひとつの節目をむかえています、引退した M2 や、現メンバーに各 PJ の半年間の成果や今後の展望について語ってもらいました。

### 浅草 まちづくりのスタートライン

浅草 PJ では二つの町内振興会へそれぞれまちづくりの提言を行ってきました。国際通り振興会ではシャボン玉を地域のシンボルとしたイベントを企画し、8月31日に台風で順延した企画も今月末実施の予定が立ちました。千束入谷振興会では基本的な分析と指針を作り、ようやくまちづくりのスタートラインに立ったという現状です。中島先生 (@アメリカ) が「すばらしい！」となるような下半期になるよう PJ 一同身を粉にする所存でございます。(M1 熊谷俊一)



### 112号 (2009.12.16)

2009年、都市デザイン研究室日々変化、日々成長

Following the track of Urban Design Lab in 2009



シャボン玉イベント 台風で延期



シャボン玉イベント こども達に大人気

### 113号 (2009.12.25)

プロジェクト報告 Project Reports

#### 浅草 シャボン玉で子供たちと触れ合う

振興会を住民の方に知ってもらおうと、11月28日にシャボン玉イベントを行いました。たくさんのおこども達に来てもらい、まちおこし第一歩が踏み出せたと思います。もう一つの振興会では、材木を使ったイベントを現在企画しており、材木屋さんの見学、ヒアリングなどを行っています。(suzuki)

### 121号 (2010.4.25)

#### プロジェクト報告

春！プロジェクト始動！

浅草



真剣に作業に取り組む参加者の方々



浅草 PJ メンバーも日曜大工に挑戦

去る 4 月 17 日(日)、浅草プロジェクトの一環である木工教室イベントが、地元奥浅草地区にて開催されました。東大浅草 PJ メンバーにて企画されたイベントであり、対象エリアに密集する木材問屋の方々に、材木の調達や技術支援の面で協力していただき、材木加工による棚やプランターの作成を楽しむイベントとなりました。当日は地元の住民・子供たちが中心に集まり、東大からの 3 名の学生と共に、懐かしさと奥深さを感じる日曜大工体験を通じて、地域の交流を育むことが出来ました。

材木問屋というこの地域独特の存在を活かしたまちづくりを仕掛けている東大メンバーにとって、まちづくりの一步目を踏み出した非常に意義深い一日でした。(M2 熊谷俊一)

## 7. 高山 越中街道調査・半間ルール実験

### モックアップを展示、事業化めざす

地元から依頼を受けた東京大学都市デザイン研究室の大学院生が現地調査や新たな提案に取り組んでいる。まちづくりの提案の一つが、町並みに合うよう、格子になどで覆われている表札や街灯、飾り棚、牛乳・消火器入れなど、多機能に活用できる想定だ。間口の狭い建物が並ぶ街道沿いの特徴を生かし、各住宅ごとにほぼ等間隔で立てれば、統一感が生まれると考えた。

(『高山市民時報』2008 年 10 月 10 日)

### 登山基地だった

「高山市が、観光地として脚光を浴びるようになったのは、昭和 30 年(1955)頃からです。その頃は、鉄道を利用しての旅行がほとんどで、春・秋の高山祭と、夏山登山の観光客が中心で、観光地というより乗鞍岳・槍ヶ岳・穂高岳など中部山岳登山基地としての町だったのです」と、高山市ホームページは述べている。高山市観光課が毎年「飛騨高山観光大学」を開いていることも載っている。観光行政、観光産業、観光振興について研究の学生・研究者に参加を呼びかけている。



都市デザイン研究室ホームページ「高山プロジェクト」のフロント



高山は交通の要衝で、東西南北方向に江戸時代の重要歴史街道を擁している。東に朝日町、高根町を通る江戸街道、北に国府町、上宝町を通る越中東・西街道、西に清見町、荘川町を通る郡上(白川)街道、南に一之宮町、久々野町を通る尾張(益田)街道である。ほかに丹生川町、上宝町を通る平湯街道もある。東大高山プロジェクトは、都市デザイン研究室がそのうちの越中街道の景観調査を委託されたことからスタートした。

まちには飛騨高山シルバー観光ガイド(愛称おもてなし案内人)が、見所をガイドする一方、飛騨高山教育旅行誘致推進協議会が、教育・体験学習の誘致をしている。また上記のように、毎年、高山市主催の「飛騨高山観光大学」が、観光振興・地域振興の第一線で活躍している人々を講師に招き、観光行政・観光産業の関係者や観光振興などについて研究している学生対象に開催され、観光を通じた地域活性化について意見交換を行っている。押しも押されもしない観光まちづくり都市である。

そうした高山において東大プロジェクトは、越中街道の住まれ方を調査したほか、飛騨の匠の地を意識してか、大新町の壁面線の不ぞろいを統一感のあるようにするためのアイテムを、ムックアップで多数自作して提案した。このユニークな活動は、東大プロジェクトが開発して、「半間ルール」と名づけたものである。

研究室ホームページの「高山プロジェクト」には、「高山プロジェクトとは?」として、「表層だけではない、歴史文化を感じることができる、豊かな文化を有する高山で、歴史文化の礎を築くことができる。調査、分析からまとめまで、これからの都市保全のストーリーを考え抜ける」とある。

2007年度の活動は、11月第1回越中街道街並み調査、1月第2回越中街道街並み調査と第1回調査結果発表会、3月第2回調査結果発表会。2008年度は、4月第3回越中街道街並み調査と第2回調査結果報告会、6月第4回越中街道街並み調査と第3回調査結果報告会(越中街道街並み保存会総会)、越中街道街並み模型披露、8月第5回越中街道街並み調査、「半間ルールモップアップ」実験、10月第6回越中街道街並み調査、「まちなみぎゃらりー」開催、12月第7、12月第7回越中街道街並み調査、周辺農山村地域調査、3月調査結果最終報告会、様々な越中街道調査・間口、セットバック調査・軒高調査・沿道使われ方調査・建物類調査・側壁調査・祭り調査など。様々な提案 壁線回復提案、植栽提案、住まい方提案と多彩である。

### 『高山市民時報』の報道

2008年10月10日付『高山市民時報』に、東大プロジェクトの活動が「伝建の統一感に若者アイデア 東大都市デザイン研が提案」の見出しで、大きく掲載された。紹介しておきたい。

大新町二・三を南北に貫く「越中街道」。その景観保全を研究している東大都市デザイン研が、これまでの成果と提言をまとめた資料を、宮地家(市文化財・大新町二)で展示している。若き工

リートが見た町並みの姿は……。

この辺りは平成十六年、下二之町などとともに国が伝統的建造物群保存地区に選定。昨年度から市の委託を受けた同研が調査研究している。その結果、伝統的町屋が点在していて、緑が多いことなどを評価している一方、新しい家は軒が高く、道路から離れて建っているため、古い町屋とそろわず、町並みにでこぼこが生じているなどと評価。

そうした現状を示すパネルや模型を展示する一方、町並みに統一感をもたらす方法として「半間ルール」と名づけた考えを提案し、それに用いるアイテムを紹介している。各戸で敷地北側の半間（約 90 釐）に統一したアイテムを置いてもらい、景観作りに役立てようという考え。アイテムは高さ一・五釐。様々なデザインの模型を並べているが、中には格子を用いて、古い民家が連続するようなイメージをかもし出すものも。「祭り」の時に道沿いに並ぶ提灯の美しさがヒントの一つになった」と同研。

### 町並み再生へ「万能箱」の考案 表札・街灯・消火器...入れて統一感

#### 富山・越中街道 東大研究室が調査

昔からの町家が減った高山市大新町 2~3 丁目の旧越中街道沿い。新旧の住宅が入り交じる延長 300 釐の町並みに、どう風情を醸し出すか。地元から依頼を受けた東京大学都市デザイン研究室の大学院生が現地調査や新たな提案に取り組んでいる。街道は江戸時代、富山から飛騨へ魚を運ぶ幹線の役目を担った。「ぶり街道」の異名をもつ。

まちづくりの提案の一つが、町並みに合うよう、格子などで覆われている表札や街灯、飾り棚、牛乳・消火器入れなど、多機能に活用できる想定だ。間口の狭い建物が並ぶ街道沿いの特徴を生かし、各住宅ごとにほぼ等間隔で立てれば、統一感が生まれると考えた。まだ住民への提案段階で、機能や意匠が異なる 38 種類のモデルを作った。

ところで、2009 年度の活動は「越中街道から歴史文化基本構想へ」であり、市街調査、歴史文化構想モデル事業などで、文化財をまとめるテーマ、ストーリーづくり、市街地周辺山村集落の景観調査、越中街道の半間ルールの事業化かなどである。こうした半間ルールが観光客誘致を引き起こす可能性があり、観光まちづくりのうえからも関心が持たれる。

私は、高山まちづくりプロジェクトの「半間ルール」のモックアップに関心があった。工学部研究生のあと、農学部研究生を経て農学生命科学研究科研究員のときの研究テーマが「エクステリアウッド (EXW)」であり、半間ルールのモックアップもエクステリアウッドだったからである。

2009 年度日本建築学会大会で、都市デザイン研究室の修士課程 2 年の藤井高広が、「都市部における工事現場の仮囲いの変遷と影響に関する研究」を発表した。この「仮囲い」は、板、プラスチック、金属などのエクステリアで、そのうちの板塀はエクステリアウッドであるため、梗概集のコピーを本人から送ってもらったことがある。現代の考察が主だった。江戸時代の建設風景を描いたひとつの絵巻物の板塀に触れているが、それ以上の時代遡及はない。

その建築学会大会で同じ2年の竹本千里が、高山まちづくりプロジェクトの実践から、「町家形式の建築物の前面利用に関する研究 高山市大新町越中街道地区における新旧共存型歴史的市街地の街並み形成に関する形成4」を行っている。建築物の全面すなわちファサードは、板壁、板扉などがエクステリアウッドである。

私の研究員論文は、「エクステリアウッド (EXW) における歴史性と現代の接点」のテーマで、エクステリアウッドの越し方を古代まで遡り、絵巻物を中心に論じたものである。エクステリアウッドについて、既往研究では、明治期までのデータしかみられないのを古代からの絵巻物に着目して、江戸以前の空白を埋める試みである。その結果について、2010年1月、東大農学部で3、4年生を対象に、「住環境学 絵巻物を中心にしたエクステリアウッド (EXW) の考察」と題して講義する機会を与えられた。

エクステリアウッドについては、2006年10月に本郷の農学部から駒場の教養学部に出向いて、1、2年生を対象に「アメニティ木材文化論を試みる」というテーマで講義をすることがきたのが初めて、その後研究が歴史性の方向に進んで、本郷では上記題目で問うたのである。エクステリアウッド関係の論文としては、次の発表をした。

「アメニティ向上のためのステーションファニチャー 木ベンチの実践的研究」

『2006年度日本建築学会大会学術講演梗概集 材料施工』pp.999~1000、1490)

「東京ミッドタウンから木造都市へ 新木造建築に伴うイメージ」『2007年度同 都市計画』pp.417~418、7180

「私鉄駅木ベンチ考現学 ステーションファニチャー」『木材工業』(Vol.61 No.8,2008)

「『一遍上人絵伝』から読み解くエクステリアウッド」同 (Vol.67 No.9,2010)

著書では、『東大アメニティ木材学とウッドヒューマンリレーションズ』(アメニティライフ、2008年)で論じた。

#### 旅情ミステリーによる関係地の描写

西村京太郎『飛騨高山に消えた女』(祥伝社、1990年)

十月十六日。飛騨高山の秋祭りは終わったが、秋の観光シーズンは、続いていた。古い家並みで有名な、高山市上三之町の通りにも、団体やら、個人の観光客が、歩き廻っている。若い女性が多いのは、古都への憧れだろうか。……上三之町は、市内に流れる宮川と平行に走る通りで、民芸品店や、喫茶店、陶器店、山菜料理店などが、昔のままの家の構えで、並んでいるので有名である。その殆どが、天保三年頃に建てたものだといわれている。(p.7)

津村秀介『飛騨の陥穽 高山発 11時19分の死者』(講談社文庫、1998年)

城下町と言えば、武家屋敷が幅を利かせているのが普通だが、高山は違う。戦国時代の造成なのに、戦火などまったく無視したかのような、美しい、静謐な町並がつづいているのである。それは、その後の高山の「平穏」と「文化」を象徴しているとも言えようか。京都を模した町筋は、宮川を京の鴨川に見立て、東西南北に走る碁盤割りの道路によって構成されている。また、土地の人たちが「空町」と呼ぶ東山界限には、京都の東山に倣って、多くの寺院が集められた。(p.9)

「飛騨に同じような二つの城下町があったなんて、知らなかったア」美保は浦上の説明をかみ締めるようにして、浦上と並んで、人込みの中を歩き始める。岐阜県吉城郡古川町。そこに金森長近が造営し、養子可重に一万石で分地した城下町が残っている。高山同様、後に天領となった城下町を二分して流れるのが、宮川だ。「高山」と同じ流れが、「古川」を流れているのである。飛騨高地川上岳に源を発し、宮、高山、古川の盆地を経て、神通川に至る流れ。「この高山の川が、古川へ下って行くんだね」(p.268)

## 古川プロジェクト（2001年度のみ）

古川は、西村幸夫がまちづくりを始めた記念すべき地である。西村のまちづくり活動は、古川から始まった、ということは都市デザイン研究室のまちづくりプロジェクト方式は、西村が都市デザイン研究室を主宰するのを待ち、この古川を回顧しながら立ち上げたことでもあろう。研究室ホームページの「プロジェクト」を開くと、2001年度のみ「古川プロジェクト」が載っていることを知る。

その年は、大野村、神楽坂、鞆の浦の三老舗プロジェクトがスタートした翌年で、小田原市板橋も出ているが、内容は現れない。古川プロジェクトは、次のような内容で、1年間だったようである。

2001年度岐阜県古川町での活動報告 文責：修士課程2年 後藤倫太郎

### 1 古川町の現況

古川町は、岐阜県北部飛騨地方に位置する人口15000人程度のまちである。全国的に有名な飛騨高山とともに「双子の城下町」と呼ばれ、現在も景観ガイドラインによって中心部の歴史的空間と新しい建物の統一感が維持されている。4月からの朝のテレビ小説「さくら」の舞台となっており、今後まちなみ観光客のさらなる増加が期待される。



古川町の風景

### 2 活動メンバー

東京大学都市デザイン研究室 + (北沢助教授・遠藤助手・後藤) 都市建築研究所

### 3 活動の概要

2001年度の古川町まちづくり総合支援事業計画立案に携わった。主に・中心市街地の今後の整備方向性を定めること、・必要とされている公共施設の計画案を示すこと、が求められた。・については、駅周辺地区と歴史市街地の間に回遊性を持たせるための有効な機能配置を検討した。・については、施設の最適な建設地・機能・諸室などを検討し、周辺既存施設との連携利用についても考えることで、ただのハコもの計画にはない都市的視点を注入することを意識した。

### 4 活動記録

5月 活動開始。周辺市町村を含めた広域から古川町の位置付けについて調査。交通網（鉄道、高速道路）・公共施設分布を担当した。まだ見ぬまちを想像して。

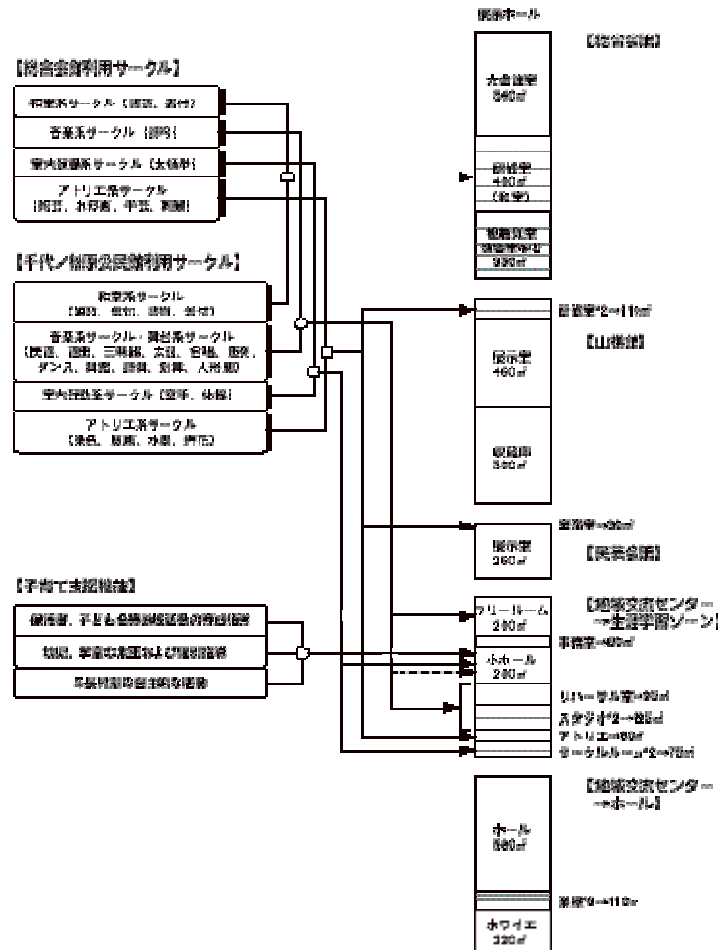
7月 作業部会・まちづくり検討委員会開催

9月 まちづくり検討委員会視察（金沢市民芸術村）

10月 作業部会・まちづくり検討委員会開催 要望されたホール+生涯学習センター+町民サロン機能+複合公共施設の配置案作成。作成案それぞれに対応した模型をつくる。格闘の日々。

## 建設地決定

- 11月 作業部会開催 報告書に載せる施設計画案、既存施設との一体的機能再配分案などを作成
- 12月 まちづくり検討委員会開催
- 1月 報告書「飛騨古川中心市街地再生計画」完成



町民サークル再配分フロー



駅前地区の整備イメージ（模型）

## 5 所感

実地の仕事を体験することができ、しかも任された部分が重要なところだったので、自分にとっては大変勉強になった。しかし一方で、町の計画自体の位置付けが曖昧だったため、目的が定まらずに作業が進んでいったのが悔やまれる。補助金と地方自治体の関係のあり方も考えさせられた。

## 6 今年度の予定

まち総計画の実現は、市町村合併等の問題のなかでひとまずお蔵入りとなったが、今回のプロジェクトを題材として、地方都市の公共施設立地プロセスについて論文を執筆した。



古川町の広域的位置付け

## 西村のまちづくり原点古川の「雲」

古川プロジェクトの新鮮な格闘現地の古川町は、いまは平成の大合併で飛騨市古川になっている。高山本線で3駅隣の市である。高山と古川が双子の城下町であることは、津村秀介『飛騨の陥穽 高山発 11時19分の死者』の説明で知ったいきさつがあり、上記のように引用したのである。西村と古川は「都市保全計画」を学ぶうえでもキーポイントである。拙著『西村幸夫「都市保全計画」』に詳しく記述(p.96)した。長めであるが、まちづくりプロジェクトの源流を理解するうえで参考になると思われるため、全文紹介したい。

### 古川の「雲」

「町として古川がふるく、高山はあとでできた」

司馬遼太郎の『街道をゆく』のひとつで、古川の古格は天下に知られた。一方、古川大工の誇りである「雲」を発見して、全国に知らしめたのが東大教授西村幸夫である。1986年、助手時代の西村は、財団法人日本ナショナルトラストの古川町並み調査団員として古川に入る。そして見つけた雲は、大工が自分の名前ではなく文様で残したオリジナルだった。

当時、建物の下に「雲」と呼ばれる文様を彫り込んだ部材が装飾的につけられていたことは、皆に知られてはいたがそれ以上のものではなかった。それを西村は意識に上げた。

「個々の町家は古川大工の作品であり、雲は作品につけられた署名なのである」

これは西村がその著『町並みづくり物語』(古今書院、1997年)に記した解説である。そして雲は、古川大工の藤白徳太郎が1954年ごろ小腕に彫り込んだのが、町内の大工に広がったものであることも明らかにされた。調査時点で169種類、355件が確認され、すべての雲をリストアップした『古河「雲」マップ』もつくられた。

2004年の東大西村講義「都市保全計画」のフィナーレは、突然の台湾映画になった。国営放送の『古川町物語』上映だった。雲が次々と紹介されたほかに、いまひとつ西村が意識に上げた「相場くずし」も解説された。周囲と不調和なものが、「相場くずし」と呼ばれ、それを避ける伝統が、良い飛騨風の木造建築を生んだ不文律ということを鮮明にした。

こうした古川については西村の著述以外に、たとえば第三者のみかなぎりか著『飛騨古川ものがたり』(文藝春秋、2002年)がよく伝えている。司馬遼の『坂上の雲』と坂は違うものの、都市計画という坂上の雲をめざして歴史的環境に打ち込んだ西村の軸がここにある。

## 『都市デザイン研マガジン』 高山

62号 2007.11.10	高山プロジェクトは創刊号に登場せず、62号で「高山越中街道プロジェクト始動」という見出しで、静かに登場した。古い町並みの飛騨高山は、有名過ぎる既存観光地であり、そこへどのようなアプローチで切り込むか、東大パワーの切り込みは懸命だった。
-------------------	---

### 62号(2007.11.10)

#### 高山越中街道プロジェクト始動

10月なかば、高山越中街道プロジェクトが静かに始動しました。メンバーは西村先生、野原助教、D岡村、M1大道の4名。早速11月4-6日の日程で現地へ行ってまいりました。



高山といえば豪華絢爛な屋台を曳き回す高山祭や三町の古い街並み(重伝建)が有名です。その三町から北へ500mほど行った大新町というところが今回のプロジェクトの対象地。ここも2004年度に重伝建に選定されています。

これからこの町でどんなことをしていくのか、それを胸中に描きながら調査は進みます。ユニークな蔵や熱い思いを持った地元との交流もあり、充実した第1回訪高となりました。折しも飛騨地方は紅葉真っ盛り。美しい街並みに紅葉、それに美味しい食事と高山を存分に味わった一同でありました。(M1大道亮)

### 64・65号(2007.12.20)

#### プロジェクトの一年 高山

2007年10月下旬、様々なプロジェクトが一段落しようとしている頃、高山プロジェクトは産声をあげました。11月に早速訪高。提案対象敷地の越中街道のみならず、美しい街並みとして名高い三町や吉島家住宅、飛騨牛、飛騨の酒などなど、飛騨高山を”調査”しつくしました。東京に帰ってきてからは、年明けの訪高に向けてミーティングを重ねています。

「街並みの美しさとは何か」「なぜ壁面線を揃えなくてはならないのか」といった、超少人数プロジェクトだからこそ問える根本的な命題をも議論しつつ、2007年を終えようとしています。(M1大道亮)



70号 (2008.3.10)

### 高山プロジェクト最終報告



〔景観シミュレーション〕現在の町並みと修景後の町並み

年度末の嵐が研究室に吹き荒れていた3月2、3日、高山越中街道プロジェクトも最終報告をすべく、報告書を携えて高山へ行ってまいりました。

その報告書、実は高山についてやっと完成するというギリギリぶり。(手書きの補完がある報告書も味なものです。) どうなることやらと不安を抱えて臨んだ報告会でしたが、街並み保存会、高山市教育委員会、都市デザイン研究室の3者で活発な意見交換がなされ、一安心。特に同じカットで7枚作製した街並みのシミュレーションや、数軒ごとに街並みを再生していこうという提案で盛り上がりました。

2007年度最後の訪高となりましたが、越中街道の街並み再生はむしろこれからがスタートです。まだまだ一步を踏み出したばかり。今後も歩を進めていきたいと思えます。なお、今回の最終報告会は高山で行われる西村先生の講演会と連動したものでした。講演会には多くの方が来場され、世界遺産を目指す高山の気運の高まりが伺えました。(M1 大道亮)

73号 (2008.4.25)

4月14～15日の日程で春の高山祭、山王祭に行ってきました。今回は高山PJメンバーに加え、M1、M2数名も観光で高山を訪れ、行動を共にしました。(M1 大道亮)

74号 (2008.5.10)

### プロジェクト始動

2008年度の活動は 高山

新旧入り交じった街並みとなっている高山・越中街道沿道を舞台に、町並み再生のための提案を行ってきます。昨年11月に始まったばかりでまだまだ若いプロジェクト。今年度からようやく本格始動です。

2008年度は、昨年度示した方針を具体的なカタチに落とししていく予定です。模型やCD、モックアップなどをツールとして、私たちの提案が町並みにどのような影響を与えるのかを検証していきます。「温故知新」を地でいくような活動を展開していくつもりです。(M1 大道亮)



82号 (2008.9.10)

### 半間ルールモックアップ作製 高山PJ現地調査

8月27日から31日の日程で、高山の調査に行ってきました。今回は昨年度から温めてきた半間



ルールの企画を、現地でモックアップ作製し、実際にまちなかに置いてみるという実験を行いました。半間ルールとは、家の建て替えが進むのを待つ間、街並み改善に寄与することを目的とし各戸の道路境界の北側半間を共通のルールをもって揃えていくという考えです。

しかし、高山に5日間滞在中3日間が雨という生憎の天気の中、作業が思うように進まず屋内の作業場を貸していただき、なんとか完成したという感じです。素材は経費の関係から段ボール、大・中・小の3つを1/1の大きさでつくり、セットバックしている建物の前に設置し、街並みにどんな影響をあたえるか、大きさは適切なかの2点を検証しました。今後は検証結果をふまえ、機能・デザイン・使いやすさを改善し実現に向けて頑張っていきたいと思います。(M1 土信田浩之)



黙々と作業する M2 大道と M1 藤井



モックアップへの謹評の様子



半間ルール現地実験の様子

## 85号 (2008.10.25)

高山PJ、まちぎやら、大盛況！！ 八幡祭りと合わせて開催

去年の11月から続けてきた高山PJの調査内容や提案を、地元の方に知ってもらうため、「まちなみぎやラリー」略して「まちぎやら」という展示会を催しました。会場は、重要文化財である宮地家で、八幡祭の日に合わせておこないました。

多くの地元の方が見に来てくださり、特に街並みの模型が好評でした。観光客の方も、「越中街

道を見に来たついでに」とたくさんの人にお越しいただき、ラジオの生放送への参加(M2 大道)という嬉しいハプニングもありました。(M1 竹本千里)



上左 朝日新聞(200年10月20日/右まちぎやら展示会場  
下 屋台の引き回し 獅子踊り 行列と提灯 半間ルールの展示

88・89号(2008.12.25)

URBAN DESIGN LAB.2008

都市デザイン研究室の200年を振り返る 高山



今年の高山PJは、伝建地区である越中街道の「伝統とは何か」「まちとはどうあるべきか」といった根本的な命題に真っ向から挑戦した。伝建制度という確立された制度の中で、まちの在り方を議論することは想像以上に難しく、度重なる議論や調査をしても、答えの見えない状況に幾度も戸惑いを覚えました。そんな中、「実行することが大切」という当PJの精神から、半間ルールの

提案・モックアップ実験や「まちなみぎやらりー」と称したパネル展を成し遂げ、自分たちなりの答えを少しずつ整理してきました。まだ議論の余地はあるけれど、試行錯誤を繰り返して、真に住み良い越中街道の実現に向けて活動していきたいと思えます。年明け2月には越中街道の修景計画を作成する予定です。(M2 鈴木惇也)

90号(2009.1.10)

高山PJ 新たな展開、周辺農村調査へ

12月19~22日、2008年最後となる現地調査に行ってきました。今回は、城下町である中心市街地から飛び出し、周辺農村集落調査を実施しました。

一色・惣則集落、北方・法力集落、見座・小瀬・立岩集落の3集落を見たのですが、どの集落も農村の美しい原風景が残っており、高山の新たな魅力を垣間見ることができた気がします。(fujii)



誰よりも楽しんでいた野原助教



空を仰ぐ M1 竹本



影で遊ぶ高山PJメンバー



懸命な調査をする M1 土信田

94号 (2009.3.10)

### 2008年度の集大成！ プロジェクト活動報告 高山プロジェクト 2008年度を振り返る



2007年11月に始まった高山プロジェクトですが、2ヶ月に一度のペースで高山に訪問し、これまで計7回の現地調査と3回の報告会を行ってきました。そして3月2日に最終報告として、1年半の成果を越中街道の方々に発表してきました。

去年の4月にメンバーを大幅に増やした当プロジェクトは、提案の事業化を最終目標に掲げ、この一年間調査を行ってきました。中でも印象に残る調査は「沿道使われ方調査」と題し、沿道の一室がどのように使われているかを、実際にお宅にお邪魔させて頂き、お話を伺い、平面図をとらせていただいたことです。突然の訪問にも関わらず、快く家の中に上げてくださり、結果として約半数のお宅の平面図をとることができました。

10月には調査結果の地元還元を目的として「まちぎゃら」と題して、1年間の調査結果と提案を、パネルや模型の展示を行いました。期間中にはたくさんの方に足を運んで頂き、越中街道の課題と可能性について、多くの方に知って頂くキッカケをつくることができました。

そうして、1年半の活動が終わろうとしている高山プロジェクトですが、今年度からは規模を高山市全域に拡大し、歴史文化基本構想に着手しています。また、越中街道地区では、我々の提案の一つである「半間提案」が実現を目指し、動きを始めています。現段階では地元大工さんによる実物の作成ですが、6月を目処に完成する予定です。実現までの道のりはまだ遠いのですが、我々の提案が、街がかわる契機になったら幸いです。(M1 土信田浩之)

112号 (2009.12.16)

### 2009年、都市デザイン研究室日々変化、日々成長 Following the track of Urban Design Lab in 2009 高山



高山の春



半間一号完成



集落調査実施



八幡祭り調査

## 8. 足助 まちづくり報告展・サイン計画

### 塩の道調査と町と川を近づける方策

足助は、かつて自らを中心とする地域圏を形成し、今なお価値が高い歴史的な町並みを生み出した。また先人のまちづくりによって、観光地や町並み保存運動としても著名になった。現在も賑わいを呼び込む努力が続いている。(窪田亜矢)

『2009年度日本建築学会大会学術講演梗概集 都市計画』p.213、7080

### 絵本のようなホームページ



都市デザイン研究室ホームページ「足助プロジェクト」のフロント

都市デザイン研究室の足助プロジェクトのホームページは、童謡絵本のようなやさしさの画像で現れる。字も小さくて全体にメルヘンチックだが、内容は本格的、ただし繊細なセンスの文章である。むかし香嵐溪を訪れたことがある。足助は「あすけ」と読むことを知ったところだった。しかし、東大プロジェクトが進出するほどの足助とは想像もしなかった。ただ、第一回全国町並みゼミが足助で開かれたことで、有名になっていたことは知っていた。足助町は東加茂郡だったが、いまは豊

田市足助町である。

## 自然と歴史が寄り添うまち 足助

足助 足助ってどんなまち？ 愛知県豊田市足助町

足助の位置 東京 1時間40分名古屋 名鉄本線約30分 名鉄バス約1時間

歴史 江戸 塩の道(中馬街道)の宿場町として栄える 歴史的町並み

香積寺の和尚が飯盛山に楓を植樹 後の香嵐溪

明治・大正 人々の往来が活発化し町は繁栄のピークを迎える

昭和 人口減少、商店街の衰退化、第一回全国町並みぜみの開催

現在 様々なまちづくりイベントの開催、伝建地区選定への動きや景観協定

魅力 歴史的町並み 様々な時代の建物が残る 平入りと妻入りが混じり変化に富む  
街道と街道に交差する狭い路地

自然 紅葉の名所「香嵐溪」街道に沿って流れる足助川

まちのイベント 2月中馬のおひなさん 4月足助春祭り 6、8月たんころりん

9月足助町並み芸術さんぽ 10月足助祭り 11月香嵐もみじ祭り

足助 project について

経緯 豊田市整備課からの委託。2008年度始動(5年間)

目的 短期的にはまちづくり交付金の使い道提案、長期的にはまちづくり構想の提案

Projectの2年間を振り返る 2008年度の活動 コンセプト 「まちなか」と「自然」から足助を知る

まちなか 1.町並みのまとめがわかりにくい 2.町と川の距離が遠くなっている 3.景観が混乱している 4.町並みが観光の主役でない

まちづくり方針 都市構造を明確にする 町と川を近づける 足助らしい本物の景観を継承創造 町並み観光のあり方を確立する

観光 観光社会実験

2009年度の活動 コンセプト「住環境・生活」から足助を考える

調査内容 生活の場としての塩の道 塩の道沿いの変遷

紙屋鈴木邸活用提案

豊田市のホームページには、足助について、「足助町の魅力は、なんといってもその町並みにあります。かつては伊那街道、飯田街道と呼ばれた街道の宿場町として栄えた町の面影が今も残されています。「妻入り型」や「平入り型」という古くからの家並みや、蔵が連なる小路が美しいマンリン小路などがあり、散策するだけで懐かしく優しい気持ちにさせてくれます」とあった。

つづいて、「100年ほど前の蔵を改装したカフェ&ギャラリー『マンリン蔵の中ギャラリー』や、江戸末期より続く鍛冶屋の老舗でライブカフェも併設している足助のかじやといった、個性あふれるお店も。町全体が一体となったイベントもたくさん開催されていて、町並みと一緒に楽しめるように工夫されています」とPRされていた。

足助は、祭り見学から入って空き家、商店街などの調査、パンフレットの配布などこまめに活動した様子が『都市デザイン研マガジン』で報じられたが、記事は経緯が多く、内容の記述が薄かった。『中日新聞』に載ったことは、マガジン編集部にとっても励みになったに違いない。

## 建築学会で連続足助発表

また、日本建築学会大会における足助関係の研究発表者リスト 3 本(窪田亜矢、六田康裕、西川亮)が、『都市デザイン研マガジン』106 号にまとめられていたのはよかった。そのほかに、ナツタボンが別のセクションで発表していて、2009 年度『日本建築学会学術講演梗概集 都市計画』で 4 人分を読むことができた。同じセクション「観光と地域」で、都市デザイン研究室の窪田亜矢と修士課程の院生計 3 人による連続発表というアクションは評価したい。なぜまちづくりプロジェクトから、実践的論文が生まれえないのかという疑問が、この連続論文のタイトルを知らせる記事で希望に変わった。

行われるところでは、行われていたのである。それも学会において、教官と学生が連続して同じまちづくりプロジェクトの社会実験をテーマに発表するという手法は、みごとなコラボアクションである。次は梗概集の抜粋である。

・[まちづくりの経緯をふまえた町並み/景観/観光の今後 足助における「まちなか観光」1]

窪田亜矢 (梗概集 都市計画 pp.213~214、7080)

景観方法に基づく景観計画では、足助を「景観重点地区」として位置づけ、歴史的町並みと山並みの景観保全を図っている。「観光交流基本計画(おいでんプラン)」(2007)でも足助地区を重点プロジェクトに位置づけ、香嵐渓と町並みの保全、まちなか観光推進のための快適な環境づくりを掲げている。第七次豊田市総合計画(2008)は、足助地区を観光振興などの中枢である「複合地域核」としている。

町並み保存から展開した景観まちづくりの結果は、どう評価できるだろうか。まちなかへの観光客がイベント時に極めて限定されていることをふまえると、必ずしも外部からは高く評価されているとはいえないのではないだろうか。歴史的建造物に調和する新たな建築物とは何か、これまでの歴史をふまえたうえで時間が積層する町並みのあり方が改めて問われている。その問いかけは観光が際立たせてくれるだろう。

[社会実験による町並みへの観光客誘導可能性の検証 足助における「まちなか観光」2]六田康裕(同 pp.215~216、70801)

本研究は、2008 年 11 月に東大大学院都市デザイン研究室が主体となり、愛知県豊田市足地区において実施した観光社会実験の結果をまとめ、今後の観光のあり方について示唆を得ようとするものである。

(この論考で扱われた範囲は、社会実験の「香嵐渓に来た人をまちなかへ呼び込む」段階に限定し、足助の町並みを紹介する地図の作成・配布、「臨時観光案内所の設置」「観光客へのアンケート」「住民へのヒアリング」とされている。)

地図の表面は「町から見る香嵐渓」とし、町並みエリアの地図上に町から見える香嵐渓の眺望ポイントをプロットして、「見上げる」「見直す」「まちなかから見る」という新たな香嵐渓の楽しみ方を提示し、香嵐渓を楽しみながら町並みを歩いてもらえるよう工夫した。裏面は「足助の町並み」とし、町並みの歴史や文化を紹介した。地図は 2 日間で約 4000 部を配布した。

観光客の多くは香嵐渓のみを目的として足助地区を訪れており、町並みの知名度は低いため、効果的に誘導するためには配布する地図の香嵐渓エリアから、まちなかへのアクセスに関する情報を盛り込むといった工夫が望まれる。

今回は都市デザイン研究室の学生が主体となって社会実験の運営を行ったが、持続可能性や必要な人員数を考慮すると、今後香嵐渓エリアからまちなかへ誘導を行う際には、住民主体の取り組み

としていくことが重要である。住民と学生の間で議論を重ね、ノウハウを共有していくべきであろう。

[社会実験による町並みへの観光の可能性の分析 足助における「まちなか観光」3]西川亮(同 pp.217~218、7082)

近年では、中馬のおひなさん(2月~3月)やたんころりん(8月)のように、まちなかでのイベントも増えている。特に中馬のおひなさんは1ヶ月間に観光客が7万人を超え、新たな観光としてのまちなか観光が期待される。

このように近年では多くの取り組みがなされているものの、それらはまちなかのイベントに留まっており、町並みを主とした観光はまだ確立されていない。足助の町が将来的に持続的な発展を遂げるためには町並みを活かした観光が有効であると考えられる。

社会実験のために地図を作成した。作成地図「足助の町並み」の概要 表面を馬が支えた町 足助の歴史を簡潔に紹介している。 まちと川のつながり / 町と小路のつながり 足助の町の特徴である。川や小路とのつながりを説明することで、町を訪れる人が足助の町の空間特性を把握できるようにしている。 足助七景 足助の町の楽しみ方を7つのポイントに絞って説明している。足助の建物の特徴を簡潔に図を用いて紹介している。

本町区民館及び田町交流館では異なる情報を提供することにより、2カ所を巡ることで足助についてより詳しい情報が得られるようにした。すなわち、本町区民館では足助の歴史や文化に関するパネルや本町の古写真の展示を行い、田町交流館では足助の町並みに関するパネルや田町の古写真の展示を行った。これにより、観光客の回遊圏を広げようとした。

多くの観光客が足助の町に「できればもう一度来たい」とし、その理由を足助の町並みに求めていることから、町並みが観光客を引きつける魅力を持っていることが分かる。しかし、食事処がないことや観光案内所がないことなどの問題を抱えている。また、まちなかでも中心性を持つような施設がないことを指摘する意見もあり、将来的に観光を進めるのなら、このような点を考慮する必要がある。

また、『都市デザイン研マガジン』の佐原記事で活躍していた都市デザイン研究室のパンノイ・ナッタポンの[町並み保存から町並み観光への展開における住民組織の成長と役割-NPO 小野川と佐原の町並みを考える会を事例として-](同 pp.91~92、7046)は、既出佐原プロジェクトの項に紹介した。

## 『都市デザイン研マガジン』 足助

88.89号 2008.12.25	足助プロジェクトも振り返ってみれば、さまざまなことがありました。始動して間もない7月に、現状分析と課題を踏まえた中間発表を行い、11月には観光シーズンを狙った社会実験を成し遂げました。それぞれの課題を議論しながら各自が異なる問題意識を持っているのがこのプロジェクトの特徴です。
----------------------	--

88・89号(2008.12.25)

Urban Design Lab in 2008 足助

今年の5月に幕を開けた足助プロジェクトも振り返ってみれば、さまざまなことがありました。始動して間もない7月に、現状分析と課題を踏まえた中間発表を行い、11月には観光シーズンを狙

った社会実験を成し遂げました。初めは漢字も読めないほどでしたが、この7カ月の活動を通じて、今ではすっかり「アスケ通」となりました。

7月以降、M2が引退したことで、人数は半分と少なくなりましたが、足助を街と川の大きな2つの視点で調査を行ってきました。それぞれの課題を議論しながら各自が異なる問題意識を持っているのがこのプロジェクトの特徴です。今後は3月の報告会に向けて各自が抱える課題をまとめ、プランにおとし、来年度以降はそのプランをもとに実践していく予定です。

94号 (2009.3.10)

トップ 2008年度の集大成！ プロジェクト活動報告  
～足助プロジェクト、2008年度を振り返る～

年度末の3月を迎え各プロジェクトで一年間の成果を発表する活動報告会、ワークショップが行われました。一年間のプロジェクト活動において何を感じ、学んだのか、そして、それらを活かすべく来年度の活動に向けての意気込みを伺いました。

### 足助プロジェクト初年度を括る活動報告

去る3月10日、足助支所にて1年間の活動報告を行いました。夏以降、1人1テーマで調査、分析、提案まで結びつけてきた足助プロジェクト。川空間・景観・観光・空間設計について各自が発表しました。報告会では、住民の方からは積極的な質疑がなされ、我々に対する期待や信頼を強く感じました。

2008年に始まった足助プロジェクト。数えると計7回に渡る8人体制の大規模プロジェクトも、夏以降M1のみの4人体制。1人1テーマの担当は、厳しく時には投げ出しそうになりましたが、提案まで考え抜くこと、そして住民の方に反応して頂けることが何よりも喜びでした。

今年度、足助プロジェクトではより住民に近い存在として活動を行いたいと考えています。私は特に商店街活性化と景観形成に関して、成果を残したいと思います。ワークショップ等も積極的に開催し、地元の方の意見を取り入れたまちづくりに貢献できればいいですね。只今新M1のメンバー募集中です。興味のある方はお気軽に私までご連絡下さい。(M1 西川亮)

101号 (2009.6.25)

各プロジェクト、いよいよ本格化！  
The projects are proceeding actively!  
足助PJ2年目が始動！

6月10日から4日間、昨年度の活動報告をしようとまちなかの公民館をお借りしてパネル展示を行いました。新聞に載った経緯もあり予想以上の方々が訪れてくださり、提案に対する率直な意見や要望を伺うことができました。

この展示に並行して初めて足助を訪問するメンバーでまち歩きを行い、まちなみのライトアップイベントの“たんころりん”や廃屋となってしまう商家を見学しました。景観ガイドラインを作る住民組織の会議にも参加させていただき、まちづくり組織のありかたについて考えさせられる良い機会にもなりました。“街をよくしていきたい”というたくさんの足助の方々の気持ちにこたえられるよう、1年目に先輩方が積み重ねてくださった調査や環境をいかしながら、今年度実現に結びつく活動をしていきたいと思ひます。(B4 毛井意子)





『中日新聞』豊田版(6月13日)に掲載



歴史的な建造物の見学に臨むPJメンバー

### 103号 (2009.7.25)

#### プロジェクト報告 Project Reports 足助 地元市民へのヒアリング調査実施

7月16-19日に今年度第二回調査を実施。メインは観光協会や商工会の方へのヒアリング。M2の引退と合わせて9月に今年度前半の区切りを迎える足助PJ。一人一人提案を目標に夏を走る。(M2西川亮)

### 106号 (2009.9.10)

#### 建築学会大会に参加 熱き仙台の4日間

建築学会大会に参加(8月26日~29日、仙台市の東北学院大学) 発表者(都市デザイン研・空間計画研)は19名(OBOG含む)。

#### セッション名「観光と地域」

まちづくりの経緯をふまえた町並み/景観/観光の今後 足助における「まちなか観光」1 窪田亜矢 社会実験による町並みへの観光客誘導可能性の検証 足助における「まちなか観光」2 六田康裕 社会実験による町並みへの観光の可能性の分析 足助における「まちなか観光」3 西川亮

### 108号 (2009.10.10)

#### 足助まちづくり報告展&発表会開催

足助PJでは、9月25日~27日まで、足助でまちづくり報告展 Vol.2 を開催しました。

6月にまちづくり報告展 Vol.1 の形でパネル展示をさせていただいたのですが、今回はパネル展示のみならず、地元の方への我々の活動の報告会、足助の川を守る会と川についての意見交換会も併せて開催しました。我々と住民との距離が近いこともあってか、活発なやり取りが見られました。

支所での公式なプレゼンテーションではなかなか引き出せなかった、



発表会の様子

住み手の足助へのパッションを引き出すことには成功したように思います。今回の報告展を機に M2 は一度プロジェクトを引退しますが、残りのメンバーの活躍に期待しています。(M2 六田康裕)

109号 (2009.10.25)

プロジェクト報告 Project Reports  
足助祭り調査

足助祭りに合わせて、10月10日、11日に足助を訪問しました。祭りでは普段見掛けない若い人々の姿が多くあり、狭い中を勢いよく曲がる山車や鼓膜が破れるかというほどの火縄銃の音に、祭りの魅力と迫力を感じました。今回の訪問はこれまであまり見ることができなかった足助の伝統を垣間見る良い機会となりました。(yamashita)



山車が町を練り歩く様子

110号 (2009.11.10)

トップ プロジェクト活動の半年間 上半期の成果と今後の展望

足助 好評のサイン計画を実現へ



学部生から留学生まで幅広いメンバーで活動している足助PJの今年度。前半はサイン計画の提案と地元の生活に注目して商店街の歴史の変遷や生活の変化など、密度の濃い調査を中心に行ってきました。9月の活動報告会には、予想を超える地元の方々に来て頂き、商店街の歴史に多くの反響がありました。サイン計画は地元でも好評で、実現に向けて動き出しそうです。人数的には厳しい足助PJ。後輩に期待しつつメンバーも募集中です。(M2 西川亮)

112号 (2009.12.16)

2009年、都市デザイン研究室 日々変化、日々成長  
Following the track of Urban Design Lab in 2009

足助

「公民館にてパネル展示 中日新聞に掲載」「足助祭り調査」の既出写真を再掲載。

113号 (2009.12.25)

プロジェクト報告 Project Reports  
足助 空き家の活用提案発表



12月8日、豊田市役所にて空き家の活用提案の発表を行いました。プレゼンでは「住民向け」と「観光向け」のそれぞれの立場から、2つの提案を提示しました。プレゼンは無事終了し、市の職員の方々からは好意的な感想を頂いたと同時に、提案の実現に向けてアドバイスを頂きました。足助PJでは3月に足助全体での報告書を提出する予定です。(D1 王新衡)

119号 (2010.3.24)

## プロジェクト報告 Project Reports

### 足助 次年度へ向けた課題が見つかる



2年目の活動を総括する報告会が、3月17日(水)豊田市役所足助支所で開かれました。西村幸夫先生も臨席され、「塩の道を日常の中心線とする」と題し、昨年度の観光主体の調査提案から、今年度は町の骨格となる塩の道沿いの生活についての示唆を行いました。4月から景観計画が施行され足助のまちづくりが大きく動き出そうとしている中で、東大チームがどのように関わっていけるか認識を深めた1日でした。(kikuchibara)

124号 (2010.6.10)

## プロジェクト報告 Project Reports 足助



熱心に説明するM2山下



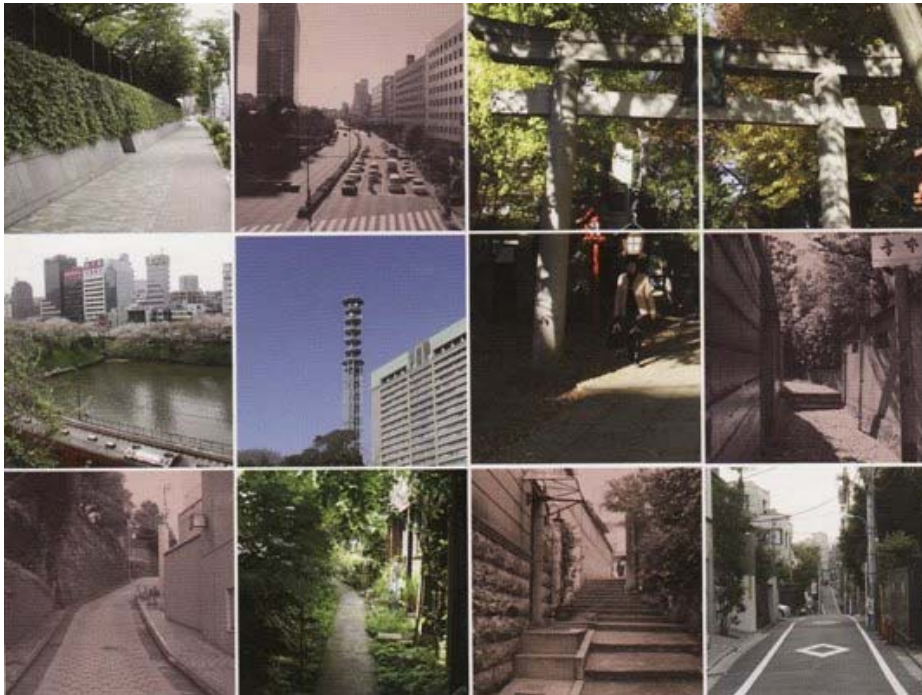
田口邸での報告会の様子

5月末に足助を訪問した足助チームに近況を報告してもらいます！ 足助PJでは、本年度初の現地訪問を行い、ヒアリングを中心とした調査、田口邸をお借りしての報告会を行って来ました。報告会は、最近改装されたという田口邸の気持ちのよい土間をお借りして行い、観光客や住民の方々と有意義な意見交換を行うことが出来ました。また、ヒアリングを通して町並みや、町を囲む山城や川の歴史を知った後の足助は不思議と趣深く感じられ、眺望を創出する要素は目に見えるものだけではないということを感じました。余談ですが、足助の住民の方々は気さくかつ親切な方が多く、ヒアリング中ももてなして頂き大感謝大感激の足助メンバーズでした。今後も、住民の方々の厚いご指導ご鞭撻を願いつつ、それに負けない真剣さで足助のまちについて考えていきたいのです。(shibao)

## 9. 新宿 区の景観計画改定へ6地区調査チーム

ふたり一組で市販ガイドブックも編集

今回のシンポジウムは、「新宿区景観まちづくり計画(素案)」の作成に際し、現地調査やガイドブックの編集を行った東京大学西村研究室・早稲田大学後藤研究室・工学院大学窪田研究室の各大学院生の発表が主要な部分をなしています。学生は区内を10地区に分けて担当し、自分の足でまち歩きをして行った調査をもとに、それぞれの地区の景観の特性やまちづくりのアイデアを「景観まちづくりガイドブック」にまとめたものを発表しました。10地区の発表がそれぞれに特徴が出てとてもよかったと思います。(中山弘子新宿区長あいさつ) 景観まちづくりシンポジウム「新宿発 景観を守り育てる方法」(新宿文化センター-2008年5月9日)



『景観まちづくりガイドブック』 2「笹筒地区」の表紙写真

## ふたりチームで調査・市販本編集

新宿プロジェクトは、2006年度からの報告が都市デザイン研究室のホームページに現れているが、同年度と翌年度とも内容は出ない。内容が現れるのは2008年度からで、新宿区景観まちづくり計画の基礎データ作成の委託を受け、笹筒、落合第一、第二、四谷、榎、柏木地区と前後6景観調査チームに分かれて活動してからである。笹筒地区は、五軒町、飯田橋・大曲、神楽坂、牛込台地、外濠斜面地、市谷本村台地がエリアである。

笹筒については、江戸時代この辺りには、幕府の武器を司る具足奉行、弓矢鍵奉行組同心の拝領屋敷があり、こうした幕府の武器を総称して「笹筒」と呼ばれた。1713年(正徳3年)に町奉行支配となった際、町ができて牛込笹筒町となり、その後牛込がとれて笹筒町になった。

神楽坂プロジェクトは、2000年度に大野村と鞆の浦と同時にスタートしたが、2003年度以降報告が消えていたのが、2006年度にこの新宿プロジェクトの出現により「新宿 神楽坂」プロジェクトとして復活した。

その後景観調査チームが任務を終了後は、神楽坂が実質単独プロジェクトに立ち戻った。そこで、本稿は、神楽坂については「新宿プロジェクト」のなかでは述べず、別に「神楽坂プロジェクト」の項を立てて後述している。

6チームのうち、落合については「下落合斜面地エリア」について、都市デザイン研究室ホームページの「新宿 神楽坂プロジェクト」に詳しく載っている。景観形成は「斜面緑地の保全・創出」「斜面緑地を生かした景観」「坂道を生かした景観づくり」を方針とし、具体的には「聖母坂通り沿いには、快適な歩行空間となるよう壁面や擁壁の位置を後退させ、ゆとりをつくる」といった方針で、擁壁の上部の垣、柵は高さを抑え、坂道や曲がりなどは一体となって豊かなみどりが感じられる景観をつくることなどが記載されていた。

こうした景観調査結果は、「新宿区景観まちづくり計画」に活かされるとともに、2008年3月に『新宿区景観まちづくりガイドブック』として、新宿区都市計画部地区計画課発行で市販された。私は、書店で2の「笹筥地区」を購入した。非課税で500円だった。

奥付をみると、「企画 新宿区まちづくりワーキンググループ」として、東大大学院工学系研究科都市デザイン研究室、早大創造理工学部建築学科後藤研究室、工学院大学工学部建築都市デザイン学科窪田研究室とあった。景観調査は、三大学が地区を分担して実施したのだった。

奥付では、購入した2は「編集 東大都市デザイン研究室」となっていたが、東大都市デザイン研究室は6冊編集した。あのまちづくりプロジェクトの面々が、頻繁に研究室を出入りして活動していた結果が、各地区チームの学生の手でみごとにビジュアルに編集されたのだった。

編集後記に「初めての編集作業、コンセプトからレイアウトまでほぼ二人で決める、という自由度の高い本づくりに戸惑いもありましたが、自分たちなりの「景観まちあるき」という工夫を取り入れ、楽しく進めることが出来ました」と、院生の矢原有理が書いている。

東大チームで6冊編集した。インナーブックと違って、市販本の編集を任されたことは、就職後すぐに役立つ体験である。それも、ふたりずつ組んで担当地区を調査し、「景観計画調査報告書」をまとめ終わると同時に、次の地区へ移る。

『都市デザイン研マガジン』は、総力戦、転戦などと報じ、そのすさまじさをリアルに伝えていた。この総力戦は、第1クールから第3クールまで、転戦して行われた。

そもそもが少数精鋭のまちづくりプロジェクトであるが、チームの最小限であるふたりで、ここまでしとげてしまう実力をあらためて評価したい。それに、いかにハードワークでも「楽しい」といってのけるのは、まちづくりプロジェクトの魅力である。調査から編集までの体験は、固定まちづくり基地体験とともに、社会に出て設計その他の仕事につく学生にとっての実益もあろうが、それ以上にこうした体験が人格形成していく過程が貴重である。

「新宿発 景観を守り育てる方法」というユニークなネーミングの景観まちづくりシンポジウムが、新宿文化会館で開催された。新宿区と東京を美しくする都民の会の共催で、中山弘子新宿区長がいさつで感謝の辞を述べた。冒頭に掲載したメッセージは、その一部である。

シンポジウムでは、実際にまちに出て調査をした3大学の発表やパネルディスカッションを通して、「美しい新宿」の実現のために何ができるのかの討議だった。

「新宿区景観まちづくり計画」の中の「エリア別景観形成ガイドライン」が、3大学との協働による詳細な調査にもとづいてまとめられ、調査研究の成果が『景観まちづくりガイドブック（全10巻）』として編集、刊行されたのである。

ガイドブック巻末には、新宿区景観調査メンバーは、西村、中島、野原3教官とともに、中島伸、田中暁子、鄭一止、坂内良明、石井宏典、伊藤雅人、奥田紘子、砂川亜里沙、筒井直央、吉田拓、平林直、大道亮、矢原有理の13人の氏名が載っている。

<p>26号 2006.5.1</p>	<p>新宿プロジェクトは、創刊号には出ていない。26号から各プロジェクト春の一斉活動紹介から登場し、次号では「総力戦！」の記事が出て、急ピッチで掲載が増える。</p>
-------------------------	---

26号 (2006.5.1)

トップ

春本番。プロジェクト、自主活動一斉始動

積極参加 M1、早くも多忙週間

4月24日(月) 15:00 新宿景観プロジェクト

新宿区の景観計画改訂に向けた調査・提案を行う新プロジェクト。9階院生室には、M1 全員のほか、昨年12月の「ベルク本郷まちあるき」を経験したメンバーも数名が加わって、20人が集まった。全体説明後、早速「落合」「笹笥町」の2チームに分かれ、5月11日の合同ミーティングまで各々まちあるき、景観調査、地図作成などを実施することになった。

27号 (2006.5.15)

総力戦！ 連日連夜の作業と議論 新宿景観プロジェクト経過報告

近年稀に見る巨大プロジェクト・「新宿」(区景観計画改訂へ向けた調査と提案)が、研究室を席捲している。発足時に早速、「笹笥」「落合」各チームごとに、図書館資料収集・住宅地図つなぎ資料読み込み、と分業体制が敷かれ、現地調査後は地区内でさらに担当地域に分かれて作業。PC上の「笹笥」「落合」フォルダは競うように容量がふくれあがり、M1メンバーは主戦力として、もはやためらいなく徹夜をくりかえす。5月11日、新宿区の職員他を迎えて、西村幸夫教授への中間報告ミーティングが行われたが、息つく間もなく、17日の区景観審議会・小委員会へ向けた資料作成へのスパートが開始された。

<参加者の声>「景観の計画を練るに際して歴史をさかのぼって調べる、という作業に大きな新鮮味を覚えている」(落合チーム・M1) 「ファイルの重さにPCが悲鳴をあげているけれども、作業はおもしろい」(笹笥チーム・M1) 「毎日のように落合に足を運んで、若干疲弊した。5月17日以降の後半戦に向けて態勢を立て直してゆきたい」(落合チーム・M1)



日付は回る、されど帰らず女性3人



5月11日・プレゼン



笹笥地区模型 平林直 M1 の力作



二人チーム

29号 (2006.6.15)

ようやく一息、新宿

笹笥・落合両チーム、報告書完成

4月の年度始めより、M1 中心で走り続けてきた新宿プロジェクト。6月ころ、両チームはほぼ同

時に「景観計画調査報告書」をまとめて、2地域における作業は終了を迎えた。6月下旬からは、「新宿駅前」「四谷」「落合第二」の3地域に転戦することが予定されている。



報告書より 上/野原助手率いる落合チームのペーパーは、「これでもか」と言わんばかりの圧倒的な情報密度を誇る  
下/中島助手監修の笹笥チームは、「ざっくり」と景観構造を伝える意図

### 32号 (2006.8.1)

新宿景観Pおさらい街歩き 8月再始動に向け、確かな手ごたえ



7月30日、6月初旬に幕を下ろした新宿プロジェクト第1クールの「おさらい街歩き」に行ってきました。午前9時に目白駅に集合したメンバーは野原助手、D1 永瀬・中島・M2 坂内・M1 後藤・奥田・塩澤・平林・ポンサン・横田・筒井。梅雨明け直後の厳しい日差しの中、まずは落合地区を西へ西へ。上落合・下落合・中井の各地区を見て回りました。暑さと坂道にいっぱいの人、あらためてゆらぎを感じる人、ああすればよかった、こんなところもあったのね、とさらに学ぶ人。

なにより各地区担当者による町の歴史、地形などの詳細な説明が、第1クールを物語っていました。充実のおさらい街歩きです。

高田馬場で昼食後、中島助手、D3 岡村、M1 吉田が合流。早稲田駅から今度は筆筈地区を東へ東へ。榎、牛込台地、市谷、飯田橋、神田川畔を見て回りました。ゴール地点、神楽坂では第1クールと8時間に渡るこの街歩きの慰労を兼ねて乾杯

8月からは、落合第2地区、四谷地区を対象とした新宿プロジェクト第2クールがいよいよ始まります。(M1 筒井直央)

33号 (2006.8.15)

### 新宿は燃えているか 景観プロジェクト、灼熱の第2クール

4月から6月まで、空前の規模で研究室を動かした、あの新宿プロジェクト(新宿区景観計画策定基礎調査)が、夏休みに入って再始動。第1クールで取り組んだ筆筈、落合第一地域の、それぞれ隣接地域にたる四谷、落合第二地域を対象とした、8月下旬までの夏季短期決戦である。

プロジェクト発足以来の密着取材体制を組んでいる本誌が、第1クールにも増す勢いで吹き荒れる「新宿」模様を伝える。

#### 怒涛の10時間ミーティング

8月12日(土)、正午に始まった四谷地域チーム・ミーティングは、各自が自分の担当地域について作成した「景観構造図」を中心に議論、終了は6時過ぎ。中島、野原両助手が宣言した「10分」休憩ののち、落合第二ミーティングスタート。終わったころには、時計は10時を回っていた。



四谷チームのミーティング風景  
毎回消費される紙の量もすさまじい



落合第二チームのまちあるき。このように日が出ていなければ楽なのだけれど...

#### 流行は「早朝まちあるき」

猛暑の折、日中の現地調査は相当消耗する。ならば、始発で現地に赴いて6時ごろから歩き始め、陽射しの強くなるまで(遅くとも午前中)に歩ききってしまうおう、というのが「早朝まちあるき」の考え方。8月5日ごろ、四谷チームで初めて実施する者が現れると、一気に流行した。(bannai)

40号 (2006.12.1)

### ホップ、ステップ・・・新宿<sup>エレジー</sup>哀歌 第3クールへの胎動

奮闘を続ける新宿プロジェクトは第2クール終幕の兆しが見える中、年内さらに作業に加速をつ



けるため、中島助手号令の下、第3クール調査地となる新宿区柏木地区のまち歩きを11月26日(日)に敢行した。当日は若干の少雨を物ともせず、午前中から日没まで、メンバーにとって久しぶりとなるまち歩きが行われた。柏木地区はこれまでの調査作業を行った4地区とはまた異なる文脈、様々な空間の展開、場所の豊潤な語りに一同満足の行くまち歩きであった。

今後の予定は、年内は第1、第2クールのおさらいとまとめを行い、新年から本格的に第3クールとなる柏木調査を行う予定。第2クールは夏季だったため、暑さとの闘いとなったが(本誌33号参照)第3クールは冬季の調査となる。内に秘めた情熱の火を消さぬようにして、第3クールも望んでいく。寒さに立ち向かっていけるだけの経験と自信は既にこれまでの第1クール第2クールで蓄えたはず。その前にはまずは今年の総仕上げ。(D1 中島伸)



区画整理街角



成子神社への参道



神田川沿い遊歩道



古い住宅の背後に超高層

#### 44号 (2007.2.10)

##### ゆきゆきて新宿 新宿プロジェクトを構造化する

###### 全体

「総力戦」は「消耗戦」の様相を呈しつつ年度末「停戦」へ向けて加速度を増している。

###### 部位

###### 果てしなき修正スパイラル

「年度内」というおおまかな締め切りの中で、ミーティングが開かれるごとに、フォーマットの更新が行われる。第2クール(筆筈区域、落合第1区域)に反映し、修正された第2クールの到達点が第1クールに反映され、院生「仕事力」の上昇 構造図、資源図、景観形成の方針、の3つを仕上げる中で、地域の資源を悉皆的にピックアップする収集力、諸要素を構造化する構想力、目標像を描く計画力が鍛錬される。成果物は、ただちに就職活動用のポートフォリオに反映され、実益も充分だ。

###### 「都市空間の構想力」へのフィードバック

雑誌「季刊 まちづくり」に連載中の「都市空間の構想力」においては、新宿プロジェクトの実りが大いに活用されている。

#### 49号 (2007.5.16)

##### 新緑の季、まちづくりの芽吹いて 全国各地で今年もプロジェクト始動 新宿

新宿区の全街路踏査によって、新宿区の各地区の景観特性を調査するプロジェクトです。新宿と一口に言っても、その範囲は広く、新宿副都心に代表されるまさに都心業務地区といったエリアだけではありません。東は神楽坂から西は落合という住宅地まであります。

都会的な空間から郊外既成市街地まで、様々な景観を細やかに読み解いていきます。今回は昨年からの調査を新体制で引き続き行い、完了させます。ここでの景観調査の実績が新宿区の今後の景観計画の基礎に生かされる貴重な調査。責任感を持ってしっかりとやっていきたいです。(D2 中島伸)

55号 (2007.7.25)

新宿Pは今、景観行政へ向けて超大作の報告書のできるまで

柏木と榎という地に着手してからももちろんそれは現在進行形で進められ、一方今までの地域の整理が始まり、「新宿」は研究室の合言葉かと思われるほどに浸透しきった。夜が更けても熱い議論を交わす博士二人の姿、絵を描き大量のデータを整理してゆくメンバーたちの姿、こうして大作までの地盤ができています。



7月3日(月)新宿区役所にて、西村先生も委員として参画されている景観まちづくり審議会が行われ、新宿区エリア別景観方針の内容に関する審議が行われました。進士会長の進行の中、新宿プロジェクトで調査している成果を中島、野原両助教によって発表され、区民の委員の方を交え議論されました。早稲田大学後藤研と工学院大学窪田研との合作による報告書は80ページを超える大作。内容に関しても概ね了承された形となり、最終的な合意に向けて、修正が加えられ、新宿区の景観行政に活かされていく予定です。(D2 中島伸)

プロジェクトこの半年

『空間 平面』(新宿プロジェクト)

都市デザインに興味を持つようになってから、景観をただ漠然と見て「なんかいいなー」とか「うーんいまいち」みたいな感覚的に捉えるだけでなく、その要因を探るようにはしていたけど、それをさらに平面の地図上におとすという作業はめちゃくちゃ難しいですね。しかも「日常の風景じゃん」みたいな。

日常の風景に溶け込んだ些細な特徴を見出して、その構造を平面におとすという作業。おもしろいけど大変ですな。(M1 増田圭輔)

61号 (2007.10.25)

第2弾新宿プロジェクト始動

「新宿区景観まちづくりガイドブック」へ

2006年4月24日に幕開けた新宿プロジェクト第1弾の「景観形成方針」の作成は、2007年10月5日、新宿区への提出をもって一段落しました。

当初1ヶ月の短気集中プロジェクトとのことでしたが、なんと1年半の年月をもって完成。感慨もひとしおです。そして続く第2弾「新宿区景観まちづくりガイドブック」の作成が11月2日スタート。これまでの調査結果や提案をベースに、各地域の景観特性と意義、魅力を一般区民向けにわかりやすく伝えるものとして、書籍としてまとめます。今までの作業とはまた一味違った今後の躍進に乞う期待です。

「新宿区景観まちづくりガイドブック」 2007年度末にかけて各地域(四谷、筆筈、榎、落合第一、落合第二、柏木)ごとに1冊ずつ作成。これまでの調査結果をベースに以下を提示する。

各地域の景観特性と意義、魅力、景観に対する提案(shiozawa)



### 63号 (2007.11.25)

#### 各地区創意工夫、新宿PJの経過

新宿区景観計画ブックレット作成に向けて、四谷、筆筈、榎、柏木、落合第一、落合第二地区を2名ずつでどのような構成にするか議論しながら進めています。オリジナルキャラクターが解説する榎、グラビアページで魅せる落合、まちあるきマップを作成する筆筈などそれぞれが趣向を凝らしている模様。

その創意工夫は先日の新宿区の方との協議においても好評でしたが、景観構造や景観形成方針の扱い方については、いかに住民にわかりやすく、かつ限られたページの範囲で表現するか、課題が残りました。A5サイズ90ページにも及ぶ新宿プロジェクトの集大成は、M1を中心に年末の提出に向けて仕上げられていく予定です。(yahara)



上：キャラクター作成中(榎)  
下：まちあるき再び!左：落合/右：四谷

### 64・65号 (2007.12.20)

#### プロジェクトの一年 新宿

2007新宿プロジェクトは、昨年から続く筆筈・落合第一の修正作業を昨年度内で完成させました。春、新年度に入り、新M1全員参加で残り2地区、榎・柏木地区の調査を行いました。これを昨年度に現M2を中心に築き上げたノウハウをフル活用し、短期集中で夏には作業を完了させました。秋から新宿の景観審議会にて、調査内容が反映された景観計画の審議が始まっています。(実は、審議会の資料作成が今年のヤマだったように思います。) 今後、新宿プロジェクトは、さらに調

査内容を地域住民の方に景観を理解していただけるよう、いろいろなアイデアを盛り込んだ景観ガイドブックを鋭意作成中です。(D2 中島伸)



68号 (2008.2.10)



MTGでは他大学担当地区に目を通し、触発されました

#### 新宿 GB いよいよ完成へ

1月23日、新宿区景観ワーキンググループの全体ミーティングを終え、いよいよ新宿景観ガイドブックがデータ入稿へ向けて大詰めを迎えています。諸先輩方と私たちの汗と涙の結晶(景観調査報告書)をガイドブックという成果として残すべく、2日に1度は研究室で徹夜する(まるで論文生活?)体制で連日作業を進めています。

(D2 中島伸)

73号 (2008.4.25)

#### 新宿区景観ガイドブック発刊

全10地区のうちの6地区が東大(デザ研)担当編集で完成しました。1冊500円で販売されます。

新宿区景観ガイドブック発刊 01 四谷地区、02 笹笥地区、03 榎地区、07 落合第一地区、08 落合第二地区、09 柏木地区。



01 四谷地区



02 笹笥地区



03 榎地区



07 落合第一地区

## 10. 神楽坂 早大法科大学院と共同研究

### 10 年前高層マンションに対案の伝統

生活系の路地が人と人の接触によって生ずる「何か」の魅力なら、しつらえの路地は意識的に奥へ奥へと誘い、非日常的な神秘さにまで触れなんとする緊張感が醸し出す「何か」の魅力である。……論を少しはっしょって断定すれば、東京のもてなし文化のエキス「粋<sup>いき</sup>」という人々の感情や行動まで規定してきた美意識が路上に流れていると言い換えてもよい。(寺田弘 元都市デザイン研究室研究員) 西村幸夫編著『路地からのまちづくり』(学芸出版社、2006年) pp.30~33



都市デザイン研究室ホームページ「新宿プロジェクト」の画像

#### 路地のまちづくり

「かつては料亭を中心に「花柳界」として栄えていた神楽坂には、路地からなる「粋な伝統的界隈が残っています」という書き出しは、2010年に第1回プロジェクト未来遺産に登録された神楽坂についての日本ユネスコ協会連盟の登録概要である。未来遺産の趣旨は、いまの東大神楽坂プロジェクトの活動方針と一致している。

未来遺産の概要は、つづいて「しかし、相次ぐ料亭の廃業や防災上の制約、或いは強い開発圧力によって昔ながらの伝統的界隈は大きく変容しています。こうしたまちの変化に向き合い、神楽坂への想いを集めて益々粋なまちづくりを行うために、建物の高さ規制や一部用途の規制など地区計画のルールづくりにも取り組み、路地と伝統的界隈を未来へ向けて保全していきます」としている。

さらに目標については、「『粋』の伝統を生かした神楽坂のよりよいまちづくりのために、路地空間の保全とまちで行われる様々な活動を一体的に進めていきます」と記載されている。

団体は「神楽坂まちづくりの会」であるが、粋を冠して神楽坂まちづくり団体として知られている「NPO 法人粋なまちづくり倶楽部」の創立者で理事長の寺田弘は、東大都市デザイン研究室研究員だったことがある。

『路地のまちづくり』で寺田は、「神楽坂は JR 総武線の飯田橋駅から北に向かう高台に位置している。左手に東京理科大学の校舎を見ながら、やや急勾配の坂を臨むと両側に街路灯と街路樹をもつ

た商店街が目に入ってくる。その表通りから一步路地に入ると空気ががぜん濃くなる」(p.28)と書いている。さらりとした筆致ながら、にわかには雰囲気・情緒に包まれてしまうというのは、神楽坂のまちづくりに打ち込んだ寺田弘の粋な美意識が、尋常でない行間をしつらえているからであろう。

「歴史と現代が触れ合う坂と石畳の似合う粋なまち」といえば、新宿区の神楽坂。近年、住まいエリアとしても観光エリアとしても定評のある地に、東大神楽坂プロジェクトが参画したのは、新宿景観計画の基礎資料づくりを西村幸夫の線で都市デザイン研究室が委嘱されたからで、ある。初め新宿・神楽坂プロジェクト称したが、2008年3月に『新宿景観まちづくりガイドブック』の出版も終わって、新宿区は神楽坂だけのプロジェクトになった。そのため、本稿では神楽坂プロジェクトを単独で扱った。

神楽坂の上り口の江戸城の外濠「飯田濠」は、再開発で埋め立てられたが、私はその反対運動に賛同して訪れたときに神楽坂を知った。都市デザイン研究室の神楽坂ホームページは、粋な編集になっている。これに対して、文章は粋ではなくて硬いところが、研究プロジェクトの存在感である。

ところで、神楽坂は西村幸夫にとって深い関係がある。その深いところは、2000年に、神楽坂5丁目に31階建て88メートルの高層マンション計画が浮上した当時の対応にあった。花街の雰囲気を守るため、住民自ら設けたまちづくり憲章で、6階建てを目安に家並みを低く押えてきたエリアだったため、住民が反対運動を起こした際、東大都市デザイン研究室の学生らが代替案の模型を展示したことが、神楽坂とのとの出会いと推測される。

『東京新聞』(2000.10.21)は、「東大研究室 代替案の模型展示 住民反対神楽坂マンション計画」、『新宿区新聞』(10.25)は「東大の研究室が模型図 こんなに高い31階! 神楽坂の業者に対抗」、次いで毎日新聞(11.8付)が「壊すか 溶け込むか 粋な神楽坂」の見出しで報じた。

『東京新聞』は、「新宿区の神楽坂通り周辺を中心に開催中の「まち飛びフェスタ」(同実行委員会主催)で、東京大学都市工学科の都市デザイン研究室の学生ら14人が、同地区に建設予定で周辺住民から反対運動も起きている28階建てマンションの代替案を設計、展示し注目を集めている」とし、「代替案は3つ。容積率や床面積をあまり変えないまま、3つの塔に分散し、高層化を防ぐ案など工夫を凝らした3案が、模型とともに展示されていた」と説明した。

『毎日新聞』は、新宿区の神楽坂の一角で持ち上がった構想マンション計画をめぐる、住民と建築主の不動産会社の間で「高さ」をめぐる交渉が続いている。そんな中、この問題に興味をもった大学都市デザインの研究者たちが「対案」をつくった。「街並みとの共存を目指した」という案に建築主がどう応えるか。都心の多くの開発現場が「神楽坂のケース」に注目している、と前書きした。

そして「対案をつくったのは、東京大学の都市デザイン研究室の有志」で、3案を用意し、模型を10月に神楽坂で展示したが、展示に当たっては「起伏に富んだ坂や階段を交えて、歩けば袖が擦れ合うほどの路地や、古くからの料亭街の粋な雰囲気を漂わせる石畳の横町が張り巡らされている、現在の東京においては稀有な街です」との一文も添えたと書かれてあった。

研究室の「神楽坂まちづくりプロジェクト」が、そのホームページに現れたのは2000年度だったが、それはこの神楽坂アクションのときの誕生ではなかっただろうか。

都市デザイン研究室は、環境問題で対案の模型、モックアップをつくって提示することがよくある。まちづくりプロジェクトでも、高山はじめ各地で、大なり小なりその作製がみられるのも、ひとつには神楽坂のアクションの流れを継いでいるのであろう。

神楽坂については、『新宿区景観まちづくりガイドブック』 2「笹笥地区」に、「神楽坂(路地・

横丁)エリアってどんなまち? 江戸期からの街路構造を受け継ぐ、職住遊一体型のまち」として、「細やかなまちなみ」「小気味のよい町割のリズム」「足元から立ち上がる懐かしい賑わい」「路地の心地よい狭さ」「路地のこだわりの路面舗装」など、説明も新鮮だった。

## 『都市デザイン研マガジン』 神楽坂

97号 2009.4.25	神楽坂プロジェクト 『新宿景観まちづくりガイドブック』の発行を契機に、2009年度から本格的プロジェクトになった。早稲田大大学院研究室とコラボレーションもしている。2000年度に大野村、鞆の浦とともに登場したが、その後消え今回復活した。研究室ホームページ「プロジェクト」には「新宿神楽坂」とあるが、事実上いまは独立している。マガジンには97号で登場した。
------------------	---

97号 (2009.4.25)

トップ

新しい年度を迎え各PJ続々と始動

M1を伴いまずは現地へ 神楽坂

昨年度、『新宿景観まちづくりガイドブック』発行をきっかけに、筆筈地区担当メンバー(D中島・旧M2 大道・矢原)は、神楽坂でのまちづくり「ルール策定に関する議論に参加することができました。今年度は、本格的にプロジェクトという形で始動、窪田先生、D中島、鈴木、松井、傳、M2 菊地原、M1 神原、永野、研究生高橋というメンバーで、引き続き地元の議論に加わりながら、そのベースとなる調査や提案等を行っていく予定です。(D3 鈴木智香子)

101号 (2009.6.25)

神楽坂PJ公開ワークショップ開催



意見を聞く坂本氏とM1永野

6月6、7日の4日間、神楽坂で行われたワークショップに参加してきました。神楽坂の自称ワークショップ男・坂本氏のまちの印象(好きな所や嫌いな所)を聞き、その場で意見を分類していくという、世界初(?)の公開ワークショップを試みました。

ところが初めての試みなので、誰もワークショップの進め方がわからない・・・!! そんなあり得ない状況から始まった公開ワーク

ショップでしたが、少しずつ方法論を固めながら4日間で500名以上の参加者から神楽坂に対する思いを聞くことができました。会場の壁面が参加者の意見で埋まっていく光景は、まさに圧巻の一言。大成功に終わったと思います。老若男女さまざまな神楽坂の人々と話すことができた今回のワークショップは、神楽坂PJメンバーにとっても大きな刺激となりました。(D1 松井大輔)

102号 (2009.7.10)

プロジェクト報告 Project Reports

神楽坂 D3 鈴木、神楽坂で堂々発表

6月17日、神楽坂で開かれた「粋な住まいと建築塾(粋なまちづくり倶楽部主催)において、D3・鈴木智香子さんが「民有地の地域資源を活かした住環境改善型まちづくり」をテーマに講演を行い

ました。今後の神楽坂のまちづくりの参考事例として、戸田市の三軒協定の仕組みなどについて発表がされました。鈴木さんが立派に発表される姿を見た、他の神楽坂 PJ メンバーは「いつか自分も…」という新たな目標を見つけたのではないのでしょうか。(D1 松井大輔)

104号 (2009.8.10)

### プロジェクト報告 Project Reports

#### 神楽坂 早稲田法科大学院とのコラボレーション

##### 神楽坂 PJ 公開ワークショップ開催



8月3日、神楽坂キーストーン法律事務所において、早稲田大学大学院法務研究科の日置研究室と都市デザイン研究室神楽坂チームが集まり、どのような仕組みづくりが神楽坂にとって有益となりうるか等、それぞれの専門の立場から幅広く議論がなされました。今後は双方の学生がチームを組んで、8月24日の成果報告に向けて議論を重ねていきます。(M1 神原)

105号 (2009.8.25)

##### 神楽坂 PJ 早稲田チームとの共同研究



8月24日において、8月3日に引き続き、早稲田大学大学院法務研究科日置研究室の方々と神楽坂プロジェクトメンバーで共同勉強会が行われた。内容は景観保全のためのルールと運用に関して、事前協議と事後協議のあり方について議論するもので、2チーム(住宅班と商業班)に分かれて議論を出しあって、議論するというものだった。(研究生 高橋邦昭)

110号 (2009.11.10)

#### プロジェクト活動の半年間 上半期の成果と今後の展望

##### 神楽坂 下半期も緻密な活動を展開

現場をよく観察し、よく考え、まちの人とよく話すをモットーに、フットワーク軽く、足繁く通いました。

毎月1回神楽坂建築塾(地元のまちづくり勉強会)に参加。これまで2回都市デザイン研究室より発表(6月鈴木D、8月松井D)。この秋より鈴木D、中島DがファシリテーターとしてWS運営に参加。6月6、7、13、14日公開ワークショップ開催(まちづくりの会と協働)。8月3、24日早稲田大学法科大学院日置研究室と研究協議会。11月3日まち飛びフェスタ参加。

下半期は、月に一度、地元の方たちと議論し、まちづくりルール案を策定していきます。また、今年の調査をまとめて、地元で出版されるまちづくりキーワード集に掲載する原稿執筆し、年度末には調査報告書の作成を予定しており、下半期も奮って活動していきます。(D3 中島伸)

112号 (2009.12.16)

2009年、都市デザイン研究室  
日々変化、日々成長 神楽坂





122号 (2010.5.10)

### プロジェクト報告

プロジェクト、続々本格化！

神楽坂プロジェクト

まちづくりキーワード第2集出版記念展

スタティックな空間の読み取り・空間形成技法の解釈のみではなく、空間における時間の流れをさかのぼりながら、その土地・空間に内在する「構想力」を解き起こしていくダイナミックな作業を想定している。



新宿区長も来訪



発表に臨む鈴木と神原

2010年3月に完成した「神楽坂キーワード第2集」の出版を記念して、4月22日、23日に東京理科大学森戸記念館で記念展示会、23日午後6時から寄稿された方々を招いてのフォーラムが催されました。我々東大神楽坂チームはD3鈴木とN2神原が「神楽坂らしさを追いかけて」と題したプレゼンテーションが大変個性的で、懐の深いこのまちはこのような人々によって日々磨かれ、育てられているのだと再確認した一日でした。(N2 神原康介)

## 11. 京浜臨海 再生提案から大シンポジウムまで

### 21世紀COE「都市空間の持続再生学の創出」

A1計5枚に及ぶ怒涛のパネル展示は聴衆の目を釘付け。その結果、観客動員数100名という予

想を大幅に超える 150 名以上の参加者に、横浜の気温も急上昇。シンポジウム後に行われた交流会。そして夜の横浜 night へと、冷めやらぬ熱気に、雪は雨へと姿を変えたのでありました。(野原卓) 『都市デザイン研マガジン』44号(2007.2.10)



京浜・船上見学会(『都市デザイン研マガジン』29号(2006.6.15) by ishii)

## COE プログラム

都市デザイン研究室ホームページ「プロジェクト」2006年度に、「京浜(横浜市)21世紀COEプログラム都市空間の持続再生学の創出」とあるが、内容は出ない。COEは「center of excellence」のことで、「卓越した研究教育拠点」と訳されている。優秀な頭脳と最先端の設備環境を持ち、世界的に評価される研究拠点のことである。

日本では国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進するため、文部科学省が「21世紀COEプログラム」を2002年からスタートさせ、東大は28のプログラムを選んでいる。そのなかの「都市空間の持続再生学の創出」プログラムで、大規模工場地帯につながっている。正しくは「京浜臨海再生プロジェクト」で、2004年度にスタートした。

横浜市都市デザイン室長を務めたアーバンデザイナーの北沢猛が、新領域創成科学研究科教授として応募して選ばれたプログラムだけに、他のまちづくりプロジェクトと違って大がかりであり、北沢コーディネーターのもと、30人以上の研究者・大学院生らが関わる大型プロジェクトとなった。

COE研究者、横浜市、民間企業も集まって行われたワークショップをはじめ、ウォーターフロント開発事例調査として、北欧・ドイツにも飛んだ。海外視察なしでは、世界最高水準のプログラムはこなせない。

一方、大棧橋たもとから川崎工業地帯までの2時間船上見学会を行い、初めて見る海からの工業地帯を勉強し、京浜臨海部の廃棄物処理、歴史資源、ストック、土壌汚染、建築意匠など多様な側面からの研究を進めた。大型プロジェクトの模様を『都市デザイン研マガジン』は、「巨艦プロジェクト、決意の船出!」「京浜臨海工業地帯-京浜巡りの旅-」と報じた。「巡りの旅」とは、ツーリズムであり、海を渡った英国17世紀のグランドツアーの現代版を思わせる。

2006年3月、CDE京浜臨海部再生アクションスタディの最終報告会が行われ、2年間のプロジェ

クトを終了した。それにしても、風情のある風の盆の越中八尾のまちづくりから、怒涛のアクション京浜臨海チームまで、壮大な世界を包括しての都市デザイン研究室プロジェクトシステムの懐の深さは、マガジン悉皆調査で一気に浮上した実相である。

## 『都市デザイン研マガジン』 京浜臨海

<p>10号 2005.9.1</p>	<p>京浜臨海プロジェクトは、2004年度にスタートした臨海部再生プロジェクト。工場、運河、廃線跡などの再生活動を通して、都市空間の持続再生学の創出をめざし、初期の成果を収めて2005年度で終了している。</p>
-------------------------	--

### 10号 (2005.9.1)

#### トップ 持続的都市再生 京浜臨海部再生プロジェクト

##### 21世紀COEプログラムの位置づけで活発化

京浜臨海部再生プロジェクトは、昨年度より21世紀COEプログラム「都市空間の持続再生学の創出」にも位置づけられた、大規模工場地帯の再生プロジェクトです。面積にして4400haという広大な地平に、北沢教授をコーディネーターとして、30名以上の研究者・大学院生らが関わり、横浜市と協力しながら、それぞれの分野で京浜臨海部工業地帯の再生について、けんけんがくがく議論を交わしております。昨年度末には、COE研究者、横浜市、民間企業も集まって行われたワークショップを始め、8月4-5日にもワークショップが開催されるなど課外でも活発に活動しています。当研究室では、M2 黒瀬、大谷、M1 早坂、柴田らが健闘しております（昨年度はOB小林氏も大健闘でした）。浅野総一郎を始めとして、明治後期から民間企業の進出を中心に築き上げられた京浜臨海工業地帯ですが、およそ100年を迎え構造変革が求められるとともに、なかなか市民の立ち入ることのできないこのエリアにも、隠された資源がたくさん残されております。持続的な都市としての京浜再生計画に乞うご期待。



意外と緑も多い工業地帯



空いている石油タンク



自然緑化？ 廃線跡



ダイナミックな製粉サイロ



京浜臨海部再生ワークショップ (3月) 臨海部らしいクレーン



### 13号 (2005.10.15)

#### 京浜プロジェクト・チーム、北欧に飛ぶ

9月5日、黒瀬M2・柴田M1 は、イタリアWS の開幕に先駆けて渡欧。京浜臨海工業地帯プロジェク

トのための、ウォーターフロント開発実例調査として、北欧・ドイツを回った。2人は2週間の行程ののち、アルプスを越えてイタリアWSに合流した。

9月6日朝、ストックホルム・アルランダ空港到着。冷気と、北欧らしい空気、人工物（空港エントランス前の螺旋型立体駐車場）と自然物の距離感に息を飲む。事前に聞いていた物価高を目の当たりにしへこむ。訪問した都市は順に、ストックホルム、オスロ、マルメ、コペンハーゲン、ハンブルグ。



ストックホルム・ハンマルビー



コペンハーゲン・王立図書館



ハンブルグ・HAFEN CITY

### 容赦ない開発の勢い実感

いずれも容赦のない開発に勢いを感じる。個人的には、（プロジェクトオフィスの方にヒアリングが出来たこともあり）ハンブルグのHAFEN CITYに魅力を感じた。行政がジョイントベンチャーという形でプロジェクトマネジメント（以下PM）オフィスを立ち上げ（このオフィスは民間企業）、行政内のセクターと連携を図っていることに強く興味を覚えた。これは日本ではありえない。

PM自体も時間経過、既存市街地との相互関係性、サイト内での役割分担などがよく考えられており、組織としてもうまく機能していることがうかがえた。今後の開発のポイントは、将来のランドマークとなるヘルツォーク&ド・ムーロンのリノベーションやレム・コールハースの集合住宅。17日に調査終了、20日朝のローマ入り・合流を目指す。ドイツを転々としつつ19日にミュンヘン着。オクトーバーフェストに殴り込みをかけ、21時の夜行へ飛び乗った。（M1 柴田直）

### 25号（2006.4.15）



北欧BF事例の発表をする柴田M2

### 京浜臨海部再生研究会 中間報告会開催

桜満開の去る3月30日、横浜 BankART1929yokohama にて、京浜臨海部再生研究会の2005年度中間報告会が行われた。旧第一銀行横浜支店である歴史的建造物を活用した荘厳なホールに、研究会メンバー、横浜市を中心とした約70人が集まり、発表を行った。

東京大学 COE、京浜臨海部アクションスタディメンバーによる、環境（廃棄物処理）、歴史資源、ストック、土壌汚染、建築意匠といった多様な側面からの研究及び、欧米の先進事例研究が発表された。当研究室からは、OB 黒瀬武史（本年3月修了）が北米ブラウンフィールド（以下BF）再生制度、方法・技術、事例の発表、M2 柴田直が北欧のBF再生事業の発表を行った。

また、鈴木伸治横浜市立大助教授（元・研究室助手）らを中心とした戦略研究チームにより、京浜臨海部守屋町地区・末広町地区の提案が示され、これらを元に熱い議論が交わされた。

その後はホールを模様替えして懇親会。参加学生の皆様、グラス洗いまで手伝っていただき、ごめんなさい。このご恩は、今年度も熱い京浜プロジェクトにて。（野原卓助手）

## 26号 (2006.5.1)

トップ 春本番・プロジェクト、自主活動一斉始動  
積極参加 M1、早くも多忙週間 京浜臨海再生プロジェクト

4月24日(月)17:00 京浜臨海再生プロジェクト 柏・北沢研のメンバーは全員参加。「歴史」色の強い他プロジェクトと一線を画す当プロジェクトは、M1の参加希望ランキング・トップ。「ブラウンフィールドなど、これまであまり考えたことのないトピックが新鮮だった」(八尾プロジェクトとの「かけもち」を検討するM1)

## 29号 (2006.6.15)

トップ 京浜・船上見学会  
巨艦プロジェクト、決意の船出

あまたの研究室と行政・企業を巻き込んだ一大プロジェクト「京浜臨海部再生研究」が今年も轟音をあげて動きだした。2006年はCOE最終年度、成果が求められる3年目である。その重要な舵取りを担うメンバー達が、先週、船上からの現地見学会にのぞんだ。新加入・M1奥田が詳細を伝える。(text,photo ishii)



左上から 白き快速船出帆/煙もくもく日本のダイナモ/工業島・扇島を背に真剣/首都高下の運河/満漢全席の誓い

6月7日、豪雨のち晴天の天候の中、デザイン研メンバーを乗せて横浜の海へ船が出港しました。乗船したのは、野原助手、M2柴田・早坂、M1鄭・平林・砂川・松尾・任・石井・筒井・吉田・奥田、そして今回の乗船会をコーディネートしてくださった都市工0Bの福島様(東亜建設)の13名。直前の豪雨を受けて、思いのほか揺れの激しい船に一同不安を抱えながら、大棧橋たもとからMM21を一望しつつ川崎工業地帯までの約2時間のクルージングとなりました。立ち並ぶ石油タンク、「ハウルの動く城」のような工場、蒸気立ち上るアルミ工場など、初めて見る海からの工業地帯は圧巻でしたが、一方で鼻をつく海の匂いや老朽化する護岸など京浜臨海部の問題点も肌身で実感。各自の問題意識が高まりました。

後は福島さんを変え、中華街で懇親会が開催されました。自己紹介と得意技の披露がおこなわれ、メンバーの意外な一面が明らかに。柏と本郷、このメンバーで京浜臨海部の問題に立ち向かっていこうと氣勢を揚げたのでした。(M1奥田紘子)

## 44号 (2007.2.10)

トップ 「巨艦」京浜PJ、順航裡に帰港近し  
年度納めのシンポジウム大盛況  
そして京浜は続く



ラウンドテーブルディスカッションの様子



北沢教授あいさつ



シンポジウムポスター

「都市のエンジンとして日本の 100 年を支え続けてきた京浜工業地帯のこれからを考える」 まばゆい赤レンガ倉庫の煉瓦色を縫うように白い初雪の舞う 2007 年 1 月 20 日(土)、フラットスラブに日本郵船倉庫時代の残り香漂う BankART Studio NYK にて、一般公開シンポジウム「京浜工業地帯から都市再生を考える-ブラウンフィールドへの提言」が開催された。

大西隆教授の基調講演「逆都市化時代の工業地帯の変容」で幕を開け、東京大学 21 世紀 COE 京浜臨海部再生アクションスタディチームのプレゼン、金田孝之横浜市副市長、岡部明子千葉大准教授の問題提起と続き、総勢 14 名によるラウンドテーブルディスカッションと、休む間もなく続く白熱した議論に圧倒される聴衆であった。

京浜プロジェクトメンバー、宋(D2)・伊藤・奥田・筒井・砂川・平林(以上 M1)の大車輪の活躍、昼夜問わず勤しんだ事前準備、坂内・ポンサン・吉田の緊急サポート、塩沢表紙デザインによる「京浜臨海部再生スタディレポート」は売切御免、A1 計 5 枚に及ぶ怒涛のパネル展示は聴衆の目を釘付け。その結果、観客動員数 100 名という予想を大幅に超える 150 名以上の参加者に、横浜の気温も急上昇。シンポジウム後に行われた交流会。そして夜の横浜 night へと、冷めやらぬ熱気に、雪は雨へと姿を変えたのでありました。(野原卓助手)



研究室 5 大プロジェクト中唯一の COE プロジェクトとして、大きな資金力・社会的発信力を持つとともに、少なからぬ重圧をも背にした京浜臨海プロジェクト。締め切り前の多忙ぶりに立ち会った記者は、M1 を中心としたプロジェクトチームの「優秀」としか形容しようがない立ち働きぶりに圧倒された。一方で、研究科あけてのプロジェクトといいながらも、他の研究室の活動と全く独立に、それこそ、「タコツボ」式に、仕事が進められていくさまに、「学際」への遠い道のりを見たような気もした。



※ bannaï  
遅れゆく締め切り間際の京浜戦士たちに合掌...

研究室 5 大プロジェクト中唯一の COE プロジェクトとして、大きな資金力・社会的発信力を持つとともに、少なからぬ重圧をも背にした京浜臨海プロジェクト。締め切る前の多忙ぶりに立ち会った記者は、M1 を中心としたプロジェクトチームの「優秀」としか形容しようがないながらも、他の研究室の活動と全く独立に、それこそ、「タコツボ」式に、仕事が進められていくさまに、「学際」への遠い道のりを見たような気もした。(bannaï)

47 号 (2007.3.25)

京浜プロジェクト報告会

去る3月28日、横浜市赤レンガ倉庫ホールにてCOE京浜臨海部再生アクションスタディの最終報告会が行われた。各研究室からパネル34枚も展示、北沢教授をコーディネーターに、横浜市経済観光局、都市整備局の職員も含め、3年間京浜臨海部再生を考えてきた研究会メンバーが互いの研究の成果を発表した。

研究発表メンバーには野原助手はもちろん、黒瀬武史OBの姿も。自身の修士論文のテーマである海外のBF再生事例について発表、続くラウンドテーブルディスカッションは「ようやくこういう立場に立てて嬉しい」と謙虚に口火をきりつつ、堂々と論を戦わせた。

我々京浜チームはといえば前日の資料作りから、当日は会場設営・運営のお手伝い。夜は麒麟ビール工場内のビアレストランにて、報告書作成の前のプチ打ち上げ。またも車のためのノンアルコールの野原助手の一年の労をねぎらいつつ、工業地帯の熱い夜は更けていくのであった。(M2 伊藤雅人)

### チーム野原、打ち上げ

年度末の押し詰まった3月31日、飯田橋のタイ料理店で行われた、喜多方・京浜プロジェクト合同打ち上げ、こと、「チーム野原」飲み。野原助手のもとで仕事をこなす一騎当千のプロジェクト勇者たちが、日ごろの苦労をひととき忘れて、喉を潤した。

恒例「野原賞」は、喜多方・京浜両現地への往復に使えるようにと、PASMO。各プロジェクト内での推薦、ジャンケンを経て、奥田M1が獲得した。(bannai)



野原助手には一同から感謝の気持ちを込めビアジョッキを贈呈

### 76号 (2008.6.10)

#### 走った！ 京浜臨海工業地帯-京浜巡りの旅-

京浜巡りに行ってきました。野原先生の運転のもと朝11時に桜木町を出発し、横浜市中央卸売市場から始まった見学会ですが、旧造船所を開発したコットンハーバー、近年増えてきている研究機関、昭和電工や日産自動車の大規模な工場、巨大な流通施設などを見学したほか、フォークラリーの縦横無尽に行き交う出田町埠頭への果敢な侵入、車の中で「大黒ふ頭で～」と歌い出すK君など、ハプニングも目白押しでした。

しかしやはり最も印象深かった風景は、鶴見線終着駅の特異な風景でした。電車待ちの東芝社員でいっぱいプラットホーム、そのすぐ後ろに見えるのはようようと波打つ東京湾と対岸の巨大な倉庫群。日常的風景と、テクノロジーと自然物の生み出す風景の対比が面白かったのかもしれませんが。野原先生、運転お疲れ様でした。(nakashima)



## 12. 都市空間の構想力 全国駆け巡り調査

### 歴史現象と運動論的視野でダイナミック

スタティックな空間の読み取り・空間形成技法の解釈のみではなく、空間における時間の流れをさかのぼりながら、その土地・空間に内在する「構想力」を解き起こしていくダイナミックな作業を想定している。（西村幸夫）『都市デザイン研マガジン』19号（2006.1.15）



都市デザイン研究室ホームページ「構想力プロジェクト」のフロント 2009年度

#### 10年の悲願

「都市空間の構想力」は、西村幸夫の10年の悲願をプロジェクトに落とし、欧州でも前例がないジャンルの構築を開始した。これまでの地図・写真・文献を使った都市空間の歴史的読み解き作業の方法論と違うところは、都市全体との関係を考え、より幅広い視点から個別空間にアプローチする手法である。

このプロジェクト誕生の前兆をスクープしたのが、『都市デザイン研マガジン』坂内編集長による教授西村とのインタビューである。2005年1月13日発行の第19号である。ここで西村がこの悲願の達成を語ったのである。息詰まるインタビューの様子は、誌面紹介のところで熟読してほしいが、情熱・濃密・総合講義で有名な学者西村が、ここまで多様な業績を展開しながら、なおも秘すこと10年の悲願を持ちつづけていたことに感嘆する。

1996年に同題『都市空間の構想力』が吉原直樹編で勁草書房から出ているが、それは広義の社会学であり、西村の都市工学を踏まえたまちづくり構想力とは異なる。ちなみに、吉原は社会学者で東北大学大学院文学研究科教授、社会学博士で、専門は社会学、都市社会学、地域社会学である。

西村の都市空間の構想力は、このインタビューの1年後には、西村幸夫＋東大都市デザイン研究室執筆による「都市空間の構想力」というタイトルで、学芸出版社の『季刊 まちづくり』2007年1月号13号から2008年9月20号まで8回連載された。プロジェクトメンバーが全国を駆け巡り、データを迅速に収集した成果が活かされた。

この全国迅速リサーチは、西村研究室の得意技で、2004年4月の同誌創刊号から誌面を飾った「眺望景観のパースペクティブ」の際も、今回と同様、研究室メンバーが一斉に全国を駆け巡り、「都



道府県庁所在都市調査 日本の眺望景観 東日本編」と「西日本編」の2回に分けて連載した。そのエネルギーぶりは、私が同年12月に刊行した『西村幸夫「都市保全計画」』に、「日本の眺望景観が見える・見る」の項を立てて詳述し、「コメントは、スペシャリスト集団だけが可能と評価できるシャープで的確な文章表現だった」と言葉を添えた。今回は、それ以上の総合力である。

西村はインタビューで「史跡めぐりやまち観光案内にとどまらないタウン・トレイルを確立させたい。これはヨーロッパでもまだ例が少ない」と述べているが、タウン・トレイルは西村が通曉していた英国のシビクトラストのまちあるき、まち観察の手法であり、アメニティとシビクトラストを研究していた私は、1994年の山形県の「未来に伝える美しい山形づくり」策定に加わり、その実践として「タウン・トレイル公募事業」の審査委員長を務めたことがある。そのため、西村の「タウン・トレイユ」発言に惹きつけられた。

西村によれば、2005年12月にオギユスタン・ベルク特別講義を都市工学科主催で開催した際、ともに研究室メンバーが本郷界限まちあるきしたときの成果を、総合的に超えての構想力構築である。

## 『都市デザイン研マガジン』 都市空間の構想力

<p>19号 2006.1.15</p>	<p>都市空間の構想力プロジェクトは、19号の西村教授との坂内編集長の会見記事が前兆であり予告である。40号で始動と載り、実質プロジェクト化した。</p>
--------------------------	---

19号(2006.1.15)

仮題「都市空間の構想力」の解き起こし

西村教授単体会見「ベルクまちあるきその後」

北沢猛教授との新春対談(前号掲載)を終えた西村幸夫教授に、出張の飛行機発までのわずかな時間を頂いて、主として「ベルクまちあるき」プロジェクトその後についてお話をうかがった。(本誌坂内良明 M1)

マガジン：今後の短期的な作業はどうなりますか？

西村：「資料集」をぜひ雑誌上で発表したい。班ごとのバラつきをあるていど統一してから。

マガジン：今後の当プロジェクトの目標はどのあたりに？

西村：件のまちあるきの「発展的拡大」。といっても、あの作業を絨毯爆撃的に他地域に広げていくわけではむろんない。仮題としては「都市空間の構想力」。スタティックな空間の読み取り・空間形成技法の解釈のみではなく、空間における時間の流れをさかのぼりながら、その土地・空間に内在する「構想力」を解き起こしていくダイナミックな作業を想定している。



### ■構想十年、満を持して始動

「都市空間の構想力」は西村教授が長年にわたって温め続けてきた「悪願」のプロジェクトであった。右のレジュメ(中島助手の提供)は、2000.8.15の日付入り『都市空間構想力』出版計画。「コントラストを仕掛ける：驚きの美」「路傍の物語性：神が宿る細部」など、魅惑的な章立て案が並んでいる。



マガジン：もう少し具体的にいうと？

西村：たとえば、日本の典型的な都市空間をいくつかピックアップして、件の「まちあるき」様の作業をやってみる、とか。その中から何らかの原理を発見してゆく、という形だろうね。

マガジン：「ベルク」作業中、「『日本の都市空間』と一緒にしているような気がする」という声もありました。

西村：たしかに『日本の都市空間』は優れた一つの到達点。ただ、あれはあくまで都市空間をスタティックに切り取る作業。めざしているのは、都市全体との関係を考えるなど、より幅広い視点から個別空間にアプローチすることだ。

マガジン：地図・写真・文献を使った都市空間の歴史的読み解き作業の方法論は、既におおむね確立されていますよね。

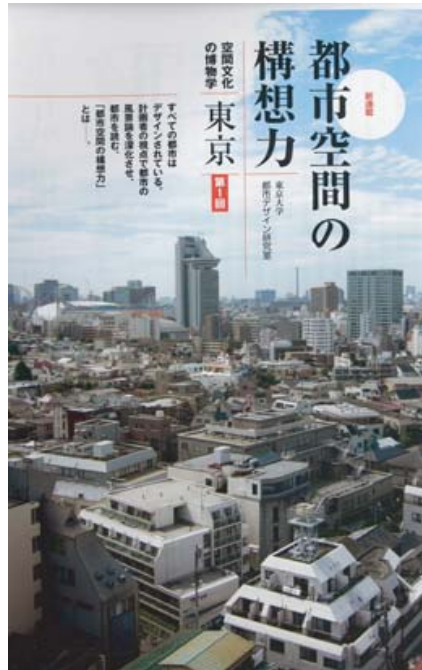
西村：方法論としては出尽くしている、と言うか、実際に使える材料が限られている。単に都市空間の歴史を現象的にひもとくのではなく、運動論的な視点を大事にしたい。まちに住む生活者が都市空間への関心を深め、まちづくりに関わるきっかけとなるような空間読み解き作法を提示したい。史跡めぐりやまち観光案内にとどまらない「タウン・トレイル」を確立させたい。これはヨーロッパでもまだ例が少ない。

マガジン：ダイナミックな「都市空間構想力」プロジェクトは、『都市保全計画』のような大著に結実するのでしょうか？

西村：ううん、大著は時間がかかるから（笑）。忘年会でも言ったが、「構想力」は独りではできないプロジェクトだ。若い皆のエネルギーをいかに発揮してもらうかに成否がかかっているね。

40号(2006.1.15)

### 「都市空間の構想力」始動



連載の表紙は、14号館からの本郷のまちの眺め。ベルク教授をして「時化のよう」と嘆かしめた市街地だが、西村イズムはここにも様々な物語の重層を聞き取る。

西村教授が長年にわたってあためてきた企画「都市空間の構想力」（本誌第19号参照）が『季刊まちづくり』2007年1月号（今12月に発行）から堂々の連載スタートとなった。都市を丹念に歩

き、細やかに眺めることによって、都市空間に織り込まれたさまざまな意図の積層を、都市空間自身が持つ「構想力」として読み取ること。都市デザイン研究室のまちあるきで常から意識されていることが、「空間文化の博物学」としてトピック毎に誌上展開される予定だ。

連載第1回では、西村教授の各まちにおける「都市空間の構想力」が読み解かれた昨年12月に実施された「ベルク本郷まちあるき」の総集編とも言うべき内容になっている。(bannai)

## 46号(2007.3.10)

### 「都市空間の構想力」連載第2回

今3月号の『季刊まちづくり』に、西村教授主宰の連載「都市空間の構想力 空間文化の博物学・東京」第2回が掲載。「地形」がテーマの第2回は、西村リード文に続いて、「坂の連なりが一体の地域を浮かびあがらせる」「谷あいと高台が相俟って体を成す」「兩岸を分かたず溪谷が地域を束ねる」の3本立て。日ごろのまちあるきから得られた「構想力」が、豊富な事例で語られている。

構想力チームでは目下、次回テーマ「みち」に向けて最終原稿を執筆中。次々回以降への参加者も、ひろく募集中だ。

「新宿を除く他プロジェクトでは同チームになることのない中島、野原両助手が参加するミーティングでは、貴重な両者の激論を目のあたりにすることができる。今のM1、4月からの新M1にも、気軽に参加してもらいたいねと中島伸D1。(bannai)

## 80号(2008.8.10)

### 構想力キックオフ！！

西村先生による都市空間の構想力の執筆へ向けたキックオフが去る7月22日に行われました。都市空間の構想力は、季刊まちづくりの全8回の連載に新たな視点を加えて、より多角的な視点で町を読み解くことを目的としています。参加メンバーであるM1は先日、町を読み解くことを目的に、本郷界隈の町歩きをしました。



本郷町歩きの様子

メンバーはまず、夏の休暇を利用してプロジェクトで関わっている町など様々な町で「面白いと感じたところ」や「気になるところ」などを探します。皆さんも夏にどこかへ行かれてその町で面白い空間を感じたら、ぜひ参加してみたいかがでしょうか？(N1 西川亮)

## 94号(2008.8.10)

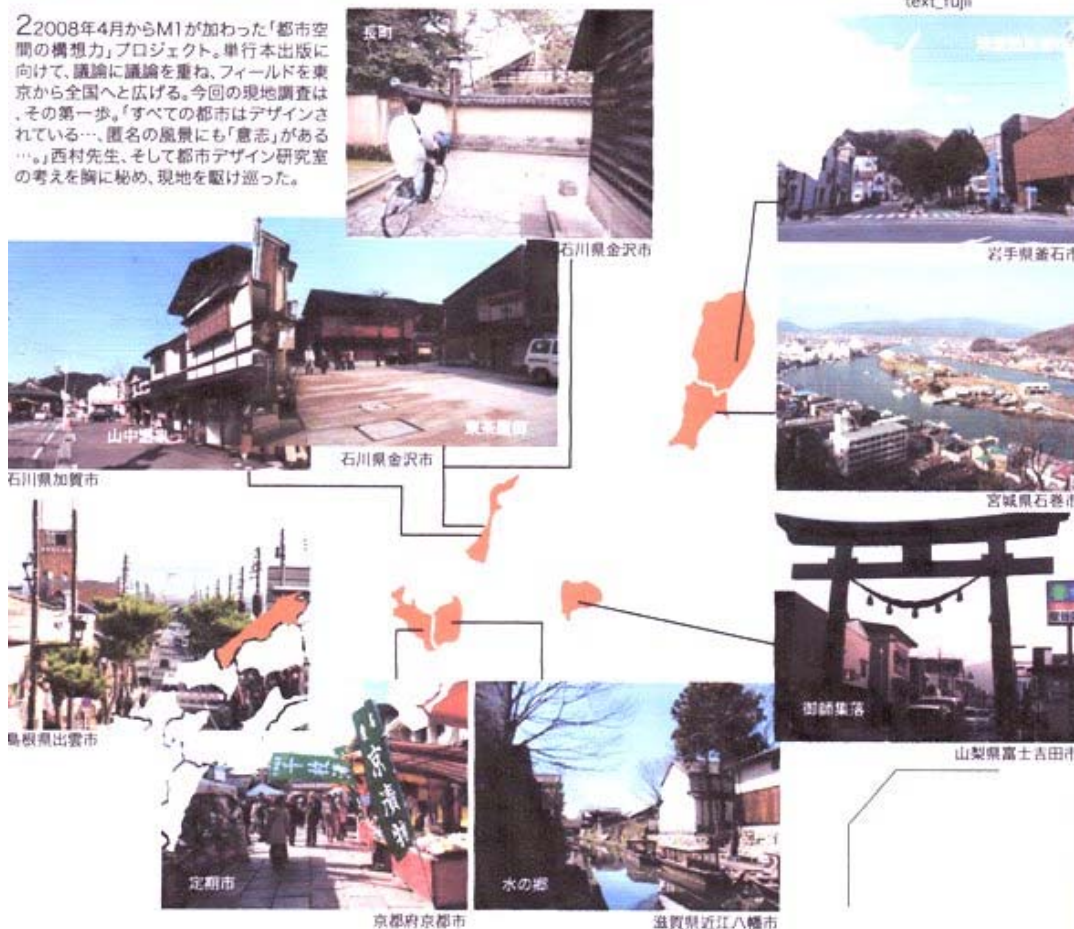
### トップ 全国各地を駆け巡る 都市空間の構想力現地調査

2008年4月からM1が加わった「都市空間の構想力」プロジェクト。単行本出版に向けて、議論に議論を重ね、フィールドを東京から全国へと広げる。今回の現地調査は、その第一歩。「すべての都市はデザインされている...、匿名の風景にも「意志」がある...。」西村先生、そして都市デザイン研究室の考えを胸に秘め、現地を駆け巡った。(fujii)

編集後記 都市空間の構想力の現地調査で私の地元でもある出雲市を調査してきました。もしかしたら地元が本に掲載されるかもしれないと考えるとなかなか嬉しいものですし、頑張れる気がします。来年度には本が出版される予定です。それまで更なる議論と調査を行い少しでも貢献していきたいと思います。(fujii)

## 全国各地を駆け巡る 一都市空間の構想力現地調査一

2008年4月からM1が加わった「都市空間の構想力」プロジェクト。単行本出版に向けて、議論に議論を重ね、フィールドを東京から全国へと広げる。今回の現地調査は、その第一歩。「すべての都市はデザインされている…、匿名の風景にも「意志」がある…」西村先生、そして都市デザイン研究室の考えを胸に秘め、現地を駆け巡った。



### 補遺

2010年3月14日、東大工学部11号館で「アーバンデザイナー・北沢猛氏の軌跡」(北沢先生の業績を思う会実行委員会)が開催され、横浜市都市デザイン室時代、東大都市デザイン研究室時代の岩手県旧大野村、福島県喜多方市のプロジェクト実践およびUDCK(柏の葉アーバンデザインセンター)活動についての報告に共通していたのは、北沢猛の総合と構想力の評価だった。

私は「都市デザイン概論」を聴講し、横浜での課外授業も受け、ナショナル・アートパークやインナーハーバー構想の話も聴いたが、「総合」と「構想力」と「モノからココロへ、市民の幸福のために」と強調され、レポートの課題も白紙から「都市を構想せよ」というものだった。私はリアルな構想ができなくて、「マチュピツ・ラテン研究基地」といった空想的レポートを出した。苦笑されたに違いない助教授北沢の顔が目に浮かぶ。

京浜臨海部再生プロジェクトの指導は、体調から現場指導は無理ではなかったか。横浜市都市デザイン室時代は、前半は地道な歴史部門の開拓、後半は都市デザイン運動の展開だったと、同市都市整備局エグゼクティブアーバンデザイナー国吉直行が、回顧スピーチで強調していた。

北沢の薫陶を受けた助教野原卓が「京浜臨海部再生プロジェクト」を率いている状況が、上記マガジンで報じられているが、その野原は大野村、喜多方市といったおよそ横浜とは対蹠的な内陸地方の農村や中小都市のプロジェクトの指導に、北沢とともに当たりながら、学位論文が「日本の工業都市空間における計画概念とその実践的展開に関する研究」だったことで、スケールの大きさを再認識した。

<ベルク本郷まちあるき>

『都市デザイン研マガジン』94号は、『季刊まちづくり』の「都市空間の構想力」の連載第1回は、「ベルク本郷まちあるき」の総集編ともいうべきと伝えている。2004年12月5日、都市工学科主催で14号館141会議室において開催されたフランス国立社会科学高等研究院教授オギュスタン・ベルクの「近代コスモス喪失の中での風景」と題する特別講義の前日、都市デザイン研究室メンバーが4班に分かれて精査しておいたコースをベルクとともにたどったのが、「ベルク本郷まちあるき」である。

『都市デザイン研マガジン』17号(2005.12.15)は、「ベルク本郷ツアー、雨中に完全実施 1ヵ月足らずで都市読み解き資料集を制作」の見出しで、トップ記事として次のように報じた。「都市空間構想力」プロジェクトの核心が示唆されている。

オギュスタン・ベルク博士来学を契機に、西村教授の提案で立ち上げたベルク本郷ツアーチームは、1ヵ月足らずで『本郷台地の都市空間 東大本郷キャンパス周辺まちあるき資料集』を仕上げ、12月4日(日)雨のなか十数人が参加し、ベルク博士とまちあるきを完全実施した。西村提案があったのは、10月25日の冬学期第1回研究室会議で、こうした都市の読み解きを毎年行うことが宿願だったという趣旨だった。11月4日に4班が編成され、現地調査とミーティングと徹夜作業の上に成果を問うた。班別は最終的に菊坂町・真砂町、森川町・台町、西片町、東片町・追分町となり、昼食会は江戸金魚老舗経営のレストラン「金魚坂」で行われた。私は西片班に参加した。



本郷まちあるきのベルク教授と西村教授

## 13. 大田プロジェクト モノづくりのまちづくり



都市デザイン研究室ホームページ「大田プロジェクト」のフロント 2009年度

## 都内最大の工場集積地

「大田区は、産業のまちである。ナショナルテクノポリスと呼ばれる工業をはじめ、商業、農業、漁業などの産業が、区民の生活を支え、豊かな文化を生み出してきた」とあるのは、1995年に制定された「大田区産業のまちづくり条例」の冒頭である。

大田区は太田区だったかどうかとよく迷われる。高級住宅地・田園調布、池上本門寺、馬込文士村、大森貝塚、羽田空港など、住宅地帯として知られているが、実は有数のモノづくり工業地帯である。区の大部分を占める平野には市街地が広がり、ビルやマンションなどが立ち並ぶ一方、京浜運河より東側は埋立地で、物流拠点や工業団地がある。まちなかの町工場が多い。

大田区は、大森に東京ガスが20世紀初頭に工場をつくって以来、都内最大の工場集積地を形成し、川崎市、横浜市とともに京浜工業地帯の中核である。中小企業が多く得意分野に特化している。

そうしたまちなかのモノづくり製造業を見直し、まちづくり、観光をという視野で2009年度に立ち上げたのが、「大田プロジェクト」である。東大の都市デザイン研究室の野原卓、同研究室出身の首都大東京の岡村祐と横浜国立大の合同編成である。研究室ホームページの「大田プロジェクト」を開くと、「OTA PROJECT モノ-まちづくり」と出てくる。

そして、大田区のキャラクターとして、2005年の工場数は4778件で、依然都内1位、従業員数1~3名の工場が50%などと数字を示してから、「モノづくりからモノづくりを資源とした地域の将来像は？ まちづくりへ」とうたい、「モノづくりのまち研究」を挙げている。インタビュー調査などを通じて「技術や製品といった単なる産業の枠を越えた工場の魅力とは何か」を追った。

工場建築調査で、大田区のモノづくりの魅力は、職人がその腕を持ちながらも工房でモノづくりを行い暮らす佇まい全体ではないかとして、工場ビル、工場アパート、工場町家と分類してそのたまたままい全体を追求している。

そうした活動のうち、観光まちづくり意識とみられる「モノづくり観光研究」が行われる。「職人-技術-成果」図鑑の作成のほか、「工場案内人」育成システムをうたい、モノづくり文化芸術のための「モノ-づくりデザインセンター」の可能性を探る。

メンバー募集が載っている。「大田区に行ってみよう」「町工場に行ってみよう」「好きな用途地域は準工業地域」「観光都市に興味がある」「野原さんに教わりたい」「他大学と関わりたい」「まちなかの人の生活に触れたい」「新しい研究分野を開拓したい」といった内容のうち、「観光都市」あたりに、観光まちづくり意識がうかがえる。

野原は、大野村のような農村に関心があるだけでなく、むしろ本命は京浜臨海はや大田区のモノづくりにあることが分かる。博士論文も京浜関係のテーマであり、大田プロジェクトも満を持してのことであろう。野原が横浜国立大准教授として転出した後は、東大まちづくりプロジェクトは同大学と中島直人が専任講師になった慶応大SFC(湘南藤沢キャンパス)と提携して発展していく可能性がある。

博士課程だった岡村とは私も同じ研究室だったので、岡村が首都大助教になったあと、区と首都大共催で催された池上本門寺界隈のまちあるき調査の際、グループ分けで岡村チームに参加したことがある。そのとき、「観光科学科」の名刺をもらい、観光まちづくりの拠点になる可能性を感じたのである。

## 14 . 田村地域アーバンデザインセンター(UDCT)

「都市はどうあるべきか」は、「私たちがどう生きられるか」とほぼ同義である。持続する都市が基本にある。アーバンデザインは、個々の人の生き方や生活の質、そして将来市民の生活、さらに自然や地球システムの維持にいたるまでの統合デザインとなる。環境と社会、経済という位相を行き来する発想や原理を見いだしていく、まさに空間を通して統合する未来設計となる。(北沢猛)『都市+デザイン』2008年8月号巻頭論文。



都市デザイン研究室ホームページ「田村プロジェクト」のフロント 2009年度

### 研究室ホームページに「田村プロジェクト」

北沢猛が2005年、柏キャンパスに新領域創成科学研究科社会文化環境学教授(工学系研究科・工学部兼任)として赴任し、空間計画研究室を開くとともに、2006年に柏の葉アーバンデザインセンター(UDC)を柏市に開設し、センター長として各地にまちづくりのための「地域UDC」の開設を開始した。UDCのあとに地域名のイニシャルをつけ、柏ならUDCKとなり、福島県田村市につくった田村地域デザインセンターは、UDCTと略称された。

都市デザイン研究室ホームページに、「田村地域プロジェクト」(画面はTAMURA UDCT)と載っているのがそれである。「東京大学空間計画研究室と田村市の共同研究」が2007年にスタートし、2008年8月に田村地域アーバンデザインセンターが開かれ、専門家(東大研究員)が駐在して運営する拠点となった。都市デザイン研究室ホームページ「田村プロジェクト」は、2009年度の登場である。

田村市は、東京から2時間半、郡山から30分。かつて葉タバコ産業と石灰産業で栄えたが、セメント工場撤退による中心市街地の空洞化が進んでいる。住民によるまちづくりが盛んである。とくに花にかかわる活動が目立つ。

UDCは、公民学(新しい公共)を打ち出している。田村プロジェクトの方針は、5つに分けて分かりやすく掲載されている。

「農」:「田園風景」の保全・活用

「石」:「石灰資源」の活用と発信。「石灰」を軸に、観光・交流面において大越地域をPRしていく。石灰観光ツアー おおごえらいぶ(工場跡地のライブ活用) 石灰が育む「健康」食品  
石灰都市サミット

「駅」：移動交通の充実と拠点地区のまちづくり

「娯」：地域文化交流の中心としての「大越娯楽場」の再生

「人」：まちづくりに係わる「人」の思いと活動の連携

都市デザイン研究室ホームページの「研究室の紹介」には、「2010年度卒業研究題目(学部4年生向け)」として、テーマが挙げられているトップに「福島県田村市船引町における葉たばこ産業依存の特色と変容 基幹産業の撤退が地域にもたらす影響に関する研究」が載っている。これは田村プロジェクトのリーダーだった修士2年の菊地原敏郎の修論である。『都市デザイン研マガジン』第5代編集長である。

田村地域アーバンデザインセンターが開かれ2008年には、横浜アーバンデザイン研究機構(UDCY)、郡山地域アーバンデザインセンター(UDCKo)がスターとしている。北沢猛センター長の逝去もあったが、本郷の都市デザイン研究室と柏の空間計画研究室との連動は不断につづいている。

## 『観光まちづくり』掲載のその他地域

ここで、『観光まちづくり』に戻り、東大プロジェクト以外に紹介されている地域はどこであったかを述べておかななくては、同書の全容捕捉とはならない。「観光まちづくりの実践」を中心とした主な地域を列挙しておく。写真の出典も同書である。

### 1. 「ゼロからのスタート、そしてトップリーダーへ～肥前浜宿(佐賀県)」



酒蔵通りでの「島田洋七の佐賀のがばいばあちゃん」撮影風景(2008年9月)

### 2. 「創造的に歴史を生きる～鯖街道熊川宿(福井県)」



いっぷく時代村



3. 有鄰館の保存再生からファッションタウンへ～桐生（群馬県）



買場紗綾市の様子（桐生市教育委員会）

4. 「生野方式」のまちづくり～生野（兵庫県）



コンソーシアムによるテストツアーの様子（朝来教育委員会）

5. 赤煉瓦倉庫の多様な再生活用で街のイメージを一新～舞鶴（京都府）



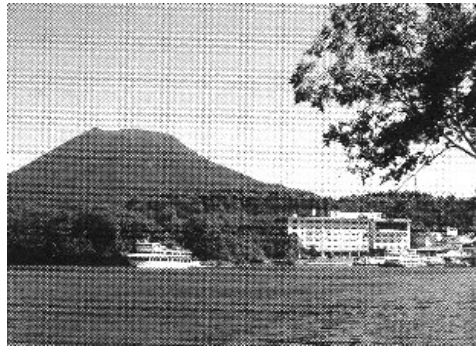
活用検討が進む赤煉瓦倉庫群

6. 「湯の町」の観光まちづくり～草津温泉（群馬県）



ライトアップされた湯畑（草津温泉旅館協同組合）

7. 地元の熱意と外部ノウハウの協働～阿寒湖温泉（北海道）



夏の阿寒湖温泉と雌阿寒岳

8. 全国にさきがけて町並み保存運動が起こった～妻籠宿（岐阜県）



妻籠宿の町並み

9. 昔からの萱葺き屋根復元など町並みの景観保存～大内宿（福島県）



大内宿の町並み

都市デザイン研究室ホームページ「プロジェクト」1997年度～1998年度に、「福島県・上中町（熊川宿）」がある。開くと「研究室プロジェクト」とあり、東大プロジェクトの走りであることが分かる。そのホームページには、文化庁文化財保護部「伝統集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討 報告書」（1998）の抜粋が現れる。報告者名はない。桐生と生野を書いた財団法人日本ナショナルトラスト主任研究員土井祥子は、東大都市工・修士課程修了である。